

年報

平成 28 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences  
公立大学法人大分県立看護科学大学



## 平成28年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学  
学長・理事長 村嶋 幸代

大分県立看護科学大学は、平成10年に開学後、平成28年度末で丸19年になります。開学以来、毎年、年報をまとめ、足跡を残してきました。

平成28年度には、認証評価を受けました。これは、全ての大学が7年毎に受けることを義務付けられている評価です。本学は、機関別認証評価と2種類の選択評価、即ち、「選択評価事項A 研究活動の状況」と「選択評価事項B 地域貢献活動の状況」を受けました。結果は、機関別評価が『大分県立看護科学大学は、大学設置基準をはじめ関係法令に適合し、大学改革支援・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている。』であり、選択評価事項Aが『おおむね良好である。』、選択評価事項Bが、『良好である。』でした。全体としては良好ではあるものの、これから、発表論文数の増加を含め、研究活動を一層活発にする必要性を感じました。

評価を受けるためには、自己評価書を始め、様々な書類を作成しなければなりません。これについては、年報が大変力を発揮しました。毎年毎年、地道にあゆみを積み重ね、成果を蓄積していくことの重要性を、改めて感じた次第です。

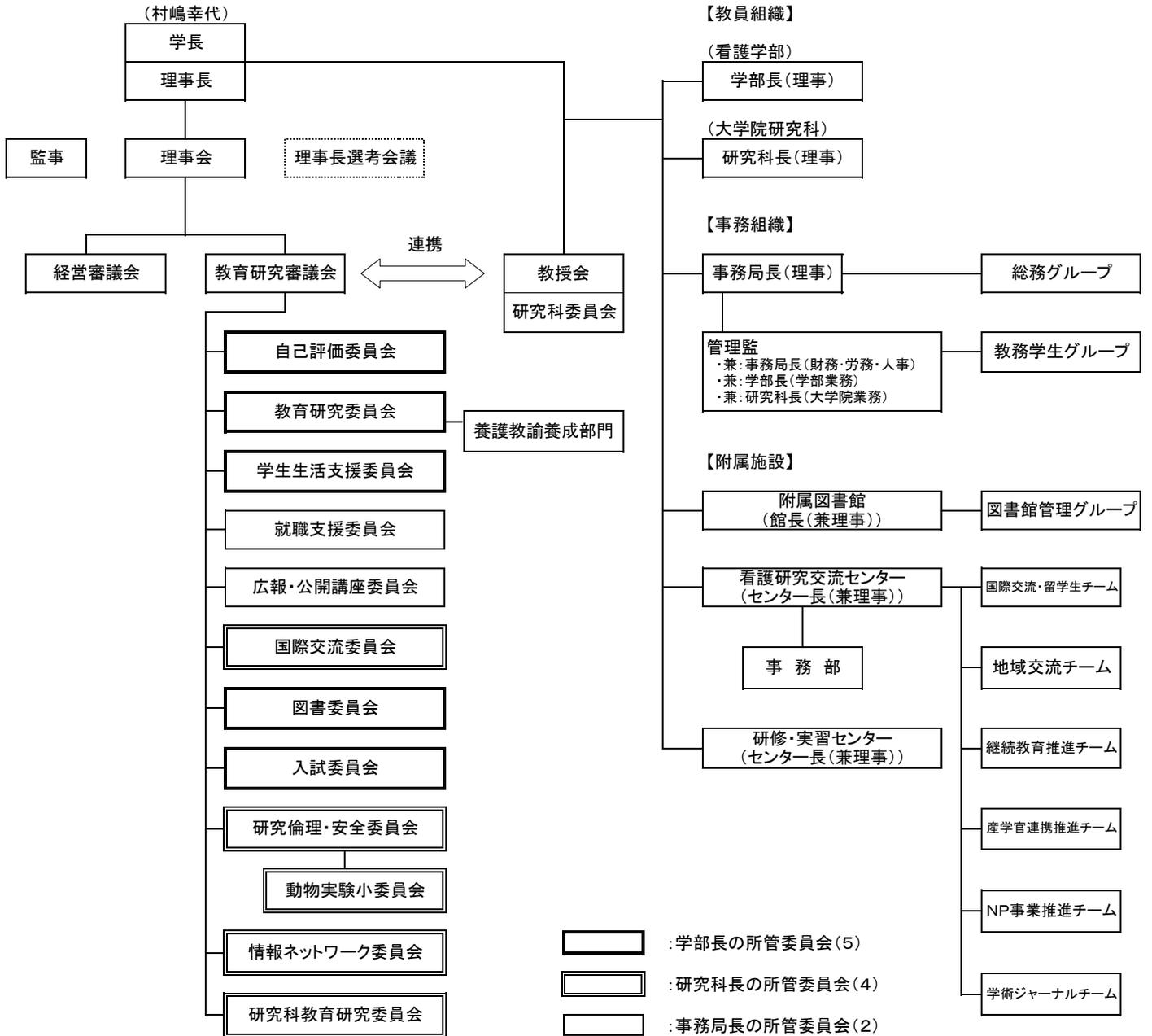
平成28年度には、嬉しいこともありました。平成25年度に文部科学省の「地(知)の拠点事業」に採択されて開始した「予防的家庭訪問実習」は、平成27年度から正規のカリキュラムとして実施されています。平成28年度には全学部生321名が、地元野津原地区と富士見が丘団地の協力者80名のお宅にチームで訪問していますが、その取り組みが、日本学術振興会の中間評価で、最高ランクのS評価を受けました。これは、全国76事業中7件(9.2%)でした。

本学は、開学以来、様々な開拓をしてきた大学です。本学が開始した大学院修士課程におけるNP教育は、「特定行為に係る看護師の研修制度」の創設につながりました。また、大学院修士課程での保健師教育は、全国で11校を数えるまでに増加しました。いずれも、教員と職員の協力と努力で開拓してきた取り組みですが、そういう実績が、この年報には詰まっています。

このような実績は、本学を大事に思い、支えてくださった方々のお蔭です。心からお礼申し上げます。本学は、これからも、大分県の看護学の拠点として、教育・研究・社会貢献を通して看護の水準の向上に努め、着実に歩みを重ねていきたいと思っております。年報をお読みになって、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



# 法人組織図



平成 28 年度 委員会等構成

委員会名	委員長	副委員長	委員				担当
自己評価	佐伯	関根	宮内	吉田	草野	緒方	藤内
教育研究	藤内	濱中	佐伯	吉村	川崎	石田	藤内
学生生活支援	林	小嶋	関根	岩崎(香)	巻野	樋口	藤内
就職支援	梅野	杉本	緒方	田中	足立		飯田
広報・公開講座	高野	安部(眞)	品川	石丸	後藤	恵谷	飯田
国際交流	シヤーリー	濱中	崔	伊東	堀	吉川	影山
図書	甲斐(倫)	宮内	山田	堀		江藤	藤内
入試			( 非 公 開 )				
研究倫理・安全	市瀬	平野	草野	杉本	秦	岩崎(香)	影山
情報ネットワーク	甲斐(倫)	品川	巻野	野津	恵谷		影山
研究科教育研究	影山	小野	甲斐(倫)	梅野	福田	赤星	影山
プロジェクト名	リーダー	サブリーダー	メンバー				
NPプロジェクト	小野	甲斐(博)	村嶋 濱中 草野	藤内 福田 森	高野 石田	佐伯 宮内	(飯田) (石倉) (浜松)
訪問実習プロジェクト	影山	藤内	村嶋 濱中 草野	福田 杉本	小野 定金	川崎 養野	宮内 (飯田) (石倉)
健康増進プロジェクト	稲垣		岩崎(宇)	秦	安部(眞)	巻野	田中
			佐藤(愛)	佐藤(愛)	緒方	田中	
部門・小委員会・ワーキンググループ名	部門長・委員長 ・リーダー		部門員・委員・メンバー				
養護教諭養成部門	吉村	伊東	関根	赤星	草野	秋本	浜松
実習運営小委員会	石田	川崎	森	佐藤(弥)	石丸	後藤	安部(眞)
動物実験小委員会	市瀬	影山	小嶋	定金	岩崎(香)	高橋	田中
国家試験対策小委員会	小嶋	石丸	山田	後藤	緒方	堀	染矢
看護又キルアツシ演習WG	伊東	林	佐藤(弥)	山田	足立	西部	吉川
実習改革WG	秦	小嶋	甲斐(博)	岩崎(香)	安部(眞)	巻野	宿利
進級試験WG	濱中	佐伯	石田	甲斐(博)	宿利		橋本
大学案内パンフレットWG	杉本	杉本	足立	西部	恵谷	秋本	橋本
学外Web-WG	品川	後藤	宿利				
英文Web・パンフレットWG	シヤーリー	桑野	岩崎(香)	江藤	馬場	中野	
ネットワーキングWG	品川	品川	甲斐	小嶋	染矢		
WindowsサポートWG	野津	野津	佐伯	樋口			
MacサポートWG	小嶋	小嶋	恵谷	石倉	石川		
フェースブックWG	野津	野津	田中	石倉	石川		
広報紙WG	飯田	飯田	西部	橋本	神崎(正)		
看護研究交流センター							
チーム名	チームリーダー		メンバー				
国際交流・留学生チーム	シヤーリー	福田	桑野	吉川	(馬場)	久保	
地域交流チーム	センター長	赤星	川崎	佐藤(弥)	岩崎(宇)		
継続教育推進チーム	伊東	樋口	後藤	佐藤(弥)			
産学連携推進チーム	濱中	樋口	樋口	(麻生)			
NP事業推進チーム	福田	草野	甲斐(博)				
学術ジャーナルチーム	平野	シヤーリー	定金	安部(眞)	(馬場)	(秋本)	白川

## 目次

1.	委員会／ワーキンググループの活動	1
2.	学内行事の概要	32
3.	教育活動	35
4.	学内セミナー	138
5.	学内プロジェクト研究	139
6.	先端研究	143
7.	奨励研究	146
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	151
9.	業績	152
10.	地域貢献	167
11.	助成研究	183
12.	各種研究・研修派遣	188
13.	学会研究者の受入	190
14.	役員及び審議会委員名簿	191
15.	教職員名簿	192

## 1 委員会／小委員会／ワーキンググループの活動

### 1-1 理事会

理事長：村嶋 幸代

理事：藤内 美保、影山 隆之、飯田 隆次（以上、学内理事）

津村 弘、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

監事：神品 実子、福田 安孝

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。

本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

平成28年度は、大分県立看護科学大学大学院学則の一部改正、公立大学法人大分県立看護科学大学における研究の倫理・安全に関する指針の一部改正などが承認された。また、大学機関別認証評価が実施され、この結果を受けて、平成30年度からの第3期中期計画の策定や、平成30年に開学20周年を迎え、今後の体制整備を行う重要な時期であることを報告している。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催した。

### 1-2 経営審議会

理事長：村嶋 幸代

委員：藤内 美保、影山 隆之、飯田 隆次（以上、学内理事）

津村 弘、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

千野 博之、上子 秋生、松尾 和行、松原 啓子（～5月迄）、竹中 愛子（6月～）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

平成28年4月の熊本大分地震についての被害状況、対応や課題、大学職員のストレスチェック制度実施要領の制定、平成29年度GPA制度、S評価の導入、公的研究費等に係る不正防止計画、大分県立看護科学大学教員昇任に関する選考基準の改定、大学事務職員の災害時における出勤ルールや学生等の安否確認方法、障がい者を理由とする差別の解消の推進に関する教職員対応要領の制定、任

意保険未加入の学生が実習で交通事故を起こした場合の大学の対応などについて、報告および審議を行った。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催した。

### 1-3 教育研究審議会

構成員 村嶋 幸代（学長）、藤内 美保（学部長）、影山 隆之（研究科長）、飯田 隆次（事務局長）、葉玉 哲生（学外委員）、各研究室代表者、各委員長

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は12回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。

平成28年度は、熊本大分地震における地域看護学実習及び在宅看護学実習の対応、学部入試改革タスクグループの設置、FD/SDの推進に向けた自己評価委員会の強化、助産学コースの学生確保を視野にいたした助産学シンポジウムを開催、「本学が置かれている現状と課題」の情報共有会の開催、創立20年目に向けての実行委員会の創設、マイナンバーの取扱い、予防的家庭訪問実習の継続的・発展的運営、大分県立看護科学大学リポジトリ運用規程、学部および大学院3ポリシーの改定、アクティブラーニングに関する研修会が実施、授業料減免制度の拡充に向けた支援、教員評価システムの見直し、やむを得ない休講に関する事務の流れの規程、学内整備のための工事（つり天井等）など、時代のニーズに沿って多く事案を検討し推進した。

各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

### 1-4 教授会

構成員 村嶋 幸代（学長）、藤内 美保（学部長）、各教授、准教授、講師、飯田 隆次（事務局長）

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は4回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会でも審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

## 1-5 研究科委員会

構成員 村嶋 幸代 (学長)、影山 隆之 (研究科長)、各教授、各准教授、各講師

大学院の教育課程における、学生の入学、修了、その他在籍に関する事項、及び学位の授与に関する事項の審議を行った。本年度は4回開催し、すべての課程修了者の修了を認定した他、1名の博士論文について不合格の決定をした。

## 1-6 自己評価委員会

構成員 佐伯 圭一郎、関根 剛、宮内 信治、吉田 成一、草野 淳子、緒方 文子、石倉 順

自己評価委員会は、自己点検・自己評価活動および第三者評価受審に関わる活動を主たる分掌事項としている。また、自己評価に関連して、年報作成や学内の基本情報としての議事録の整備等を担当している。

さらに、FD 活動に関する事項および人権・ハラスメント対策に関する各種活動も担当している。

### 1.自己評価・大学機関別認証評価

- (1) 大学改革支援・学位授与機構による大学機関別認証評価（選択評価事項 A「研究活動の状況」と B「地域貢献活動の状況」を含む）を受審した。6月末に自己評価書を提出し、11月14、15日の現地審査を経て、3月23日に「大学評価基準を満たしている」との評価を受けた。また、選択評価事項の A は「達成状況がおおむね良好である」、B は「達成状況が良好である」との評価を受けた。
- (2) 平成 27 年度年報を公開した。また、学内の議事録等整備状況を継続的にチェックし、議事録の作成および記載事項の不備等について、適宜指摘を行った。

### 2.FD 活動

- (1) 新任教職員研修：4月1、4日に新任教職員研修を実施し、新任教職員 15 名が参加した。
- (2) 科研費申請説明会：8月24日に科研費申請説明会を開催し、40 名が参加した。また、初めての申請や申請経験の少ない教員向けに、別途8月8日に「科研費初心者の方のための研修会」を開催している。また、申請にあたり、学長をはじめとするベテランに研究計画書のスーパーバイズを受けることを推奨するアナウンスを行った。
- (3) FD 研修会：2月21日に大分大学高等教育開発センター教授、牧野治敏教授による「アクティブラーニングの背景と取組み例」の講演を行った。参加者は 34 名であった。
- (4) アニュアルミーティング：3月3日にアニュアルミーティングを開催した。演題数 24、参加者数 46 名であった。
- (5) 情報提供：FD 関連・ハラスメント対策関連など各種研修会の情報をメールにて随時提供した。

- (6) 授業評価・カリキュラムアンケート：2年次生と4年次生を対象としたカリキュラムアンケートを実施した。本年度の学部授業アンケートは、14名の教員が対象となり実施した。集計結果は、3月末にサイボウズおよび nekobus を用い、教職員および学生に公開した。

### 3.人権啓発・ハラスメント防止

- (1) 人権研修会：3月6日に、「大分県の人権・同和問題学習」というテーマで、大分県教育長人権・同和教育課榊添指導主事による研修会が開催され、教職員58名が参加した。
- (2) ハラスメント対策：ハラスメント対策の体制を維持するとともに、ハラスメント相談員の研修会を開催した。本年度の相談員への相談件数は0件であった。

大学機関別認証評価の結果を受けて、本学における今後必要な取り組み等を整理し、学内各部署へ周知する。

平成29年度より新設されたFDワーキンググループと連携して、本学のFDの推進を支援すると共に、FD推進体制や自己評価委員会の活動や組織のあり方などを次期中期計画の始まる平成30年に向けて検討する。

## 1-7 教育研究委員会

構成員 藤内 美保、濱中 良志、佐伯 圭一郎、吉村 匠平、石田 佳代子、川崎 涼子、小嶋 光明、飯田 隆次、染矢 哲朗

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例の委員会として11回の会議を開催した。

1. アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの改訂を行うとともに、入学者受け入れ方針として、感性、思考力、主体性の3本柱をたてた。
2. 平成29年度4月からGPA制度、S評価導入するため、検討を重ね、学則変更など規定の改正を行った。またGPA制度導入に伴い、活用方法についても決定した。
3. 過去5年間分の全必修科目の成績分布を分析した。成績評価に偏りのある科目や科目群について教員にフィードバックした。
4. 学部学生がどのような力を付けるべきかを自覚できるようにするため、常に目に触れる教室5ヶ所の前壁にフレーム付きディプロマポリシーのポスターを大きく掲示した。
5. 学位授与機構の認証評価を受け、学部教育の評価の体系的な見直しの必要性を明確にした。
6. 国家試験対策に関しては、3年次生から模試を開始した。4年次生においても解剖・生理学、病態学等の専門基礎分野の試験を9月に実施し、また統計的データをもとにした苦手領域の補講も9月から実施した。国家試験対策 Web 版を活用し、効果的な活用方法について検討し実施した。
7. 看護学実習（第1段階～第6段階実習）関連では、実習代表者会議のもとで全体の実習日程調整

や担当教員、専任教員配置、年間の実習指導週数などを調整し、本委員会で最終的に決定した。初期体験実習は今年度から新たな目標、方法で実施し、初期からより自律的な態度がとれるよう実習体制を試みた。実習施設と大学の連携強化にむけて、実習指導の充実を図っている。実習関連小委員会では、看護技術習得プログラムでファーストステップ～フォースステップまで、看護系教員全員で指導した。サードステップでは、エルゼビアの e-ラーニングを導入し演習を学生が自主的に行った。フォースステップでは大分赤十字病院の看護師 10 名による臨場感のある指導で学びが深められた。

8. 実習改革 WG は、以下の 3 つの取り組みを行った。1) 実習指導指針の作成を行い、教員有志を含めて試行し、課題を洗い出し修正した。2) 個々の学生の記録を担当教員が事前に確認する取り組みを図ったが、煩雑さや情報管理面の課題があり取りやめた、3) 人間科学系教員と看護系教員が共同するアクティブラーニングを行った。
9. 卒業研究は、3 月末に各研究室の卒業研究テーマを収集した。実習施設をフィールドにする場合は調整を行った。各研究室で順調に進め、2 日間にわたり卒業研究発表会を講堂で行った。発表日は、各学生 4 分の質問時間を有効に使うということで、質問する際にマイクまでの移動がスムーズにできるよう学生配席を工夫した。卒業研究の優秀賞は、例年通り、発表会で教員全員が評価し、実験部門と調査部門の上位 2 割の論文を 7 名の審査員が論文審査を行い、3 名（実験部門は 2 名同点）を選考し、卒業式の日に表彰した。
10. カリキュラム関連では、本年度予防的家庭訪問実習を全学年で実施したこと、養護教諭 1 種を新たに導入した。予防的家庭訪問実習については、COC プロジェクトで詳細な記載がある。全ての学生が 4 回以上の訪問を行い、単位認定ができた。
11. 養護教諭の選考について検討した。2 年次生最終で 8 名の人数制限を書ける方針であったが、8 名以上の受け入れ体制は整えられるので、成績要件による制限をかけることとした。成績要件については今後検討する。現在の養護教諭 1 種の登録者は、2 年次生が 12 名履修し、1 年次生 18 名が授業参加している。
12. 総合人間学は 4 年次生および一般公開をし、県内外で活動している医療分野以外の講師の講義を 8 回開催した。昨年度から導入したレポート提出は、要点がまとめられ、学びの深まりが認められた。
13. 進級試験は、今年度も基本的かつ重要な知識を 2 年次生で習得するという本来の目的を達成できる方法に見直した。教員全員が出題することで 2 年次生に応じた難易度とし、プール問題を確保した。本試験での合格率は約 75%、再試験では全員が合格した。
14. 中央研究費の研究・研修予算関連では、従来自己評価委員会が国内国外短期海外派遣研修の人選および管理運営を行っていたが、今年度より教育研究委員会が行うこととなった。本委員会は研究支援旅費を管理しており教員の研修窓口を一本化するためである。また、研究予算は、例年通り、プロジェクト研究、先端研究、症例研究を予算化し、奨励研究以外はヒヤリングを行った。今年度から、科研費では不採択であったが「A」評価だった研究で、申請があれば優先的に採択する方針を決め、追加募集した結果 1 件の申請があり採択した。最終的には、新規採択は、プロジェクト研究 1 件、先端研究 2 件、奨励研究 4 件、2 年目の継続研究は、先端研究 2 件、奨励研究 4 件である。

15. 平成 29 年度のシラバス作成を行った。シラバスの冒頭に今年度新たに更新したディプロマポリシーやカリキュラムポリシーを掲載し、学生が学部教育で目指すべき能力を認識できるよう工夫した。

時間割は、担当教員との連絡調整重ねて、スムーズな授業運営ができるよう調整した。また 1 年次生が 4 月当初から 5 限が続かないように調整を行った。

16. 平成 28 年度の前期・後期の科目等履修生と平成 28 年度研究生の募集では、応募者はいなかった。

17. 自治会代表者と年に 2 回、交流の場をもち、大学での教育や生活について意見を聞いた。可能な限り要望に応えるよう改善した。

アドミッションポリシー、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの評価到達度、評価方法、評価対象など評価体制を強化する。また、平成 29 年度から新たに GPA 制度、S 評価を導入するが、運用にあたり課題などを洗い出す。

養護教諭 1 種養成課程の教育は 3 年目となり、実習が初めて開始される。学生の意見・要望などを聴き取り、丁寧に対応することが必要である。

## 1) 国家試験対策小委員会

構成員 小嶋 光明、石丸 智子、緒方 文子、堀 祐子、山田 貴子、後藤 成人、染矢 哲郎

看護師国家試験合格率 100%をめざして国家試験ガイダンスを 4 月に実施し、学生の学習への自覚を促した。また、学内・学外模試の結果を分析して、学生が苦手な領域を絞り込み、夏休み直前（7 月）と冬休み明け（1 月）に補講を行なった。成績不振の学生に対しては個別指導を行った。3 月 27 日に発表された合格率は、全国（4 年生大学）が 96.5%であったのに対して本学は 96.1%であった。

## 2) 実習運営小委員会

構成員 石田 佳代子、足立 綾、安部 真紀、石丸 智子、江藤 由布子、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、森 加苗愛

実習運営小委員会の主な活動目的と役割は、1) 1 年次から 4 年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）を企画・運営・評価すること、2) 総合看護学実習の運営を行うこと、3) 学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地実習における環境整備を行うこと、である。月 1 回の定例会議を開催し、上述に基づき、主に以下の活動を行った。

### 1) 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第1～3段階看護技術演習（ファーストステップ：2年次後期、セカンドステップ：3年次前期、サードステップ：4年次前期）を実施した。第4段階看護技術演習（フォースステップ：4年次2月、自主参加型）には、学生65名が参加した。参加した学生を対象としたアンケートの結果、参加した学生全体の9割以上が「卒業後に就職先で実施できる自信がついた」、「外部講師からの指導は、自分の技術習得のために効果があった」と感じており、外部講師と教員による丁寧な指導によってとても勉強になったなどの肯定的な意見が多かった。

### 2) 看護技術習得確認シートの作成および卒業前の看護技術習得状況の調査

卒業前の看護技術習得状況（「AA」46項目の習得状況）の到達度について、4年次生を対象とした無記名自記式調査（平成28年11月実施、回答者40名、回収率52.6%）の結果、回答者全体の70%以上の学生が「AA」46項目のうち43項目（平成27年度の調査では41項目で2項目増加）、80%以上の学生が38項目（平成27年度の調査では35項目で3項目増加）を「単独で実施できる」と自己評価した。

### 3) 総合看護学実習の運営

全体的なスケジュールや流れは昨年度と同様に実施した。

新たに実施したこととして、来年度の実習運営の一環で、3年次生に実習施設の希望調査（無記名）を行い、学生が希望する領域と各実習施設の配置人数等の適切性を確認した。その結果を参考にしながら、施設決定のプロセスを学生責任者と教員とで話し合い、学生個々の意向を確認しつつ、実習配置場所の調整を図った。

次年度の実習受入れに関し、新規施設（地域医療の中核病院）を2施設増やした。今後も県内の広い地域で実習施設を開拓していく必要がある。

### 4) 各実習施設および学内実習室の実習環境の整備等

各実習施設および学内実習室等にある水銀血圧計や水銀体温計の回収と処分を行った。

実習室備品の一部をサイボウズで運用できるようにした。また、事務と連携して備品等の運用方法などを検討した。

実習室環境（夏期：蒸し暑い、冬期：寒い）の実態調査を行い、実習室環境を改善するための基礎データを収集した。今後は、得られたデータに基づいて、実習室環境の改善につながる働きかけを行う必要がある。

### 5) 実習ガイドブックの作成と関連マニュアルの見直し

実習ガイドブック（2016年度版）を作成した。来年度の実習ガイドブック作成にあたっては、毎年更新が必要な内容とそうでない内容を検討した。

「実習指導指針」の巻末資料となる関連マニュアルの内容を見直し、改訂した。

以上の他、看護学実習 Web ページの使用終了に伴う chihiro への移行整備と管理、学生および教員に対するナーシングスキル (e-learning 教材) の活用の推進、新入生の実習服等の注文、実習関連予算の管理などを例年通り行った。

### 3) 看護スキルアップ演習WG

構成員 伊東 朋子、林 猪都子、佐藤 弥生、佐藤 愛 (8月まで)、渡辺 康人 (9月から)、山田 貴子、足立 綾、西部 由里奈

実施日時は9月9日～10月19日までの期間であった。基礎看護教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいにして、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開していくように調整・準備した。昨年の反省会で上げられていた発表会実施日時の検討や発表会での教職員による患者役などの調整を行った。学部卒業できるだけ若い卒業生5名と大学院修了生1名を反省会でのアドバイザーとして、実習病院である大分県立病院、別府医療センター、大分赤十字病院、大分医療センターなどから講師派遣していただいた。

次年度以降、カリキュラムの改変時等には4年生の負担も考慮しながら、実施時期と内容についての再検討が必要である。ロールプレイに用いる物品等について、学内の物品で老朽化しているものについては、臨床に則した物品を準備するように配慮が必要である。

### 4) 実習改革WG

構成員 秦 さと子、小嶋 光明、甲斐 博美、岩崎 香子、巻野 雄介、宿利 優子、吉川 加奈子、安部 真紀、藤内 美保

今年度は1. 本学独自の実習指導指針の作成、2. 実習記録の構造化、および3. 単年次内の授業組替に取り組んだ。1. 実習指導指針は、担当教員の実習指導力の向上を目指して、担当教員、実習指導者、専任教員の実習における役割をはじめ実習前から実習開始後にどのような基本姿勢で学生と関わるべきかについてや、実習終了後には担当教員の実習指導を専任教員と振り返る必要性について記載した。9月に有志教員による試行を経て1月の基礎看護学実習で本始動とし、担当教員・専任教員全員に活用してもらった。活用した感想や意見に基づいて修正を行った。3月には製本を行い、学内教員を中心に配布し活用につなげる。2. 作業負担や個人情報取り扱いの問題により、実習指導指針に含まれていた学生の引き継ぎ書については削除することとした。これに伴い実習記録の構造化の必要性がなくなり本活動を中止とした。3. 人間科学系教員と看護学系教員のコラボレーション授業を企画し、1年次生の授業の生体機能論、構造論、生活援助論を対象に計4回実施した。

受講した学生からは、看護を学ぶ上で人間科学系の講義が重要である事がわかったなどの声が聞かれ、看護を科学的に考える力の育成につながる可能性が考えられた。また、学ぶ面白さに関する声も聞かれ、学習動機にもつながる可能性が期待される。この取り組みについては、学内のアニュアルミーティングで取り組みの報告を行った。

今年度で実習改革 WG の活動は終了となる。今後は作成した実習指導指針の周知と活用に関する取り組みを期待する。また、コラボレーション授業については、継続して取り組み成果を確認していく必要がある。

## 5) 進級試験WG

構成員 濱中 良志、佐伯 圭一郎、石田 佳代子、甲斐 博美、宿利 優子

今年度も昨年に引き続き、ほぼ全教員で2年次生までに学習している内容の問題作成を依頼した。WG 構成員で作成された問題のブラッシュアップ及び選択を行い、平成 29 年 2 月 27 日に進級試験を実施した。

学生の知識の確認と思考力を育む問題をプールして、目標の 1000 問を目指していきたい。

## 6) 養護教諭養成部門

構成員 吉村 匠平、伊東 朋子、関根 剛、赤星 琴美、草野 淳子、秋本 慶子、浜松 弘一

養護教諭養成課程の運営を担当した。本年度の活動は以下の通り。平成 27 年度入学の履修者 (12 名) を対象にした履修カルテ面談、図書整備 (学術誌、雑誌、図書)、新入学生全員を対象としたガイダンス、オープンキャンパスでの模擬講義、日本養護教諭養成大学協議会への参加、履修希望者 (1 年生) に対するガイダンス、養護実習および学校ボランティアに関する大分市教育委員会との協議 (学校ボランティア要項の作成)、学校養護教諭養成特別別科への進学を希望する 4 年次生 5 名を対象とした進学ガイダンスおよび受験指導、大学パンフレットへの関連情報の掲載、学年進行に伴う新規開講科目を中心とした時間割調整、養護実習 I の履修許可者の選考。

教育職員免許法の改正に伴い、全国の教職課程を有する全ての大学で、再課程認定が行われる予定となっている。平成 29 年度に申請書を作成し、平成 30 年度に審査を受ける必要がある。

また、養護実習 I の開講に向け、大分県教育委員会、大分市教育委員会との連携協議を継続するとともに、実習環境の整備、指導計画の策定を進める。

## 1-8 学生生活支援委員会

構成員 林 猪都子、小嶋 光明、関根 剛、岩崎 香子、巻野 雄介、樋口 幸、宿利 優子、工藤 優、  
浜松 弘一

学生の大学生生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

### 1. 学生関連イベントの企画・運営

全学生オリエンテーション（4月8日）、新入生オリエンテーション（4月11日、4月12日）、  
コンタクトグループ（4月8日）、全学スポーツ交流会（4月22日）（ドッグビー、全学生・教職員  
への実況中継）、キャンパスクリーンデー（5月11日）、DV講演会（5月27日）を企画し実施  
した。

### 2. 学生相談

各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単  
位取得、進級に関するもの、1年次の入学直後に既習科目・状況調査、前期前半終了時に学習状況  
調査を実施、1年次生に対する学習相談（11月7日）学生6名、教員3名参加）、休退学・復学相  
談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。

### 3. 学生の自主活動への支援

サークル活動支援、若葉祭における学生支援全般、自治会活動支援などを行った。今年度自治会  
マニュアルを作成した。若葉祭については若葉祭実行委員と教員（同窓会、広報委員会、学生生活  
支援委員会）で2月15日に合同会議を開催し若葉祭の運営状況について確認した。

### 4. 経済支援

奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動な  
どを行った。HPに奨学金情報を整理して掲載した。

### 5. 健康支援

学生の健康管理支援（集団健康診断、風疹抗体検査（3年次生一部）、個別相談）、学生の保険関  
係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求  
に関する支援など）について保健室保健師を中心に行った。保健室の学生相談件数は541件で、  
そのうちメンタルヘルスによる学生相談件数は23件（延べ95件）であり、メンタルヘルス事例  
に対応した学生支援が今年度から可能となり、コンサルテーションを医師からは年0件、カウンセ  
ラーからは年40件実施した。

## 6. 交痛安全推進

交通安全指導の実施（自動車講習会 4月 21日・自動二輪実技講習会 6月 4日）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交痛事故対応、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）などを行った。

## 7. 学生生活に関する調査

学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）について実施した。学生生活実態調査については学習時間とアルバイトについて内容分析した。

## 8. その他

新人教員オリエンテーション（4月 4日）、九州地区公立学生部長会議（9月 9日）、九州地区学生指導研究集会（9月 1日～9月 2日 今年度担当校にて学生生活支援委員会全員参加）、学外者クレーム対応などを行った。

大学キャンパス内で実施する新入生オリエンテーションを他学年や教員との交流する機会として内容を充実させていく。保健室のメンタルヘルスへの対応件数が学部、大学院生も含めて増加しているため、次年度は月 1回委託でカウンセラーに来学いただき、残り 1回は緊急性のある場合のコンサルティングとして活用することに加えて、年間の相談回数を 50 回程度に増やす。また、保健室の機能について教職員に伝達する機会を設ける。

### 1-9 就職支援委員会

構成員 梅野 貴恵、杉本 圭以子、田中 佳子、足立 綾、緒方 文子、飯田 隆次、神崎 正太

学生の就職・進学の内滑化と県内就職率 50%を目指して、就職・進学活動を支援し年間計画に沿って活動を行った。

1. 求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国 12807 人（349 件）、大分県 254 人（40 件）であり、平成 27 年度より全国の求人が 2559 人（16.6%）、大分県が 11 人（4.1%）減少した。全国からの求人訪問対応は 20 件で、平成 27 年度より 23 件減少した。
2. 学生の就職・進路状況：卒業生 76 名であり、就職決定者 57 名（看護師 57 名）、未定者 3 名、進学者 16 名（保健師 6 名、助産師 6 名、養護教諭 4 名）であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行った。必要な学生には個々にメールや面談で情報を提供した。
3. 就職相談室：就職相談員 1 名を配置し、第 2、4 水曜日の午後に学生の就職相談を実施した。就職相談員は 3 年次生全員と 4 年次生希望者に就職面接を実施し、学生の就職・進学希望に関する実態を把握し適宜相談に応じた。
4. 県内施設就職説明会：3 月 1 日（水）に 3 年次生対象に県内施設就職説明会を開催し、28 施設参

加があった。説明会の方法は午前と午後の2部に分けて学生全体へ施設概要を5分説明し、その後施設ブースでの個別相談60分を行った。28施設のうち半数の施設には、就業する卒業生の参加もあり、個別相談では卒業生の話が聞けて好評であった。

5. 県内施設実習病院と卒業生・修了生との交流会：卒業生・修了生との交流会を2施設（大分県立病院、大分大学医学部附属病院）で開催した。参加者は実習施設28名、卒業生・修了生48名、教職員32名（延べ人数）であった。大分県立病院では、認定看護師を取得している卒業生の講話があり、活動の実際が良く伝わる内容で非常に好評であった。両施設ともディスカッションでは、新人教育の状況、卒業生の病院での活動状況や将来ビジョンなどについて有意義な意見交換を行うことができた。
6. 県内施設に就業する卒業生と在學生との交流会：5月15日（日）ホームカミングディ終了後開催した。県内施設に就業する卒業生9施設22名と在學生12名の参加があり、参加した在學生は就職先のイメージを持つことができた。
7. 就職・進学ガイダンス：3年次生対象に就職ガイダンスを7月12日（火）、2017年2月22日（水）の2回開催した。2月開催時には、卒業生2名を招聘し就職活動の体験談や入職後の状況を話してもらい、4年次生2名にも就職活動と進学活動の体験談を話してもらった。3年次生も熱心に聞いており、卒業生や4年次生に質問していた。
8. 病院選び、インターンシップ・見学会マナー、身だしなみ講座：2017年2月15日（水）3年次生対象に、株式会社マイナビ、株式会社フタタに講師を依頼し、九州内の看護職募集の現状や自分にあった病院の探し方や見学会マナーと身だしなみ講座を開催した。病院説明会やインターンシップ参加の動機づけの機会となり、施設訪問時のマナーについて学ぶことができた。
9. 履歴書の書き方・面接講座：講座は株式会社マイナビに講師を依頼し、4月21日（木）4年次生を対象に開催した。昨年度より約2か月早めて実施したため好評であった。
10. 模擬面接：模擬面接を3回開催し45名の学生に実施した。
11. 県内施設インターンシップ：7月と2月に県内のインターンシップの開催状況や参加の仕方について説明し、就職選択に関する支援を行った。県内施設の情報は、入手できた時点でメールで周知した。
12. 就職推薦施設の提供：本年度就職推薦を実施している3か所の施設の詳細を、情報を入手次第、メールで周知した。
13. 就職対応卒業生名簿の作成：本年度就職対応を実施した中で、69施設に就職している卒業生を確認し、就職対応卒業生名簿を作成した。
14. 卒業生の県内施設Uターン支援：ホームカミングディや四つ葉会同窓会総会の際に、「大分県内求人情報」の冊子とナースセンターより提供された施設情報の冊子を設置し、卒業生に情報提供を行った。

本年度は県内出身者が61.8%で県内就職率は57.8%であった。進学者が全体の21.0%と昨年に引き続き多かったためと考えられる。今後も県内就職率50%を確保するための方策として、ガイダンス等の際に積極的に卒業生の招聘を行い、在學生との交流の機会を設けることを予定している。また、実習基幹施設の本学卒業生との交流会の開催は、来年度は実施施設や方法を検討する予定であ

る。2025年問題による高度急性期施設の病床数削減等により、看護職員の採用数が減少しているため、株式会社マイナビ等から情報収集し、最新の情報を学生に提供していく。

## 1-10 広報・公開講座委員会

構成員 高野 政子、安部 眞佐子、品川 佳満、後藤 成人、石丸 智子、恵谷 玲央、橋本 正和、石川 華子

### 1) 若葉祭教職員企画

5月14日、15日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。教員企画は健康教育等の大学学部教育の一部内容や設備の紹介など12企画を開催し、参加者は2日間で860名であった。教員イベントでは、学生にも協力者として数名ずつ参加してもらうことで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。また、地域の方々や学生に、学部で行っている研究を知ってもらう目的で、全研究室の卒論をポスター掲示した。その他、広報活動として、研究室紹介のパネルを更新し、7月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置するなど、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

### 2) オープンキャンパス

平成28年度の開催は夏休み中の7月17日(日)に実施した。当日は387名(昨年比プラス37名)と多くの参加があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や学生自治会によるTAKIOソーランの演舞、1年次生の合格体験発表、3年次生、4年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業では「若返る細胞～iPS細胞の可能性」(生体科学研究室)「看護系大学で学ぶ養護教諭の役割(人間関係学)」「世界の人々の健康と看護(国際看護学)」で、高校生とその父兄を対象に1回約20分のセミナーを行った。体験イベントなど教職員全員と学生の協力者とで取り組んだ。特に在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当したことや、実習室への誘導を行ったことは、参加者が在在生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。

### 3) 地域ふれあい祭り

平成28年度の地域ふれあい祭りは、11月6日(日)に開催された「ななせの里まつり(主催者発表の参加者6500人)」に学長と教職員15名とボランティア論の学生20名が参加した。本イベントは大学に隣接するみどりマザーランドで開催された。大学紹介はテント内でのパネル掲示と、大学案内パンフレットの配布や看護交流センターによるCOC地の拠点事業の紹介を行った。ブースの来場者は野津原地区を中心とした地元住民で、健康増進プロジェクトの健康チェックに402名、看護交流センターの握力測定に498名の計900名が参加した。健康増進プロジェクトは血圧測定、体成分分析、握力測定などの健康指導・健康チェックを実施した。その他、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員等が参加し活躍した。

#### 4) 出前講義

看護系進学を希望する高校生を対象とした高校の出前講義に講師を派遣した。高校からの依頼で教授2名と准教授1名を派遣した。県立杵築高校(7/7)、県立臼杵高校(6/23)、鶴崎高校(11/7)等。その際、大学案内パンフを持参し受講生に配布した。

#### 5) 大学見学

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。本人と家族の申し込みでの大学訪問6組が来学した。大学概要を説明し、入試や卒業後の進路についての質問などを受け、最後に施設見学等で対応した。

#### 6) 大学オリジナルグッズの作成

大学名の入った大学オリジナルグッズを作成し、大学広報の1つとして活用できるようにした。大学名入り3色ボールペン、風呂敷を追加購入したほか、外国の方へのお土産として、蒔絵入り爪切りを新規に作成した。

#### 7) 大学HPおよびマスメディアによる広報

昨年度リニューアルした大学HPの運用を行った。大学のイベント案内(若葉祭、オープンキャンパス、公開講座・講義など)や、その実施報告(大学アルバム)を掲載した。また、大学アルバムでは、学生のボランティア活動や地域での社会貢献活動についても、37件を随時に公開した。教員の研究紹介を毎月更新し12件を掲載した。定期的に年3回、大学HPに掲載している大学Q&Aを更新し、入試情報等を新たな記事にして公開した。また、広報広聴課の広報番組であるTOSテレビ「ほっとハート大分」では、「最先端の教育と地域貢献」として看護研究交流センターの活動とオープンキャンパスの開催の広報をした。その他にOBSラジオ「たんねるけん」でCOC予防的家庭訪問実習の活動が放送された。大分県広報広聴課の新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。大学イベントの開催については、定期的に県政記者クラブに情報提供を行い、情報発信を行った。大分合同新聞での学長の連載記事や、教員の紹介など合計27件が掲載された。

#### 8) 公開講座

平成28年度は2回の有料公開講座を開催した。第1回は「自殺予防対策と看護職の役割」と題して9月17日(土)に、大分駅前ホルトホール大分で開催した。講師は、豊後大野市役所市民生活課健康推進室主幹、本学精神看護学研究室の教授と講師の3名で、参加者は50名であった。第2回は「原子力災害における放射線リスク対応—医療職が理解しておくべきこと—」と題して12月15日(木)に、環境保健学研究室教授が講師となり、国東市のアストくにさきで開催した。参加者は10名であった。2回の合計で60名が公開講座を受講した。パンフレットを作成し県下の病院や施設、保健所への配布、市報など地域広報に加え、マスコミ(大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおい)や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

1. 大学の教職員が関係する企画・イベント等の情報を提供してもらい、それをリソースとして広報に活かす。
2. 大学情報を事後報告にならないよう、タイムリーに事前の広報活動と事後の報告を掲載する。

### 1) 大学案内パンフレットWG

構成員 杉本 圭以子、緒方 文子、足立 綾、西部 由里奈、恵谷 玲央、秋本 慶子、橋本 正和

2018年版大学案内は、明るく生き生きとしたイメージと学生の元気が伝わるようなパンフレットになるよう作成した。表紙を始めとして、学生、学部卒業生、大学院修了生の紹介は表情豊かな写真になるよう撮影を依頼し、全体を通してさわやかな印象とした。

昨年までのパンフレット内容をふまえつつ、学部教育の特徴、大学院教育の特徴のページを加え、本学の特徴をわかりやすく伝えるようこころがけて作成した。

### 2) 広報紙WG

構成員 飯田 健次、西部 由里奈、橋本 正和、神崎 正太

平成24年度に後援会との協働で創刊した大学広報紙「風のひろば」の第8号及び第9号をそれぞれ6月、12月に発行した。本学の現在の取組や地域との協働事業、トピックス、研究紹介などを掲載し、在学生の保護者や卒業生を始め、関係機関に配付、広く情報発信を行った。今年度は大学院修了生にも送付対象を広げた。印刷部数は8号が2,000部、9号が2,500部とした。

### 3) 学外 Web WG

構成員 品川 佳満、後藤 成人、宿利 優子

学外 Web サイトの更新・掲載（大学案内、イベント案内・報告など）およびコンテンツマネジメントシステムの管理・運用を行った。また、システムの利用ユーザ19名に対して学外 Web サイトの編集に関する基本方針、編集権限・担当に関する説明と Web ページの作成・編集方法に関する操作研修を行った。

#### 4) 英文 Web・パンフレットWG

構成員 Gerald T. Shirley、桑野 紀子、岩崎 香子、江藤 由布子、馬場 奈穂、久保 紘子

本年度の4月より本学英文 Web の改訂作業に取り組み、教職員の方々のご協力の下、学部教育に予防的家庭訪問実習のページと養護教諭教育課程ページを追加、Faculty ページをリニューアルし、10月1日に全ページの改訂を終了した。

英語 Website に関して平成 29 年度にトップページの最新情報を掲載すると共に留学生のための情報ページを作成・掲載する。

#### 5) フェイスブック WG

構成員 野津 昭文、田中 佳子、石倉 順、石川 華子

本学公式 Facebook の管理・運営を行った。本学の行事や大学生活についての情報を 100 件程度 Facebook を通して発信した。

#### 1-11 国際交流委員会

構成員 G.T. Shirley、Myoung-Ae Choe、濱中 良志、伊東 朋子、堀 裕子、江藤 由布子、吉川 加奈子、久保 紘子

国際交流委員会が平成 28 年度に行った活動は以下のとおりである。

##### 1) ソウル大交流派遣学生受け入れと交流

ソウル大学から交流派遣学生と教員が来学予定であったが、熊本・大分地震の影響を両校で協議し今年度は中止とした。

##### 2) 本学学生のおよび大学院生の派遣

本学から大学院交流派遣学生として大学院生 2 名、学部交流派遣学生として学部生 5 名を同行教員 1 名と共に 8 月 7 日から 8 月 10 日までの 4 日間、ソウル大学に派遣し交流を深めた。

##### 3) 第 18 回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催で看護国際フォーラムを平成 28 年 10 月 28 日に、別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。テーマは「認知症の人と紡ぐ看護実践～今、私達に求められる看護のチカ

ラ」で、米国から1名、国内から2名の講師、さらに、認知症当事者とその支援者を招聘し、参加者は306名と大盛況であった。

平成28年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容とを十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

## 1-12 図書委員会

構成員 甲斐 倫明、宮内 信治、山田 貴子、堀 裕子、石倉 順、白川 裕子、挾間 由布子、工藤 信二

- 1) 購読雑誌の見直しの年度にあたり、全体方針の策定、見直し案の作成、学内調査を受けて、新規購読雑誌4タイトル、購読停止雑誌2タイトル、となり結果として次年度の価格上昇に対応できる予定価格の低減を実現できた。
- 2) 国立情報学研究所のリポジトリ利用したデジタルアーカイブの構築を行った。アーカイブに伴う著作権などの問題点を整理し、学位論文からアーカイブ化するための運用規程の作成、登録申請書の作成を行った。
- 3) セキュリティ対策のために、入退館ゲートシステムの導入を想定した検討を進め、費用見積および課題をまとめた。
- 4) 除籍図書のリユースデーを設け、リユース率43%を達成した。引き続きリユースデーを設け、除籍図書および古くなった寄贈図書のリユースを進める。
- 5) 空調の改善を検討し、冬場と夏場の室温測定を利用した室温調節と遮蔽ロールカーテンの設置を決定した。
- 6) 蔵書点検の負荷を低減するための方策を作成し実施した。

- 1) 図書館の利用拡大とセキュリティは表裏の関係にあるため、両面から検討を進めていく必要がある。
- 2) 図書の所蔵数の増大により保管スペースの限界から、図書・雑誌の除籍の方針を検討し、規程を整備する。
- 3) デジタルアーカイブ化とリポジトリを推進していくことで、紙媒体資料(論文など)の削減を進めていく。

## 1-13 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成 28 年度に実施した学部入学試験、大学院博士課程について審議し、入学試験全般を統括した。今年度の委員会は 24 回（入試問題印刷・チェック、集計作業、合否判定案作成等は除く）で前年度より 4 回減少し、業務は効率化された。

大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（2 回、8 月 18 日、12 月 13 日）および試験場設定大学連絡協議会（7 月 11 日）の他、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（6 月 1 日・2 日）、大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会（6 月 21 日）、に入試委員会委員が参加した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は 21 箇所、高校教諭に対する進学説明会（6 月 3 日）の来場者は 34 名（前年度より 1 名減、2.9%減）であった。この他、若葉祭及びオープンキャンパス会場に、進学相談コーナーを開設した（5 月 14 日・15 日、7 月 17 日）。これらの合計として、388 名（前年度より 71 名増）の高校生や保護者ほかの相談を受けた。

大学院入学試験は例年通り 8 月に実施した（8 月 27 日）。大学院博士課程（前期）入試は、筆記試験と面接試験を行った。受験者数は博士課程（前期）38 名（前年度より 12 名減、24.0%減）、博士課程（後期）4 名（前年度と同じ）であった。これに加え、今年度は学部の前期日程と同日に、大学院博士課程（前期）NP コース地域枠の入試（募集人員 3 名）を実施した。入試内容は筆記試験と面接試験で、受験生は 1 名であった。

学部の特別入試（11 月 19 日）の志願者数は県内 91 名（前年度比 12.3%増）、県外 23 名（前年度比 15.0%増）、社会人 3 名（前年度比 200%増）で、合計では前年度より 15 名増加した。学部の一般入試（前期 2 月 25 日、後期 3 月 12 日）の志願者数は前期 187 名（前年度より 19 名増、11.3%増）、後期 201 名（前年度より 60 名増、42.6%増）、合計では 388 名（前年度より 79 名増、25.6%増）であった。

一方、学長の提案により、委員会の枠を超えた「学部入試改革タスクグループ」が設置され、将来の入試の方法について検討中である。

大学入試センター試験では、監督者説明会の開催回数を増やし、また、実施上の変更点の解説を充分にする等して、実施要領等の周知徹底を図った結果、トラブルはなかった。

今年度も試験問題にミス等はなかったが、引き続き再発防止方法について検討する必要がある。入試の広報と運営方法の両面について、引き続き改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動を行っていく予定である。

## 1-14 研究倫理・安全委員会

構成員 市瀬 孝道、平野 亙、草野 淳子、杉本 圭以子、秦 さと子、岩崎 香子（以上、学内委員）  
二宮 孝富（大分大学名誉教授）、西 英久（大分大学名誉教授）（以上、外部委員）  
高橋 めぐみ（事務局）

研究倫理・安全委員会は今年度 11 回開催した。平成 29 年 1 月を除いた各月ごとに教員から申請された研究計画の審査を行った。今年度は申請された計画書 90 件を審査し、83 件が承認された。また 5 月審査分より学長の承認通知を発行した。委員会では大学の研究倫理・安全に関する指針を「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に沿って一部改正し、平成 29 年 1 月 1 日付けで施行した。研究計画の申請に関する手引きを「サイボウズ移行による申請手続きの変更に伴い改正し、平成 28 年 10 月 12 日より適用した。研究倫理教育については今年度より CITI-Japan の e ラーニングを導入し、教員と大学院生が受講した。来年度の研究倫理教育は eL CoRE(エルコア)を導入する。

大学の研究倫理・安全に関する指針の中の「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に関する事項を指針から切り離し、別途、研究不正防止に関する規定（研究活動に係る不正行為の防止に関する規定、公的研究費の不正防止等に関する規定）の策定と両不正行為における調査委員会規定や細則の策定が必要である。

大学院生の研究計画書の書類不備が多々あるために C 判定となることがある。計画書を出す前に指導教員による内容チェックが今後の課題である。これが続く場合にはサイボウズ申請時に指導教員の確認チェック欄を設けるなどの対策をとる必要がある。

### 1) 動物実験小委員会

構成員 委員長 市瀬 孝道、影山 隆之、岩崎 香子、小嶋 光明、定金 香里  
事務局 高橋 めぐみ

動物小委員会は今年度 9 回開催した。動物実験研究計画書 14 件の審査を行い、14 件が承認された。また、委員会では動物実験規定の細胞培養等に関する部分を削除し平成 29 年 1 月 1 日付けで施行すると共に学長の責務等を追加し、平成 29 年 4 月 1 日付けで施行した。これに合わせて実験動物施設利用マニュアルを一部改正（不足分の追加）した。更に今年度は遺伝子組換え実験安全管理規程を制定し、平成 29 年 4 月 1 日付けで施行し、合わせて遺伝子組換え実験安全小委員会を新設した。平成 28 年度の使用動物匹数はマウス 1,642 匹、ラットが 95 匹であった。これらの使用された動物のそれぞれの実験における「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験規程に合わせて動物実験小委員会のホームページの開設準備や動物施設・実験室等の改装を行った。来年度、外部検証を予定している。今年度は 6 月 8 日に 27 年度使用された動物慰霊祭を行った。

発がん物質等危険物質を用いた動物実験に関する要領、X線照射に関する動物実験要領の策定が今後必要である。

## 1-15 情報ネットワーク委員会

構成員 甲斐 倫明、品川 佳満、巻野 雄介、野津 昭文、岩崎 瑞穂、染谷 哲朗

- 1) 学内の情報ネットワーク関係の運営管理の実務、すなわち、教職員の PC 管理、ネットワーク管理、サーバ管理、SPSS の運用管理を行った。
- 2) 無線 LAN の学内整備を計画から発注、運用ルールの策定までを実施した。
- 3) ポスタープリンタの更新計画を進め、新規のプリンタを導入し、運用マニュアルを作成した。
- 4) SPSS とポスタープリンタの新年度からの一部有料化を検討提案し、実現することになった。
- 5) 学生電子掲示板である nekobus を GoogleApps を利用して構築した。新年度から学部学生のポータルサイトとして運用することになった。
- 6) 倫理安全委員会の申請システムをサイボウズに構築し、利用説明会を実施した。

- 1) インターネット時代に対応したセキュリティ対策とその規約の整備を進める。
- 2) PC およびプリンタの更新年度が次年度になるため、現在の課題を整理して更新計画を作成する。
- 3) 教務システムの次期システムのあり方を検討し、次年度に更新ができるように準備する。

## 1) ネットワークシステム WG

構成員 品川 佳満、甲斐 倫明、小嶋 光明、染矢 哲朗

サーバ群 (メール、グループウェア、ファイル、認証など) およびネットワーク全般 (インターネット・イントラネット・無線 LAN) の管理・運営を行った。今年度は、ファイアウォールの更新、学生用ポータルサイトの再構築作業を行った。また、無線 LAN の全学的な整備を行った。

## 2) Windows ユーザーサポート WG

構成員 野津 昭文、佐伯 圭一郎、樋口 幸、染矢 哲朗

学内 (教職員、情報処理教室、メディアセンター・教材作成室、看護研究交流センター、CALL 用ノート PC) の管理およびユーザーサポートを行った。教職員のパソコンの初期設定や設定変更を 19

件程度行い、また適宜パソコンの使用について相談を受け、また実際に使用方法について解説を行った。

### 3) Mac ユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明、恵谷 玲央

教職員用および学内に設置している Mac PC の管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

## 1-16 研究科教育研究委員会

構成員 影山 隆之、小野 美喜、赤星 琴美、梅野 貴恵、甲斐 倫明、福田 広美、神崎 正太

大学院研究科の運営および計画に関する事項について審議する委員会を 11 回開催した。審議結果及び実施結果は以下の通りである。

- 1) 定例学事として、大学院生オリエンテーション（4月8日）、大学院説明会（6月25日、46名参加）、研究計画報告会（9月7日）、研究中間報告会（9月8日）、論文レビュー報告会（3月8日）、研究成果報告会（3月6日、ただしNPコースは1月12日）を開催した。また、修士論文4篇と博士論文4篇に関する審査作業と、後期課程進学希望者の審査作業を行った。シラバスを改定して配布し、大学院生の奨学金・学費減免等に関する事項を審議した。
- 2) 大学認証評価の結果をふまえて専攻・コース別のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、及びディプロマポリシーの見直し作業を行い、表現の統一等を図るとともに、博士論文と修士論文の審査要領の改定作業を行い、また博士論文審査クライテリアを新設した。いずれも正式の運用は次年度からだが、クライテリアは今年度の審査においても参考となった。
- 3) 修士課程のうち研究者養成コースと健康科学コース、および博士（後期）課程の研究指導強化のため、ゼミを必須とし、実施状況を確認した。研究指導の成果の一つとして、過年度の博士論文の一部が日本生殖心理学会誌（2巻2号、2016）で優秀賞を受賞した（實崎 美奈:Associations among the Levels of Desire for Children, Awareness of Mutual Support, and Patient Satisfaction in First-time Patients Receiving Outpatient Infertility Treatment）。
- 4) 入学試験及び進学審査体制の見直しについて審議し、修士課程実践者養成コースの入学試験については専門問題を次年度から廃止することとした。助産学及び広域看護学コースの特別選抜制度について検討したが、直ちには適用せず継続検討とした。入学願書の記載欄は、次回から拡充することとした。
- 5) NP コースの入学定員を拡充して地域枠5名を設けた。8月の入学試験で定員を満たさなかったため、2月に二次募集を行った。

- 6) 大学院学則を改定し、看護管理・リカレントコースのカリキュラムに看護管理学演習を追加した。  
これにより、希望者が履修すれば、認定看護管理者受験資格を得られることとなった。
  - 7) 大学院の広報の強化策として大学院説明会及び「3年生が助産学・広域看護学コースの大学院生と語る会」を本学で開催した（12月22日、3年生12名参加）。
  - 8) 大学院生室の改装整備を完了し、研究等2階をディスカッションルーム、3階をクワイエットルームとして運用を始めた。年度末に大学院生の使い勝手のヒヤリングを行い、次年度の運用方法について検討した（詳細は次年度初めに決定する予定）。
  - 9) 前年度決めた方針に従い、研究室ゼミの運用を開始し、該当学生がいずれかの研究室のゼミに参加していることを確認した。
  - 10) 新入生に対して、指導教員と研究テーマの例を印刷配布してきたが、同じ資料を次年度からウェブ上で公開して受験生確保の一助とすることを決め、年度末から公開に向けた作業を開始した。
  - 11) 助産学コースの広報を兼ねてシンポジウム「大分県の助産師養成を考える」を本学で開催した（5月21日、シンポジスト5名含め参加者54名）。
  - 12) 広域看護学コース修了生、学部卒業生の卒後教育として「卒業生保健師研修会」を開催した（3月4日、参加者28名、うち卒業保健師10名）。
- 1) 受験生確保のための広報戦略をいっそう強化するとともに、入学試験等の方法について検討を継続する。
  - 2) 新入生オリエンテーションの時間と内容を充実する。
  - 3) 学位論文提出要領の見直し作業を行う。
  - 4) 大学院生室の運用方法について継続検討する。

## 1-17 看護研究交流センター

構成員 影山 隆之、岩崎 りほ、平井 和明、板井 里恵、巻野 希和、神崎 純子、生野 法子

看護研究交流センターは大学と社会の窓口であり、地域貢献、地域の看護職者への貢献、看護に関する国際協力・支援等の役割を担っている。さらに平成25年以降は、文科省地（知）の拠点整備事業として採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」の全体についてコーディネートを行っている。このため、センター専従の教職員は予防的家庭訪問実習を実質的に牽引するとともに、それ以外の業務に関する学外との連絡や照会への対応を行ってきた。

予防的家庭訪問実習に関しては、センター専従職員が予防的家庭訪問実習プロジェクトと連携して、以下のように実習を運営した。地域の協力者・関係団体・行政との連絡調整、事業推進会議3回（6月14日、10月11日、2月14日）、これに先立つ幹事会（行政との連絡調整、計3回）・地域連絡会議（地域との打合せ、計6回）の開催（事業運営だけでなく、学生の実習参加の様子や、事業終了後の持続的な貢献方法について討論を行った）、実習要綱の整備、学生・教職員の一斉オリエンテーションの開催（4月13日）、年間を通じた実習の実施（協力者との連絡調整、学生指導、学生提

出物のチェック、担当教員との連絡調整等：詳しくは同実習の項も参照)。また、協力者からの健康情報収集、対照群調査、学生の記録の分析等を行い、一部は学会で発表した(同プロジェクトの項参照)。実習全体の様子を学内で共有するため、実習通信(メールマガジン)の学内配信を開始した。広報活動としては、日本公衆衛生学会で本実習を展示紹介した他、県内テレビ番組・ラジオ番組で紹介された(TOS「ほっとは一と大分」7月2日、OBSラジオ「たんねるけん」9月17日)。第44回九州地区学生指導研究集会(9月1日)、公立大学学長会議(10月13日)、及び「看護展望」誌上でも本実習について紹介した。日本文理大学と共催で「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)日本文理大学・大分県立看護科学大学 平成28年度 成果発表会&合同シンポジウム」を開催した(2月18日、参加者250名)。地域のボランティアにより製作された動画も広報に活用した。これらの活動は「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による評価でS(最高評価)を受けた。

上記実習以外については、前年度までの5部門から再編された6チームがそれぞれの分掌事項について活動し、必要に応じてセンターのスタッフが連絡調整を行った(各チームの項参照)。

予防的家庭訪問実習に係る教育・研究活動の作業量が多かった一方、再編したチームの業務量についてはもうしばらく見定める必要がある。分掌や人員数を適宜見直すことも視野に入れる必要がある。

## 1) 国際交流・留学生チーム

構成員 Gerald T. Shirley、福田 広美、桑野 紀子、吉川 加奈子、馬場 奈穂、久保 紘子

本年度の4月より本学英文Webの改訂作業に取り組み、教職員の方々のご協力の下、学部教育に予防的家庭訪問実習のページと養護教諭教育課程ページを追加、Facultyページをリニューアルし、10月1日に全ページの改訂を終了した。

米国コロラド大学校看護大学 Kathy Magilvy 博士を招聘した(11月12日~23日、詳細は予防的家庭訪問実習プロジェクト参照)。

海外からの研修生受入れや研修プログラムの企画・運営、本学で学ぶ留学生のサポートなど、いっそうの国際貢献を進める必要がある。

## 2) 地域交流チーム

構成員 影山 隆之、赤星 琴美、川崎 涼子、佐藤 弥生、岩崎 りほ

(1) 県の委託で実施した在宅医療推進県の委託による在宅医療推進のための「地域診断ツール」開発事業の報告書・成果物を、県医療政策課に提出した。

- (2) 野津原地域ネットワーク会議に参加し(年3回)、野津原地区の支所や関連団体と情報交換を行った。
- (3) 大分市の委託で「こころの健康についての大分市民意識調査」の解析を行い、その結果を大分市保健所に報告した。

今年度から、COC事業は看護研究交流センター教職員および予防的家庭訪問実習プロジェクトが中心となって実施し、看護研究支援や統計情報処理相談は継続教育支援チームの業務となったので、当チームの業務は大幅に少なくなった。しかし今後も行政等からの協力申し入れを受ける可能性はあるので、申し入れの窓口が看護研究交流センターであることを、ウェブ上でわかりやすく示す必要がある。また平成29年度は大分県国民保護共同実動訓練が行われる予定で、県から協力の要請を受けているので、学生生活支援委員会と連携して対応する予定である。

### 3) 継続教育推進チーム

構成員 伊東 朋子、佐藤 弥生、樋口 幸、後藤 成人

県内の看護の質向上にむけて、県内施設や大分県看護協会との連携を緊密にし、また本学同窓会と大分県立厚生学院同窓会との共存共栄を主眼に置き、支援する方針で活動計画を立てた。具体的には本学同窓会四つ葉会の会員および、大学院修了生との連絡方法の検討などの課題に対して取り組んだ。本学の前身である大分県立厚生学生同窓会草の実会との連携強化にも努める方針で臨んだ。

- (1) 若葉祭の会期中にホームカミングデイを開催した(5月15日、参加者59名)。卒業生修了生の名簿整備作業を進めた。6施設で働く卒業生修了生と交流会を開催した(大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院、アルメイダ病院、湯布院病院、別府医療センター)。
- (2) 統計・情報処理相談5件に対応した。
- (3) 大分県看護協会平成28年度研修計画への講師派遣調整を行い、教員35名を講師として派遣した。
- (4) 8施設に14名の教員を派遣して看護研究支援を行い、支援機関と合同で平成28年度看護研究交流会を本学で開催した(3月21日、参加者35名)。
- (5) 開学20周年事業に向けて、同窓会と協力して名簿整備を進めるとともに、古い卒業生が取得していないg-mailアドレスを発行して大学からの発信が届きやすいようにした。

本年度は看護研究交流センター内の部門がチームという名称に変更となり、業務内容の再編も行われたので、今後、より充実した看護の質向上にむけて、県内施設や看護協会が実施する研修会に講師を派遣していく必要がある。また以前より担当しているホームカミングデイについては、本年度の開催時間が若葉祭の最終時間帯と重なり、在学生の参加が少なかったため、次年度は開催方法等について検討する必要がある。本学同窓会四つ葉会の会員および、大学院修了生との連絡方法の検討など

に対して Gmail の ID とパスワードの各研究室配付等を支援し、連絡先の把握に努める。本学同窓会四つ葉会が開学 20 周年記念式典日と同日に臨時総会を実施予定しており、当チームの関連事業の一環として、臨時総会実施に向けて支援していく。

#### 4) 産学連携推進チーム

構成員 濱中 良志、伊東 朋子、樋口 幸、麻生 優恵

産学連携推進チームは以下の活動を行った。

- (1) 大分県医療ロボット・医療機器産業協議会の下に発足した看護関連機器開発部会（部会長は看護研究交流センター長）に参画した。
- (2) 同部会キックオフイベントとして同協議会と共催で、看護を通したものづくりフォーラム（12月18日、参加者106名）を開催し、東大病院等先進事例の紹介、県立病院・企業・本学からの発表等を通し、産学官連携のプラットフォームの構築に取りかかった。本事業は、地方創生大学等連携プロジェクト支援事業 B として県の助成を受けた。
- (3) 同部会及び大分県と共催で“県立病院発”看護現場とモノづくり連携推進セミナーニーズ探索交流会を開催し（3月28日、県立病院）、約90名が参加した。
- (4) 本学と日本文理大学・大分県立芸術文化短期大学・大分東部病院の共催で、5回シリーズで生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ (Hallow) 5回シリーズを2期にわたり開催し、本学からは延べ14名が参加した。
- (5) 製品開発で共同する企業との間で大学名の使用や特許関連秘密保持に関する契約について検討した。県内の企業や病院と共同開発中の機器の一部について特許取得や商品化の検討を開始した。

学外からの問い合わせやオファーが増える傾向にあるので、メンバーの役割と連携体制を整備する必要がある。新設チームをウェブサイト上で標記する必要がある。

#### 5) NP 事業推進チーム

構成員 福田 広美、草野 淳子、甲斐 博美

日本 NP 教育大学院協議会の理事会および社員総会、日本 NP 学会の理事会および総会を開催した。国立長寿医療研究センター診療看護師研修を実施し5名が研修を行った。第7回 NP 資格認定試験評価会議を開催し、評価委員3名他、理事役員等により試験に関する評価を行った。さらに、NP 資格認定試験を開催し、受験者47名であった。診療報酬ワーキンググループによる会議を行い、次期診療報酬の改定に向けた要望書案を作成した。日本 NP 教育大学院協議会ハワイ NP 研修を行い16名が参加した。日本 NP 教育大学院協議会と日本 NP 学会ホームページの作成を行った。

日本 NP 教育大学院協議会および日本 NP 学会の発展に向けて組織的な運営を行う予定。

## 6) 学術ジャーナルチーム

構成員 平野 亙、G. T. Shirley、定金 香里、安部 真紀、山田 貴子、秋本 慶子、馬場 奈穂、白川 裕子

看護科学研究編集委員会ならびに査読委員の事務を行ったほか、J-Stage への登載手続きを完了し、「看護科学研究」14 巻 2 号（2016 年 8 月発行）、14 巻 3 号（2016 年 12 月発行）の審査・編集・発刊に関する実務を行った。

年間目標である年間 3 号の発刊を達成した。今後も投稿論文を増やすために広報を充実させるとともに、増加する事務処理の効率化を進め、少しでも構成員の負担を軽減するよう努める必要がある。

## 1-18 衛生委員会

構成員 飯田 隆次（1 号委員）、角 匡幸（2 号委員）、赤星 琴美（3 号委員）、佐伯 圭一郎、石倉 順（以上、4 号委員）、工藤 優（オブザーバー）、高橋 めぐみ（事務局）

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計 9 回開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

### 1 職員の健康管理

- (1) 定期健康診断を 4 月 20 日に実施した。健康診断結果を確認し、要精密検査を行う必要のある職員に、当該精密検査受診を勧奨した。
- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックの実施のため、平成 28 年 4 月 1 日付けで実施要領を策定した。9 月にストレスチェックを実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11 月 2 日に学内接種を行った（希望者 28 名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定とその評価の報告を行った。
- (5) 夏季休暇の取得促進のため広報を行い、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

### 2 健康増進活動支援事業

- (1) 昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開

催し、教職員 47 名が参加した。

- (2) 学外のスポーツイベントに「看護科学大学チーム」として参加する場合には、参加負担金の助成を行った。
- (3) 県主催の事業所対抗ウォーキング企画に 1 チーム参加した。

### 3 職場巡視

12 月 13 日に執務室、図書館、保健室及びサークル室等を巡視し、棚やキャビネットの転倒防止措置やプリンタの転落防止措置が不十分である箇所について、天井突っ張り棒や粘着マットで固定することとした。

### 4 その他

- (1) 大分県民の健康寿命日本一への取組みを支援する「健康寿命日本一おうえん企業」に平成 28 年 9 月 9 日付けで登録された。
- (2) 平成 28 年度における本学の健康づくりの取組状況が評価され、「生涯健康県おおいた 21 推進協力事業所（健康経営推進部門）」における健康経営事業所として認定された。

## 1-19 評価委員会

構成員 藤内 美保、影山 隆之、飯田 隆次、市瀬 孝道

「教員評価の実施に関する基本的な方針」の評価方法に従って評価を実施した。評価対象は平成 28 年度の教員活動としたが、研究成果については暦年で 2016 年の成果を評価対象とした。学長指名の教員評価委員には市瀬教授が指名された。2 月 10 日を評価書の提出期限とし、教員評価結果を学長に報告した。その後 3 月 8 日付で、学長より各教員へ教員評価通知書が配付された。

「教員評価の実施に関する基本的な方針」の改定案が平成 29 年 3 月の教育研究審議会で承認されたので、次年度は改定された方針に基づいて適切に評価を実施する必要がある。

## 1-20 NP プロジェクト

構成員 小野 美喜、村嶋 幸代、石田 佳代子、甲斐 博美、草野 淳子、佐伯 圭一郎、高野 政子、藤内 美保、濱中 良二、浜松 弘一、福田 広美、宮内 信治、森 加苗愛、生野 直子

平成 28 年度の NP プロジェクトの主となる活動目標は以下の 2 点であり、それぞれについて活動を行った。

1. 大学院教育にて特定行為を履修した修了生の活動効果を情報収集し、NP 教育の効果を検証する。

- 1) 平成 28 年度学内競争的研究費への研究申請を行い NP プロジェクト研究費を獲得した。地域包括的ケアに向けた在宅での NP (診療看護師) の活動成果に焦点を当て、訪問看護のフィールドで活動している修了生の成果を検証することを目的に一般看護師と NP (診療看護師) の訪問成果の比較検討調査を行っている。勤務施設の概要、稼働率、特定行為を必要とする事例を収集継続中である。現段階では看取り事例については高い臨床推論が必要な場面が多々あり、診療看護師 (NP) の能力が発揮された事例が多かった。
  - 2) 修了生のフォローアップ研修を 2 回実施し、修了生の活動の情報共有をするとともに、研修生に対するアップデートな情報提供を大学側より提供し、お互いに学ぶ場をとった。2 回の研修会の内容は以下である。第 1 回 7 月 15 日ハワイにおけるプライマリ NP の活動 (講師 魁生峰子様)、7 月 22 日小児 NP の活動 (講師 デンデマン美智子様) 第 2 回 2 月 10 日創傷管理に関するガイドラインと陰圧閉鎖療法について (講師 創傷管理認定看護師 細井様)。各フォローアップ研修には修了生が約 20 名参加した。修了生アンケートによりフォローアップ研修を継続希望する意見が多数であった。
  - 3) 学会発表・研究成果は次のような学会で発表した。9<sup>th</sup> ICN INP/APNN 講演・発表 (香港 9 月)、第 2 回 NP 学会 (名古屋 11 月) 等。
2. 地域枠の入学生の確保と入学定員増加に伴う教育環境を整備し、大分県の医療機関との連携体制を深め、教育と看護の質向上のための取組を促進する。
- 1) 地域枠の創設により 1 年次生は 10 名が入学し、学生が増員したことと、特定行為研修機関として学びの場を確保するために実習病院を 16 施設から 20 施設に増やし実習を行った。連携を強化するために実習合同会議を実習前後の 2 回実施し (平成 28 年 7 月 2 日、平成 29 年 2 月 18 日) 情報交換と実習評価を行った。
  - 2) 例年通り教育の質の確保のための段階的な試験を行った。1 年生は 12 月口頭試問を実施し、3 月 14 日の進級試験への学習体制を強化した。進級試験は CBT を導入した試験とし、10 名 4 が受験し 9 名が合格、1 名が 3 月 21 日再試験を行い合格し進級となった。2 年生は実習前試験を実施 (平成 28 年 6 月 24 日筆記試験、7 月 3 日 OSCE 試験) 4 名が受験し合格した。また平成 29 年 2 月 2 日の修了試験では 3 名が受験し 2 名が合格、2 名が再試験の結果合格した。
  - 3) 特定行為管理委員会の実施。厚生労働省から指定を受けた研修機関として適正な教育をしているかどうかについて学外委員を交えて審議する特定行為管理委員会を 3 回開催した (平成 28 年 6 月 27 日、11 月 4 日、平成 29 年 3 月 9 日) なお、今年度は当委員会での審議の結果、修了生 3 名の研修免除が認定された。

NP プロジェクトの次年度の課題は次の 2 点である。

1 点目は大分県内地域枠の受験生・入学生のリクルートと人材養成を行うこと、2 点目は遠方の学生が学べる環境、繰り返し学習による学習効果を整備した E ラーニング体制の構築することである。

## 1-21 予防的家庭訪問実習プロジェクト

構成員 影山 隆之、藤内 美保、福田 広美、小野 美喜、川崎 涼子、稲垣 敦、宮内 信治、岩崎 りほ、杉本 圭以子、定金 香里、巻野 雄介、山田 貴子、村嶋 幸代

本プロジェクトは、文部科学省地（知）の拠点整備事業として採択されている「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」の計画・実行・評価を担っている。本年度はプロジェクト会議を5回開催し（3月22日、5月31日、8月8日、10月3日、1月31日）、上記構成員と看護研究交流センターの教職員が運営して、予防的家庭訪問実習と関連事業に関する方針と実施方法に関する協議を行った。年度初めに訪問チームの学生・教員編成と学生・教職員へのオリエンテーションを行った。実習の運営自体は看護研究交流センターが中心となり、全教員の参加のもとに行った。年度末には、実習のあり方について学内検討会を開催した（2月28日）。

文部科学省による上記事業は次年度までであり、平成30年度以降に行う本実習は本学の自主事業となるので、実習運営のあり方を大幅に見直す必要がある。この体制を検討、構築することが、次年度の課題である。

## 1-22 健康増進プロジェクト

構成員 稲垣 敦、濱中 良志、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、秦 さと子、巻野 雄介、田中 佳子、宿利 優子、安部 真紀、馬場 奈穂

### 【事業・研究協力】

- ・ Smart Life Project（厚生労働省）
- ・ 大分県介護予防二次予防事業（大分県福祉保健部、大分県運動機能向上専門部会ほか）
- ・ 健康・体力・人づくり推進事業（大分県教育委員会）
- ・ 地域スポーツ活性化推進事業（大分県教育委員会、日本スポーツ振興センター）
- ・ 地域ふれあいサロン事業（大分市社会福祉協議会）
- ・ 姫島村健康づくり事業（姫島村健康推進課、姫島村診療所）
- ・ スポーツ救護ナースおよびスポーツ救護員の育成・派遣事業（大分県スポーツ学会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院、西別府病院ほか）
- ・ 森林セラピートレイルランニング大会 in 野津原実行委員会（大分市、野津原商工会 3/19）
- ・ ななせの里まつり実行委員会（大分市、野津原商工会 11/6）
- ・ 大分川ダムウォーキング大会（野津原地区、大分市、国土交通省 11/13）
- ・ 高齢者用の機能食品の研究開発（ヤクルトヘルスフーズ株式会社 4/1～）
- ・ 大分県スポーツ学会第8回学術大会（別府ビーコンプラザ 12/18）
- ・ 日本体育測定評価学会第16回大会（ホルトホール大分 3/4-5 予定）

- ・ ICHPER-SD 世界大会招致活動

#### 【研究】

- ・ 離島住民の健康寿命とストレス：大分県姫島村について. 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪.
- ・ 対戦型スポーツのパフォーマンス構造分析. 日本体育測定評価学会第 15 回大会, 東京.
- ・ 体育・スポーツ科学で生まれた数理モデルや解析法 (4) : ファジィ多変量解析. 日本体育学会第 67 回大会, 大阪.
- ・ 脳損傷者の実車運転技能に関連する神経心理学的検査について: システムティックレビューとメタ分析. 総合リハビリテーション 44:1087-1095.
- ・ 脳損傷者の運転技能に関与する認知機能について. 日本臨床作業療法研究 3:33-38.
- ・ Predictable neuropsychological tests on driving ability for patients with brain disorders. Asia Pacific Stroke Conference 2016, Brisbane.

#### 【人材育成、啓蒙・啓発】

- ・ 研修会等：大分県スポーツ学会第 6 回スポーツ救護講習会（県看護研修会館 4/24：80 名）、姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター第 1 回 9/13, 30 名、第 2 回 3/7 予定）、健康教室（政所公民館 2/15, 40 名）
- ・ 健康・体力チェック：本学若葉祭（本学 5/14-15, ストレスを計ろう！, 220 名、筋肉を計ろう！, 188 名）、おおいたスポーツ広場 2016（コンパルホール 10/10, 734 名）、大分トリニータホームゲーム（大銀ドーム 10/23, 377 名）、第 33 回緑が丘体育祭（横瀬小学校 10/16, 298 名）、第 42 回富士見が丘体育祭（横瀬小学校 10/30, 318 名）、大分市野津原地区第 31 回ななせの里まつり（みどりの王国 11/6, 402 名）、大分川ダムウォーキング大会（野津原西部小学校 11/13, 383 名）、総合型地域スポーツクラブチャレンジ選手権（判田中学校 1/29, 186 名）、2017 森林セラピートレイルランニング大会 in のつはる&芽吹きウォーキング（県民の森 3/19, 55 名）、第 5 回森林探検ウォーキング（富士見が丘中央公園 3/25 予, 30 名）

#### 【広報・メディア】

- ・ 大分合同新聞（5/23）「姫島村なぜ健康長寿？」
  - ・ 姫島村 CTV：姫島村健康づくり事業研修会
  - ・ 広告：第 3 回大分県医療介護ロボ・HAL 研究大会(9/13)
  - ・ パネル展示：活動紹介（若葉祭 5/14-15、オープンキャンパス 7/17）
  - ・ チラシ：おおいたスポーツ広場 2016（10/10）
  - ・ 本学 HP：研究紹介「なぜ姫島村は健康寿命が長いのか？」
  - ・ 本学 HP：①地域・社会貢献、②大学アルバム「健康・体力チェック」
  - ・ パンフレット：本学パンフレット 2017（p.27）
  - ・ パンフレット：「めじろん元気アップ体操」（市町村に 15,400 枚配布）
  - ・ 大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操&同ビッグ 4 パンフレット PDF 版
  - ・ YouTube・大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操動画①体操のみ編、②完全収録編、③めじろんと一緒に編（動画再生回数 32,388 回）
- ・ 実学的な研究を推進する。

## 1-23 看護系全体会議

構成員 村嶋 幸代（学長）、藤内 美保（学部長）、影山 隆之（研究科長）、看護系教員全員

4月、7月、12月の年に3回、定例会議を開催した。毎回、学部と大学院の各実習における計画・進捗状況・結果の報告、予防的家庭訪問実習の計画・進捗状況・結果の報告、実習運営小委員会や実習改革WGによる活動報告などを行い、学生の実習状況や目標の達成状況などを共有した。また、以下のテーマについて意見交換を行った。

### 1) 第1回（4月）

平成28年熊本地震による実習施設の被災状況などを共有し、被災した実習施設に対する本学からの支援方法を検討した。また、本学の危機管理体制について、見直しが必要であることなどを確認した。

### 2) 第2回（7月）

実習改革WGより実習指導指針、事前研修計画書、実習予想展開図などについて提案があり、意見交換を行った。実習改革WGの目的、活動方針、指針に基づく運用計画等の内容を共有した。

### 3) 第3回（12月）

前回は引き続き、実習改革WGで検討中の実習指導指針（引き継ぎ書、実習記録の取り扱いなど）について意見交換を行った。また、実習での指針活用につなげていくことの重要性を確認した。その他、実習に関する意見として、各段階実習でのオリエンテーション資料の保管に関する事、TA（ティーチングアシスタント）の活用に関する事、新人教員のFDに関する事などの意見があり、関連内容の情報交換などを行った。

## 2 学内行事の概要

### 2-1 学年暦

#### 前期

#### 後期

### 4月

- 7 入学式
- 8 全学オリエンテーション
- 11,12 新入生オリエンテーション
- 11 2～4年次生授業開始
- 11～18 前期履修登録
- 12 健康診断
- 13 1年次生授業開始
- 13 予防的家庭訪問実習オリエンテーション
- 21 交通安全講習会
- 22 全学スポーツ交流会

### 5月

- 9～6/14 地域看護学実習,  
在宅看護学実習(4年次生)
- 11 キャンパスクリーンデー
- 14,15 若葉祭
- 15 ホームカミングディ
- 23～27 老年看護学実習(3年次生)

### 6月

- 中旬 学生大会
- 19 開学記念日
- 20～7/8 総合看護学実習(4年次生)

### 7月

- 11～15 初期体験実習(1年次生)
- 17 オープンキャンパス
- 18～23 学生交流プログラム(ソウル大学より)
- 21 夏期休業開始
- 21～8/5 小児看護(保育所)実習(3年次生)

### 8月

- 27 大学院入学試験

### 9月

- 2～ 成人急性期, 成人・老年慢性期, 小児,  
母性, 精神看護学実習(3年次生)
- 5 夏期休業終了
- 30 前期授業終了

### 10月

- 3 後期授業開始
- 3～11 後期履修登録
- 29 看護国際フォーラム

### 11月

- 19 特別選抜試験(推薦・社会人)
- ～25 成人急性期, 成人・老年慢性期, 小児,  
母性, 精神看護学実習(3年次生)

### 12月

- 1 卒業研究要旨提出締切(4年次生)
- 6 卒業研究論文提出締切(4年次生)
- 7,8 卒業研究発表会
- 9～22 看護アセスメント学実習(2年次生)
- 24 冬期休業開始

### 1月

- 7 冬期休業終了
- 10～23 基礎看護学実習(1年次生)
- 13 大学入試センター試験準備  
(2,3,4年次生休講)
- 14,15 大学入試センター試験

### 2月

- 下旬 看護師・保健師および助産師国家試験
- 25 一般選抜試験(前期)および特別選抜  
試験(私費外国人留学生)
- 27 進級試験(2年次生)
- 28 後期授業終了

### 3月

- 1 春期休業開始
- 12 一般選抜試験(後期)
- 17 卒業式

## 2-2 オープンキャンパス

平成 28 年度の開催は夏休み中の 7 月 17 日（日）に実施した。当日は 387 名（昨年比プラス 37 名）と多くの参加があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や学生自治会による TAKIO ソーランの演舞、1 年次生の合格体験発表、3 年次生、4 年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業では「若返る細胞～iPS 細胞の可能性」「看護系大学で学ぶ養護教諭の役割」「世界の人々の健康と看護」というタイトルで、高校生とその父兄を対象に約 20 分のセミナーを行った。体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。特に在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当したことや、実習室への誘導を行ったことは、参加者が在在学生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。

## 2-3 公開講座

平成 28 年度は 2 回の有料公開講座を開催した。第 1 回は「自殺予防対策と看護職の役割」と題して 9 月 17 日（土）に、大分駅前のホルトホール大分で開催した。講師は、豊後大野市役所市民生活課健康推進室 主幹、本学精神看護学研究室 教授と講師の 3 名で、参加者は 50 名であった。第 2 回は「原子力災害における放射線リスク対応—医療職が理解しておくべきこと—」と題して 12 月 15 日（木）に、環境保健学研究室 教授が講師となり、国東市のアストくにさきで開催した。参加者は 10 名であった。2 回の合計で 60 名が公開講座を受講した。パンフレットを作成し県下の病院や施設、保健所への配布、市報など地域広報に加え、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおい）や行政機関等、講座内容に関連のある看護協会、病院等に参加を呼びかけた。

## 2-4 第 18 回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催で看護国際フォーラムを平成 28 年 10 月 28 日に、別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。テーマは「認知症の人と紡ぐ看護実践～今、私達に求められる看護のチカラ」で、米国から 1 名、国内から 2 名の講師、さらに、認知症当事者とその支援者を招聘し、参加者は 306 名と大盛況であった。

## 2-5 姉妹校学生交流

ソウル大学から交流派遣学生と教員が来学予定であったが、熊本・大分地震の影響を両校で協議し今年度は中止とした。

本学から大学院交流派遣学生として大学院生 2 名、学部交流派遣学生として学部生 5 名を同行教

員 1 名と共に 8 月 7 日から 8 月 10 日までの 4 日間、ソウル大学に派遣し交流を深めた。

## 2-6 若葉祭（大学祭）

5 月 14 日、15 日の若葉祭において教員イベントの企画募集と当日運営を実施した。教員企画は健康教育等の大学学部教育の一部内容や設備の紹介など 12 企画を開催し、参加者は 2 日間で 860 名であった。教員イベントでは、学生にも協力者として数名ずつ参加してもらうことで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。また、地域の方々や学生に、学部で行っている研究を知ってもらう目的で、全研究室の卒論をポスター掲示した。その他、広報活動として、研究室紹介のパネルを更新し、7 月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置するなど、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

## 2-7 地域ふれあい祭

平成 28 年度の地域ふれあい祭りは、11 月 6 日（日）に開催された「ななせの里まつり（主催者発表の参加者 6500 人）」に、学長と教職員 15 名とボランティア論で学生 20 名が参加した。本イベントは大学に隣接するみどりマザーランドで開催された。大学紹介はテント内でのパネル掲示と、大学案内パンフレットの配布や COC 地の拠点事業の紹介を行った。ブースの来場者は地元住民で、延べ人数 900 名であった。その他、イベントの駕籠かきレースには学生や学長はじめ教職員等が参加し活躍した。また、健康増進プロジェクトと協働し、血圧測定、体成分分析、握力測定などの健康指導・健康チェックを実施した。

## 2-8 アニュアル・ミーティング

本年度のアニュアル・ミーティングは 3 月 3 日に開催した。一般演題 12 件、奨励研究 7 件、先端研究 4 件、プロジェクト研究 1 件の合計 24 演題がポスターで発表され、活発な討論が行われた。参加者は 46 名であった。

### 3 教育活動

#### 3-1 平成29年度入学者選抜状況

##### 1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

##### 選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員					
			一 般 入 試		特 別 入 試			
			前期日程	後期日程	推 薦		社 会 人	私費外国人 留学生
県内	県外							
看護学部	看護学科	80人	35人	10人	35人	注1) 5人 以内	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 推薦県外の「5人以内」及び社会人の募集人員「5人以内」は推薦の(県内)35人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の35人に含める。

##### 入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者			
						計	県内 (率)	男(率)	
特 別	推 薦	県内	91	91	31	2.9	31	31(100.0)	6(19.4)
		県外	23	23	3	7.7	3	0(0.0)	1(33.3)
	社会人	3	3	1	3.0	1	1(100.0)	0(0.0)	
	計	117	117	35	3.3	35	32(91.4)	3(8.6)	
一 般	前 期	187	180	43	4.2	39	15(38.5)	3(7.7)	
	後 期	201	98	10	9.8	9	3(33.3)	1(11.1)	
	計	388	278	53	5.2	48	18(37.5)	4(8.3)	
合 計		505	395	88	4.5	83	50(60.2)	11(13.3)	

##### 試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成28年 11月19日(土)	平成28年 11月1日(木)～11月7日(月)
	社会人			
一 般	前 期	総合問題、面接	平成29年 2月25日(土)	平成29年 1月23日(月)～2月1日(水)
	後 期	総合問題、面接	平成29年 3月12日(日)	

##### 2) 特別入学試験

###### ①推薦入試

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総

合問題」と「面接」により実施した。

## ②社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満24歳以上で、社会人の経験を3年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

## 3) 一般入学試験

平成29年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数
前期日程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4教科6科目
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ・数学B』	
	理 科	「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から2科目を選択	
	外国語	『英語』（リスニングを含む）	
後期日程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	3教科 3科目 を選択 または 3教科 4科目 を選択
	地理歴史 公民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、「日本史B」、「地理A」、「地理B」、「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・経済』から1科目を選択	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、『数学Ⅱ・数学B』から1科目を選択	
	理 科	「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学基礎」から2科目を選択 または 「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から1科目を選択	
	外国語	『英語』（リスニングを含む）	
			4教科4科目 または 4教科5科目

注1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注2) 後期日程については、「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。また、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位3教科を合否判定に用います。

注3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注4) 上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

### 3-2 平成29年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

#### 1) 看護学専攻

##### 概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」、「専門問題」（実践者養成のみ）及び「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者 養成	NPコース	10名 (うち5名は地域 枠)
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	10名
				看護管理・リカレントコース	2名

##### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	39	38	34	1.1	31	17( 54.8)	6( 19.4)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 専門問題 実技試験 面接	平成28年 8月27日(土)	平成28年 8月1日(月)～8月5日(金)

#### 二次募集

##### 概要

8月に実施した看護学専攻実践者養成（NPコース地域枠）の試験結果、合格者が募集人員に満たなかったため、NPコース地域枠については、再度募集を行った。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	実践者養成	NPコース(地域枠)	3名

## 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(0.0)

## 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成 29 年 2月 25 日 (土)	平成 29 年 1月 23 日 (月) ~ 2月 1 日 (水)

## 2) 健康科学専攻

### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集したが、出願者はなかった。

### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2名

## 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成 28 年 8月 27 日 (土)	平成 28 年 8月 1 日 (月) ~ 8月 5 日 (金)

### 3-3 平成29年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

#### 1) 看護学専攻

##### 概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、募集をした。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

##### 試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県内（率）	男（率）
博士課程	3	3	1	3.0	1	0( 00.0)	0( 00.0)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成28年 8月27日（土）	平成28年 8月1日（月）～8月5日（金）

#### 2) 健康科学専攻

##### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、募集した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2名

### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
博士課程	1	1	1	1.0	1	0( 00.0)	0( 00.0)

### 試験科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
総合問題 面接	平成 28 年 8 月 27 日 (土)	平成 28 年 8 月 1 日 (月) ~ 8 月 5 日 (金)

## 3-4 平成 28 年度大学院看護学研究科博士課程 (後期) 進学審査状況

### 1) 看護学専攻

#### 概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程 (前期) を平成 29 年 3 月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

#### 募集人員

研究科名	課 程 名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程 (後期)	看護学専攻	若干名

### 審査の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
博士課程	2	2	2	1.0	2	2( 100.0)	0( 00.0)

### 審査科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
特別研究 面接	平成 28 年 8 月 24 日 (水)	平成 28 年 7 月 15 日 (金) ~ 7 月 22 日 (金)

## 2) 健康科学専攻

### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的とする。対象者はいなかった。

## 3-5 進学相談

### 概要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験について PR するため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内 21 カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、6,893 人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、253 人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は 33 人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

## 3-6 在学生の状況（平成 28 年 4 月 1 日現在）

学生総数 413 名（学部生 337 名、院生 76 名）

（単位：人）

学 生 数	学 生 数				
	計	県 内	県 外	男	女
1 年 次 生	92	57	35	5	87
2 年 次 生	81	47	34	10	71
3 年 次 生	87	53	34	7	80
4 年 次 生	77	48	29	8	69
計	337	205	132	30	307
割 合 (%)	100.0	60.8	39.2	8.9	91.1
大学院博士前期（1 年次生）	35	29	6	5	30
大学院博士前期（2 年次生）	21	12	9	1	20
大学院博士後期（1 年次生）	6	4	2	1	5
大学院博士後期（2 年次生）	2	2	0	1	1
大学院博士後期（3 年次生）	12	8	4	4	8
計	76	55	21	12	64
合 計	413	260	153	42	371

### 3-7 各研究室の教育活動

#### 3-7-1 生体化学研究室

##### 1 教育方針

本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。

##### 2 教育活動の現状と課題

現状においては、学部1年次生は、生体科学研究室が担当する科目（解剖学・生理学・生化学）の新しい専門用語に戸惑いながらも、ある程度のレベルに到達できていると思われる。他方、大学院教育での生体科学は、ある程度の専門知識を有している学生がほとんどであるため、専門知識の理解は深まっている。課題としては、学部1年次生において生体科学を単純暗記ではなく、さらに、深く理解させることに重点をおくことが必要である。

##### 3 科目の教育活動

###### 1) 生体構造論

1年次前期

濱中 良志、岩崎 香子

現状においては、人体の構造（解剖学）について、1年次生は意味づけをしないで丸暗記する傾向にあり、短期記憶にとどまっていた。そのため、**active learning**の一環として、1年次生を12グループに分けて、基礎看護学研究室・アセスメント看護学研究室の協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の構造（解剖学）を議論しながらの議論を通して教授した。

###### 2) 生体機能論

1年次前期

濱中 良志、岩崎 香子

現状においては、人体の機能（生理学）について、1年次生は、莫大な量进行处理と感じていたため、理解するべきところを単純暗記に切り替えて学習する傾向にあった。そのため、**active**

learning の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室・アセスメント看護学研究室的協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の機能（生理学）を議論しながらの議論を通して教授した。

### 3) 生体代謝論

1 年次後期

安部 眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義した。基本的な生体分子の種類、性質、機能について講義した。生体での反応がイメージできるように、低分子から高分子へと話しを進め、酵素、ビタミン、ミネラル、生理活性物質について解説を加えた。エネルギー代謝を生化学と個体レベルのマクロな視点から栄養学で講義した。栄養の中では、食品の特定を理解できるようにし、対象者に対して食事指導ができるように、食事バランスガイドや食品についての内容も加えており、食事摂取基準の設定根拠にふれるように努力している。講義中に、教科書の該当箇所を探して要約するレポートを学生に記述させ、内容の理解を深めさせるとともに、評価の対象とした。

### 4) 応用生体機能反応論

4 年次前期後半、後期前半

濱中 良志、市瀬 孝道、吉田 成一

現状において、4 年次生は、1 年次に学習した解剖学・生理学を疾患へのアセスメントや病理学・薬理学等の教科とは独立した教科ととらえていた。そのため、生体構造・機能論がどのように代表的疾患の病態生理や薬物治療へ関与しているのか説明しながら、4 年次生に解剖生理学・病理学・薬理学を教授した。

### 5) 健康科学実験 II 組織学実習

濱中 良志

現状において、2 年次生は、1 年次に学習した生体構造・機能論の知識が不足していた。最初に、人体の代表的な臓器（肺・胃・肝臓・膵臓・腎臓・甲状腺・精巣・卵巣）の構造と機能について説明した。それぞれの臓器の組織切片をヘマトキシリン・エオジン染色したプレパラートを顕微鏡で観察させ、低倍率で全体像をスケッチさせ、高倍率でその組織の特徴的な構造をスケッチさせた。スケッチの際に、その構造にどのような意味があるのかを考えさせながら、顕微鏡をとおして、2 年次生に、生体構造と機能の相互関係を教授した。

## 6) 健康科学実験 X 心電図と心拍変動

岩崎 香子

心臓の電気信号と調節機構を復習してから学生個々が心電図波形取得を実習した。正常波形、筋電図混入波形を収集、比較することで正常心電図波形取得に必要な条件を考えさせた。さらに7事例について特徴的な異常波形の発見とその理由を考察し、心電図から読み取れる循環器異常について学びを深める機会を持たせた。

## 7) 健康科学実験 XI 食物栄養学実習

安部 眞佐子

健康を維持増進させるために有効な食事について実習した。特に、生活習慣病予防として自分の食事の塩分を理解できるように、塩分計を用いた食品の分析と自分の食事の塩分量計算、並びに、尿中のナトリウムカリウム比を算出し、食事の振り返りをさせた。また、嚥下困難者のための食品のとろみを簡易測定し、とろみの程度をとらえられるようにした。さらに、介護食と離乳食を試食し、生体状況に適した食事について考えた。

## 4 卒業研究

- ・  $\beta$ セクレターゼ欠損マウスと発育不全
- ・ 細胞ストレスと分泌タンパク質
- ・ 母親の妊娠期における卵摂取からみた乳幼児の卵アレルギー発症の検討
- ・ 幼児を持つ親の誕生月によるアレルギー発症頻度の検討
- ・ 鉄欠乏状態は骨折リスク因子のひとつに成り得るか

### 3-7-2 生体反応学研究室

#### 1 教育方針

生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

## 2 教育活動の現状と課題

昨年に引き続き平成 28 年度は平成 23 年度カリキュラム（生体薬物反応論 II：3 年次生、応用生体機能反応論：4 年次生）と平成 27 年度カリキュラム（生体薬物反応論 I：2 年次生、生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：1 年次生）の講義を進めた。生体薬物反応論 II と応用生体機能反応論以外は平成 27 年度カリキュラムとなった。平成 27 年度カリキュラムはそれぞれの科目で 5 コマ少なくなったため、基本となる重要な部分を理解しやすく教授した。看護実践を行ううえで、解剖学や生理学と共に病理学や薬理学を十分に理解しておくことの重要性を認識させ講義を進めることが重要である。しかし、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べると極めてわるい。講義の進め方の工夫や欠席者への対処が必要であると考え、基礎科目の整理の仕方やまとめ方などについての指導も必要であると考え。

## 3 科目の教育活動

### 1) 生体反応学概論

1 年次後期前半

市瀬 孝道

この科目は病理学総論を講義している。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリントを配布してパワーポイントも使って講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

### 2) 生体反応学各論

1 年次後期後半

市瀬 孝道

本科目は病理学の教科書の病理学各論を講義している。生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

### 3) 微生物免疫論

1 年次後期

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

昨年度と講義内容に大きな変更は加えなかったが、新たに、母子手帳を用い、各学生の感染症予防状況を確認させる、いわゆる「アクティブ・ラーニング」を一部採用したが、対応できない学生が散見され、学習態度の向上が今後の課題である。

また、本科目は2年次から3年次への進級必須科目であることを十分理解し、理解度が低い学生には、試験前に、自身の学習取得状況を理解させる必要を検討するなど、今後より一層、学習効果を高める方策が必要となる。

### 4) 生体薬物反応論 I

2 年次前期

吉田 成一

生体薬物反応論 I は薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、昨年度同様、総論分野（特に薬物動態に関する内容）や解剖生理学の理解が前提となる交感神経系に関する医薬品について、理解度が低い学生が散見された。これらの理解度が低い場合、3年次で行う生体薬物反応論 II の理解の妨げになるため、今後、薬物動態や交感神経系に関する内容についてより充実させていきたい。

一方、生活習慣病に用いる医薬品については、他と比較すると比較的理解度は高い状況であり、次年度以降はより高い理解度を要求することも可能である。

### 5) 生体薬物反応論 II

3 年次前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり临床上使用する医薬品全般について講義した。

2 年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。しかし、脂質異常症、

中枢神経系疾患に用いる医薬品については、理解度が低く、今後、理解度の低い分野に関しての教授内容および方法の検討が必要である。

単位修得状況は基本的に高く、今後、より専門的な講義内容を含んだ講義を行い、学生の医薬品分野における理解度のさらなる向上を目指したい。

## 6) 健康科学実験 III 血液検査

定金 香里

血液検査のデータから患者の状態をアセスメントすることは、看護学生にとって不可欠なスキルであるが、臨床現場では、そのデータがどのように得られるのかを知る機会はほとんどない。本実習では、ヒトの血液検査の手技に準じて、Ht 値の測定（マイクロヘマトクリット法）、CRP 検査（定性検査）、赤・白血球数測定（血球計算盤を用いた視算法）、血球標本の作製、形態観察を行った。いずれの検査も、標本の作製や診断を教員の指導の下、学生自身が行った。また貧血の診断基準に関する考察や演習も行った。

## 7) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

また、得られたデータを統計学手法により評価すること、レポートの記載方法についても本実験を通して教授した。

## 8) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。例年と同様にラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

#### 4 卒業研究

- ・黄砂バイオエアロゾルから分離した真菌の経気道曝露影響
- ・細胞培養実験による PM2.5 の炎症誘導における LPS, 酸化ストレスと金属の役割
- ・PM2.5 と黄砂の単一及び複合曝露による肺のアレルギー悪作用の比較
- ・PM2.5 や黄砂の構成成分 LPS の胎児期曝露による出生仔免疫系への影響
- ・黄砂が惹起するアレルギー性気道炎症増悪作用における酸化ストレス寄与についての検討
- ・妊娠期の LPS 曝露が雄性出生仔の生殖器系への影響

### 3-7-3 健康運動学研究室

#### 1 教育方針

- ① 体を動かすことの楽しさを体感する
- ② 健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する
- ③ 個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する
- ④ 自分に合った運動を見つける
- ⑤ 運動習慣を身につける
- ⑥ 科学的なものの見方や考え方などを知る
- ⑦ ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす

#### 2 教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れ、社会と学生のニーズに配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

1年次は健康運動ボランティア演習から始まる。この科目は、人、社会、自然と直接かかわる体験を通して、地域や社会のために何かをすることで喜びを感じ、人間としてごく自然な暖かい感情を育むことを目指している。また、地域や社会の構成員としての自覚を確認し、相互に支え合うという意識を醸成する。そして、意欲を高め、生きていく上で大切なことを発見させることを目指している。

大学に入学すると身体活動量は低下し、特に一人暮らしになると、食事や休養の量、バランス、リズムが崩れ易い。これにより、体力の低下、ストレス亢進、自律神経活動の低下、肥満が懸念される。そこで、できるだけ実習を入れて体を動かす機会を増やし、1年次の健康運動では運動強度と運動量の確保のために、行動変容理論等を活用している。昨年度から、国際化時代に対応して日本の伝統文化を知るためにも、運動的要素を合わせもつ和太鼓を取り入れた。

今年から、2年次の身体運動科学がなくなり、健康運動学演習が加わった。内容的には身体運動科学の一部が健康運動学に移行し、全く新しい健康運動学演習が加わったことになる。この科目では、生涯スポーツにつなげるため、学生が課題を見つけ、目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して毎週実施し、最初と最後に効果判定のための目標に合った計測を実施する。また、継続をサポートするように行動変容理論等の講義を適時入れている。

大学院に関しては、博士課程の学生が学位論文を提出し、博士（健康科学）を取得した。

課題としては、他の研究室が3名で実施していると同様以上の授業数を教員1名で行なっており、分担や協力ができないため負担が大きい。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 健康運動ボランティア演習

1年次

稲垣 敦、福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子

教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に23のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が3つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。また、日本赤十字社の赤十字救急法基礎講習（AEDを含む）を行った。入学前に救急蘇生法を学習した経験をもつ学生もみられたが、改めて、講義と演習を通して、心肺蘇生法を修得することができた。

#### 2) 健康運動

1年次後期

稲垣 敦、濱中 良志、池辺 泰俊（学外講師）

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーション、ニュースポーツ、バドミントン、テニス（濱中）、和太鼓（池辺）を行なった。運動量や運動強度の確保にも配慮した。

#### 3) 健康運動学

2年次後期

稲垣 敦

はじめに科学についての授業を行い、人間固有ともいえる二足歩行について考えた。生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体

力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。これらに加え、運動療法について講義した。また、厚生労働省「健康づくりのための身体活動量基準2013」等に準拠したエネルギー消費量の計算や身体活動量の測定実習も行なった。さらに、ボディメカニクスの講義を行い、重心、バランス、姿勢、重心動揺、骨密度、身体部位別の体脂肪率・筋量の測定実習も行った。

#### 4) 健康運動学演習

2年次後期

稲垣 敦

学生が自分の健康課題を見つけ、目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して毎週実施し、最初と最後に目標に合った計測を実施して効果判定をして考察した。また、運動の継続をサポートするように行動変容理論等の講義を適時入れた。

#### 5) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにし、実験中は全ての学生に対し個別に指導した。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、性別、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。計算方法のわからない学生には、個別に指導した。

#### 4 卒業研究

- ・炭酸泉のストレス低減効果：大分県長湯温泉について
- ・炭酸泉の下腿浮腫の改善効果：大分県長湯温泉について

### 3-7-4 人間関係学研究室

#### 1 教育方針

人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。

具体的な教育目標は以下の通り。1) 人間関係を形成し維持する方法についての体験的理解(「コミュニケーション論」)、2) カウンセリングの基礎となる理論の理解とコミュニケーションスキルの習得(「カウンセリング論」)、3) 人の認知、行動、発達についての基本的知識の習得(「人のこころの仕組み」)、4) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得(「人間関係学」)、5) 対人援助技術の習得(「行動療法論」「カウンセリング論」)、6) 発達心理学の知見をベースとした発達障害の理解(「行動療法と発達心理」)、7) 看護と関わる心理学的知識についての理解(「人間関係学」「行動療法と発達心理」「カウンセリング論」「発達心理学」)。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるようにするため、授業時間内に話し合い活動をベースとした演習を行ったり、学生が話し合う時間を確保したりしている。授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

#### 2 教育活動の現状と課題

教育目的は、人のこころに関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解および体験である。理解が表面的なものにとどまることのないよう、レポートの作成、学習したカウンセリングスキルの実践、ペアワークなど、アクティブラーニングの機会を積極的に取り入れている。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと結びつけている。研究室での教育実践は、継続して大学教育研究フォーラムで発表している。

#### 3 科目の教育活動

##### 1) 人のこころの仕組み

1年次前期

吉村 匠平

外界の対象や自分自身を認識する存在としての人間の機能の特徴、2年次前期「行動療法と発達

心理」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識について、講義時間内で小実験・DVD視聴、ペアによる話し合い活動を行いながら授業を行った。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、教室全体での交流を心掛けた。時間外学習の機会として、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求めた。講義に先立って、評価基準を学生に開示し、各授業終了時点の学習到達状況を個別にフィードバックした。

## 2) コミュニケーション論

### 1 年次前期

関根 剛

コミュニケーションの基本を、情報の受信－理解－発信という視点で、知識・体験・スキルについて講義を進めた。最初に、構成的エンカウンターグループにより、自分自身や他者との関わりを通じながらコミュニケーションの重要性をグループで体験的に理解させた。ついで、受信として行動観察、理解として文化、発信としてプレゼンテーション、手話、について講義し、受信から発信の流れとしてプロセスレコードについて解説をした。また、チーム活動の基本となるリーダーシップとメンバーシップについて解説をした。多くの講義に体験を通じて理解できる要素を設け、単なる知識の獲得ではなく体験的な理解につながるよう企図した。また、講義ごとに短い感想を書かせて返事を返すなど、学生との双方向のやりとりを行った。評価は小レポートと試験によって行った。

## 3) 人間関係学

### 1 年次後期

吉村 匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。その上で、自他を状況論的に理解するための態度としてカウンセリングマインドについて学習する機会を提供した。授業は2クラス編成で進めた。教室の机をコの字型に配列し、学生相互がお互いの発言を対面状況で確認できる環境を構成した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを行った上で全体への発言を求めた。発言ペアだけでなく、授業中のペアワークの態度が優れているペアに対してもクーポンを付与した。その結果、授業時間内の活動が活発になった。授業時間外の学習機会として、ショートレポートの作成に加え、ネコバス上に提示された自由課題への投稿を求めた。

#### 4) カウンセリング論

1 年次後期

関根 剛

看護師として必要なコミュニケーション技術として、カウンセリングの基礎スキルと理論について解説し、ロールプレイを行って実践的なスキルを修得させた。コミュニケーションスキルの解説4回、ロールプレイ3回、カウンセリング理論3回の構成で行った。ロールプレイは、学生食堂において実施した。学生を4人グループに分け、相談する者が人間以外とするなど難易度や練習テーマに沿った相談事例を準備し、それを話し手が聴き手に相談し、2名が観察者となる形式を繰り返し行ない、コミュニケーションスキルの基本を身に付けさせた。カウンセリング理論は、主要な3つの理論として、認知行動療法、精神分析、来談者中心療法、また、患者および理療者自身のPTSDの問題について解説した。評価は試験およびロールプレイのレポートによって行った。

#### 5) 行動療法と発達心理

2 年次前期

関根 剛、吉村 匠平

言語発達、運動発達、アタッチメントの「何故」について、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進める形をとることで、長い時間をかけて進化した結果として現在の人間の姿があることについて考える機会を提供した。講義後半では、広汎性発達障害を中心に、障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて、演習形式を取りながら講義を進めた（発達心理）。1年次の学習心理学の考え方を応用した行動変容技法である行動療法について講義を行った。特に看護師として生活習慣の変容をターゲットとした解説および、自分の行動改善プログラムの作成を行わせ、夏季休暇中に実践・レポートを提出させることで、より具体的に理解を深めさせるよう企図した。評価は試験および行動改善プログラムのレポートによって行なった。

#### 4 卒業研究

- ・災害看護に関する看護文献の年代的变化
- ・看護学生の先延ばしと大学適応感との関係
- ・看護学生の仮想的有能感と隣地実習自己効力感との関係
- ・看護学生の室内環境整備の実態と意識
- ・看護場面のタッチングが第三者に与える看護師の印象

### 3-7-5 環境保健学研究室

#### 1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、各学問が相互に関係して学ぶことの大切さを強調している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。大学院教育では、広域看護学コースの環境保健学特論(必修)、NPコースの放射線・超音波診断演習の支援を中心に、健康科学専攻の院生の研究指導を行っている。

#### 2 教育活動の現状と課題

1年次から2年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。2年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。平成23年度入学生からは、演習方式で環境保健全体に関する課題へのアプローチについて「環境疫学・生物学演習」を実施し、毎回課題のレポートを課して基礎力の向上を狙っている。放射線は最近、国試に出題する傾向が高くなってきていること、社会的にも放射線教育の重要性が強調されるようになってきて、本学の放射線基礎教育の意義が高くなってきている。2016年度からは看護教員を対象とした放射線教育の文科省の事業を受けて講義と実習を行っている。

#### 3 科目の教育活動

##### 1) 環境保健学概論

1年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

環境保健の基本的な考え方や、環境と健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)環境と健康に関する社会問題、2)環境保健の基礎概念(曝露、量反応関係)、3)健康影響の考え方、4)がんの生物学、5)人の発がん、6)安全性試験、7)環境と健康

の関係进行分析する疫学、8)環境保健基準、9)環境リスク論とリスク心理学、10)環境リスクの諸問題とまとめ

## 2) 環境保健学詳論

2年次前期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。

1) オリエンテーション、2) 熱中症対策に塩分はなぜ必要か、3) 化学物質中毒死の中で最も多い原因が一酸化炭素中毒であるのはなぜか、4) 社会的な喫煙対策が進まないのはなぜか、5) PM2.5の健康影響をどう考えればよいか、6) 鳥インフルエンザはなぜ世界が注目して警戒するのか、7) MRI 検査でなぜ金属物を持ち込めないのか、8) ミクロショックでは微量な電流でもなぜ致命的なのか、9) 多くの健康食品の効果はプラシーボ効果で説明できるか、10) 予防ワクチンの集団の効果も期待し、個人の副作用リスクを避けるにはどうするか

## 3) 放射線健康科学

2年次後期前半

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。昨年度に引き続き、県の関係機関からの専門職が受講した。講義内容は次の通りである。1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)身近な放射線・放射線源、5)放射線と物質との相互作用と線量、6)放射線の生体応答—分子レベルから細胞レベルまで、7)放射線の健康影響（組織反応）、8)放射線の健康影響（確率的影響）とリスク評価、9)安全の考え方と放射線防護基準、10)医療における放射線利用と放射線防護

## 4) 環境疫学・生物学演習

3年次後期後半

甲斐 倫明、小嶋 光明

健康と環境（生活習慣を含む）との関係は、疫学的な統計によって明らかになってくる知見と分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見とがある。基礎的事項の演習と

事例を通して、健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みの基礎を論じた。講義内容は次の通りである。1) データのバラツキとヒストグラム、2) 正規分布とポアソン分布、3) オッズ比と相対リスク、5) バイオインフォマティクスとゲノム科学、6) バイオテクノロジー、7) 染色体異常と遺伝子変異、8) 分子疫学

#### 5) 健康科学実験 VI 放射線

恵谷 玲央

自然放射線の存在を確認し放射線は微量であっても測定が可能であることを理解する目的で、放射線測定器を用いたバックグラウンド放射線の測定を行なった。また、ポータブル X 線撮影装置を用いて X 線照射時の病室内の患者周辺の散乱線量の測定を行なった。得られた結果から、外部被ばくに対する防護について、また同室患者や看護職自身の安全・安心のためにとるべき行動について考えさせた。

#### 6) 健康科学実験 VII 測定誤差と変動

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子による変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1) 血圧測定の誤差と変動、2) 体温測定の誤差と変動

#### 7) 健康科学実験 VIII 染色体異常

小嶋 光明

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

### 4 卒業研究

- ・カロリー制限が放射線誘発マウス急性骨髄性白血病の起因となる *Sfpi1* 遺伝子欠失細胞の生成に与える影響
- ・児頭骨盤不均衡を診断するための X 線骨盤計測の時代的変遷に関する文献的研究

- ・喫煙歴情報のないコホート研究がリスク推定に及ぼす影響：シミュレーション研究
- ・小児白血病・脳腫瘍の都道府県別地域差に関する分析
- ・放射線の繰り返し照射が C3H マウスの骨髄細胞における二動原体染色体異常生成に与える低減効果
- ・低線量率  $\gamma$  線長期連続照射した C3H マウスの造血幹細胞における Sfp1 遺伝子欠失の線量率依存性

### 3-7-6 健康情報科学研究室

#### 1 教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践と基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

#### 2 教育活動の現状と課題

学部は平成 27 年度カリキュラムの 2 年目となり、昨年度の自己評価を元に、内容の精選やポイントを絞った教授法を試みている。

だが、演習を除き、健康情報学および生物統計学の再試験受験者、不合格者が多い。卒論時や 3 学年次科目の看護科学研究では情報処理や統計学の重要性を認識しているが、1 年次では、まだこれらの科目を積極的に学ぼうとしている姿勢を作り出せていないことも考えられる。カリキュラム全体の年次配置（順序性）や、これらの領域を学ぶ理由を実感できるよう他研究室と情報交換をして検討を行いたい。

大学院は広域コース、「保健情報学特論」とともに教育内容や方法については軌道に乗ってきたが、比較的多数の履修者に対して、個別の興味・能力にあわせた授業として改善するために、まだまだ検討することは多い。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 健康情報学

1 年次前期

佐伯 圭一郎

保健統計・疫学の領域の内容から、看護師としての基礎的な知識として必要な事項を厳選して教授した。特に、保健統計指標の意味と現状の値、EBNの基盤としての疫学の基礎理論を中心に講義を進め、「健康情報処理演習」の演習事例として保健統計データの収集と分析、疫学データの基本的な解析を組み込んで、理解を深め応用能力の向上を図った。

#### 2) 生物統計学

1 年次後期

野津 昭文、佐伯 圭一郎

看護学研究を遂行する上で必要とされる記述統計学、推測統計学の基礎的知識を身につけることを目標に講義を行った。特に推測統計学では確率論から解説することで、統計手法の原理を理解できるよう配慮した。

#### 3) 健康情報処理演習

1 年次

品川 佳満、野津 昭文、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを学習や保健医療の場における情報管理および利活用のための道具として扱えるように看護職に必要な技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワーク（クラウド）の利用、データ管理、表計算、プレゼンテーション、Web 技術、画像処理、データベースの利用である。また、技術面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラル、個人情報の保護、病院情報システム（オーダリング、電子カルテシステム等）など医療職者として情報を扱う上で重要となる知識について講義形式で教授した。さらに、「健康情報学」、「生物統計学」の理解を深めるために保健統計・疫学・統計データの分析を演習に組み込んだ。各回に関連する内容の練習問題や演習課題をサーバに提示することで、技術や知識の定着も図った。

### 4 卒業研究

- ・乳幼児の睡眠不足の要因と対策に関する文献研究
- ・看護師の勤務形態の違いによる蓄積的疲労への影響に関する文献的検討 — 二交代制勤務と三

交代制勤務による比較 ー

- ・ 貧困家庭の子どもの食事を決定する要因の検討 ー 児童虐待事例の場合ー
- ・ 観察研究における統計解析手法の比較
- ・ 患者の個人情報漏えい事故に関する日米比較

### 3-7-7 言語学研究室

#### 1 教育方針

言語活動の四技能である **Speaking, Listening, Reading, Writing** をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (**Computer Assisted Language Learning**: コンピューターを用いたウェブ学習システム) による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

#### 2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) を練習する。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (**Food, Shopping, Home, その他**)、2年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について3～4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1年次生前期の授業では、CALL 学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL 学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、

総読書語数 100 万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生（1～4年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALL システムによる TOEIC 対策のための英語学習、学習期間前後の TOEIC IP 試験を実施している（前期：1年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALL システムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月17日（日）のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 英語 I-A1

1年次前期

宮内 信治

英語の音声については、発音記号と発声法を確認し、練習させてその定着を図った。講読では、20世紀のエッセイ、文学、哲学を題材にした英語名文集をテキストとして用いた。併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源 CD を活用してスムーズな音読の習得を目指して練習させた。学んだ英文を帳面に書写し、機会講義までに音読暗唱できるようにすることを課題とした。講義後半で、易しい英語で書かれた書籍を自ら選択して読む多読を実施した。英語を通して世界に通じる教養を体得できたと思う。

#### 2) 英語 I-A2

1年次後期

宮内 信治

前期と同じ教科書のうち、未習のテキストを用いて日本語訳を介した文法理解、テキスト音読と書写、課題としての音読暗唱を行った。また、教科書にないテキストとして、シェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使って同様の演習を行った。日本人とはいかなるものか、という

問いに答える英語を通して、いわゆる「国際人」といわれる人に求められる思考の一端に触れさせた。講義後半では、前期と同様、多読活動を行った。

### 3) 英語 I-B 1

1 年次前期

Gerald T. Shirley, Naho Baba

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

### 4) 英語 I-B 2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

### 5) 英語 II-A 1

2 年次前期

宮内 信治

原書 *Word Power Made Easy* を用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格描写、医療職者などを表わす語彙を学び、その派生語についても習得させた。各講義の次週に単語小テストを行い、学習確認と評価に活用した。期間内に、教員が指示した教科書内の原文について音読暗唱の課題を与え、評価した。1 年次に引き続き、多読活動に取り組ませた。

## 6) 英語 II-A2

2年次後期

宮内 信治

前期に引き続き同じ教科書を用いて英語語彙増強学習を行った。医療職者を含む実践者や科学者を表わす語彙とその派生語を学習した。毎週単語小テストを行い、教科書原文を用いた音読暗唱を課題にして、それぞれ評価した。講義後半では多読活動を実施した。

## 7) 英語 II-B1

2年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 8) 英語 II-B2

2年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 9) 英語 III

3年次後期後半

Gerald T. Shirley、宮内 信治

講読担当：英語表記の原著論文の構成を教授、確認したうえで、看護分野の原著論文を読解させ

た。使用する文献をウェブ上にある翻訳ソフトを用いて日本語に翻訳し、その不完全な翻訳文例をまともな日本語に改訂させる演習を行った。講義ごとに使用する文献の専門分野を変え、様々な看護分野の原著論文に触れさせた。また、看護・医療に関連する新しい語彙のリストを事前に配布し、講義のはじめに単語小テストを行って、語彙習得の確認と評価に活用した。

#### 4 卒業研究

- ・日本・アメリカ・オーストラリアの医療通訳の現状分析
- ・TOEIC IP テストの点数の伸びと学習意欲との関係
- ・カナダの地域看護におけるナースプラクティショナーの役割と実践：文献調査
- ・がん患者とその家族に対するナースプラクティショナーの役割：文献調査

### 3-7-8 基礎看護学研究室

#### 1 教育方針

カリキュラム改正にともない、1単位の講義コマ数が15コマから10コマに変更になって2年が経過した。基礎看護学研究室の教育方針として、4年間での看護師という専門職教育を充実させるために、より具体的なイメージや方向づけができるように教材の準備や精選に一層努めた。一方的な講義形式ではなく、できるだけ学生を参加させ、興味・関心を引き出すような教材提示を目指した。具体的には2つの講義と2つの演習、2つの実習の計6科目を関連つけながら、担当科目群を展開した。看護学の導入部分として、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解させる看護学概論、日常生活の援助技術および医療に伴う看護技術の基礎を理解させる(「生活援助論・医療技術論」、看護を学ぶ初学者が実践と理論の融合を理解する(「看護理論入門」、早い時期に学外に出て看護の現場を体験することで、看護の仲間入りを実感できるという期待を込めた(「初期体験実習 Early Exposure」、入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、専門職としての看護師の役割を理解する(「基礎看護学実習」)である。講義を行うにあたっては上記の科目の学習進度にそってさまざまな看護実践と関連づけたり、実際に体験させたりしながら、双方向の教育をめざし、看護の基盤としての理解が進むように配慮している。

#### 2 教育活動の現状と課題

少ない時間数の中での教材の精選と提示も2年目が終了して、軌道に乗ってきた。当研究室の教育方針である講義・演習・実習が有機的に結合されるように具体的な教育目標の実施に当たっては特に配慮をした。専門職である看護師について理解させ、将来の進路に対しても方向づけできるように学

生同士の討議やグループワークも取り入れて教育活動を行った。演習での視聴覚教材の活用や講義、実習前後のレポート指導なども強化して行った。アクティブラーニングに向けたソフト・ハード両面の充実で、学生の学習効率も上がったのではないかと推測できる。課題としては、今後さらに少ない講義や演習時間を補う効果的な指導方法を検討しながら、時間制約の中では不足しがちな自らがやってみる、考えて活動することを補うために、アクティブラーニングの客観的な評価も取り入れていくことが課題である。カリキュラム改正後、次年度3年目を迎える初期体験実習と4年目を迎える基礎看護学実習の成果と課題についても今後、十分に協議し、修正していく必要がある。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 看護学概論

1 年次前期

伊東 朋子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、看護に対する興味関心を高揚させることができるような教材を精選した。講義回数が15回から10回になったことで、減少した分を補うために、前年度以上に課題や自己学習の強化を図った。講義中にもできるだけ、学生の発表回数が増えるように努めた。

#### 2) 看護理論入門

1 年次後期

伊東 朋子

看護活動に必要な看護理論に焦点を当て、看護理論とは何か、看護理論の必要性などについて理解させた。主な理論家について事前学習させて、学習内容を発表させながら、それを中心に展開した。2段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、生活援助論で学んだ具体例などを取り上げ、実際の臨床現場における看護理論の考え方について指導した。また2段階(基礎看護学)実習終了後には、実習で受け持った患者について、看護理論を適応したケースレポートを課題として提出させた。

#### 3) 生活援助論

1 年次前期

伊東 朋子、秦 さと子、石丸 智子、巻野 雄介、麻生 優恵

人体の構造・機能を踏まえて、看護技術の原理原則を学び、対象者にどのように応用していくの

かという点を主軸にして演習を行った。実技を通して、どのようにして対象者の安全、安楽を確保し、自立をめざした個別性のある看護ケアとは何かを振り返られるように指導を行った。また手順を覚えるだけの演習ではなく、原理原則が実感できるように客観的データを測定するなど科学的な視点も導入した。演習の中で、教員がデモンストレーションで技術を提示するが、学生が繰り返し見て、技術習得に向けた練習ができるように e-learning を活用し、課外での自主学習が滞りなくできるよう環境整備やサポート体制を構築した。

#### 4) 医療技術論

##### 2年次前期

秦 さと子、伊東 朋子、巻野 雄介、石丸 智子、麻生 優恵

既習の諸科目で学んだ知識をどのように看護技術に活用していくのかを理解し、身体侵襲を伴う援助技術と医学的検査や治療の際に付随して発生する対象の苦痛や不安をできるだけ軽減しつつ、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法について、自ら考えながら習得できるように演習を行った。特に、人体の機能や構造など看護技術の背景にある法則性や科学性を理解し対象への適応や応用を考える力を育成するように、授業前には毎回スタッフ間で会議を持ち、具体的な授業展開について話し合い、指導方法の共有化や独自に人体モデルや映像を作成するなど教材の工夫を行った。限られた時間内では、可能な範囲の授業目標を設定し、技術習得については e-learnin の活用や課外時間でも希望に応じて指導時間を設けるなど学生個々のペースで学べる環境を整えるように努めた。

#### 5) 初期体験実習

##### 1年次前期後半

伊東 朋子、秦 さと子、河野 優子、巻野 雄介、吉川 加奈子、熊谷 幸江、西部 由里奈、平井 和明、山田 貴子、田中 佳子、石丸 智子、麻生 優恵、稗田 朋子、足立 綾、川村 弘樹、後藤 成人

初期体験実習 **Early Exposure** は早い時期に学外に出て看護の現場を体験することで、看護の仲間入りを実感し、自己の将来像を描くことができるという動機付けが大きなねらいである。約1週間の実習であるが、学生が臨床現場での看護体験によって看護のイメージを具現化させ、学習の動機づけを行うとともに、看護職が活躍する場が広く存在することを知り、キャリアパスを視野に入れた自分の将来像に多様性をもたせることに力点を置いている。外部講師の講話にも、学生の進路希望状況を勘案して、養護教諭による講話も取り入れた。実習中、体調を悪くする学生もなく、実習の目標は達成させることができた。

## 6) 基礎看護学実習

### 1 年次後期後半

藤内 美保、伊東 朋子、石田 佳代子、秦 さと子、河野 優子、巻野 雄介、吉川 加奈子、江藤 由布子、西部 由里奈、山田 貴子、足立 綾、田中 佳子、川村 弘樹、石丸 智子、麻生 優恵、平井 和明、渡辺 康人、熊谷 幸江

既習科目の学習内容と実践が統合できるように実習前・実習後指導を入念に行った。患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけを施設実習のオリエンテーションで実施した。また3つの実習施設(17病棟)での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生の構成メンバーを十分に検討し、実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。冬季という実習時期の問題もあったが、実習中のインフルエンザ罹患や風邪等による欠席はなかった。今年度は11月、12月と連続指導となった担当教員に重なる疲労から体調を崩す者がいたが、大きな支障もなく終了することができた。

## 4 卒業研究

- ・ALS患者遺族のインタビューからみたALS介護者に必要な支援
- ・在宅療養中の筋萎縮性側索硬化症患者における光照射が睡眠に及ぼす影響
- ・高齢者の身体活動量と嚥下反射機能との関連
- ・全国の院内トリアージの取り組みとアンダートリアージの発生率およびその要因
- ・確実な超音波ガイドによる末梢静脈穿刺に向けたプローブ固定装置の開発

## 3-7-9 看護アセスメント学研究室

### 1 教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえて健康障害をもつ患者の看護過程の展開ができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開ができることを目的とし、講義および演習を組み合わせ

て、知識の習得を段階的に行っていく。事例を通して個人およびグループワークでの看護過程の展開できる基礎的能力を養う。2週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、看護過程の展開を行い、専門看護学領域の基盤とする。

## 2 教育活動の現状と課題

看護アセスメント学研究室の担当科目は、1年次、2年次の履修科目が多い。基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを迫及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割があると考えている。平成27年度カリキュラム改正により、毎年、学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目に引き続き、「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もある。ヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点を持ち、エビデンスに基づく判断能力を身につけ、豊かな感性を持ち患者をケアする実践能力を身につけるために、今後も改善を重ねながら取り組んでいく。

## 3 科目の教育活動

### 1) 看護疾病病態論 I

1年次後期前半

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、アクティブラーニングを導入している。講義は、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、感染症、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。アクティブラーニングは、病態探究演習を1コマ設定し、事例を提示し、病態やメカニズムを論理的に考え小グループでディスカッションする試みをした。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。

## 2) 看護疾病病態論 II

### 1 年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、アクティブラーニングを導入している。講義は、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。アクティブラーニングは、病態探究演習を2コマ設定し、事例を提示し、病態やメカニズムを論理的に考え小グループでディスカッションする試みをした。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかりと学ぶ必要性を認識するようである。

## 3) ヘルスアセスメント

### 2 年次前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、連続の時限ではなく間隔を設けて実施し、学内実習前に講義の復習をして臨むようにした。試験は、筆記試験と実技試験を実施した。実技試験は、呼吸器系、循環器系、消化器系、神経系の基本技術が確実に身に着くように事前課題を提示した。また、最終の演習は、「地域高齢者演習」とし、既習の知識・技術を活用し、地域の高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルアセスメントの機会を設けた。高齢者とコミュニケーションをとりながら、聴診器で肺音、心音、腸蠕動音を聴取、関節可動域の測定、瞳孔の観察などをして、正しい技術でフィジカルアセスメントし、正常・異常の判断など効果的に学んだ。

## 4) 看護アセスメント概論

### 2 年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義を行った。今年度の変更点として、講義と同時並行し、看護過程を展開するために作成された大腿骨頸部骨折事例のDVDを視聴させ、映像として対象者をとらえることができるように工夫した。1 学生が一連のプロセスで看護過程の思考が

整理できるよう、身体面、心理面、身体面から必要な情報をピックアップすることから、アセスメント、看護診断、計画および評価の記載までを個人ワークを行った。

学生の記録を確認し、なにができて、なにができていないかを学生に資料としてまとめイードバックし、再度修正させ、個人ワークのレポートを提出させた。必要な学生には、個人面接をして看護過程の学習の理解を強化した。

## 5) 看護アセスメント演習

### 2年次後期前半

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、5名～6名からなるグループで、ディスカッションしながら看護過程を展開させた。看護過程を展開するために作成された白血病、脳梗塞、慢性心不全の事例のDVDを視聴させた。病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を選定した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行っているので、グループメンバーとディスカッションし、視野が広がり、理解が深まることを意図した。中間発表会と全体発表会を3グループに分けて、前半は、前述の3事例のうち同事例でディスカッションする形式とし、後半は異なる事例でのディスカッション形式とした。患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員への発表会に参加を促したり、記録物を配布するなどして、学生のレディネスを把握することで、実習指導の際の参考になるように配慮した。

## 6) 看護アセスメント学実習

### 2年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、伊東 朋子、麻生 優恵、石丸 智子、江藤由布子、河野 優子、川村 弘樹、後藤 成人、秦 さと子、田中 佳子、西部 由里奈、稗田 朋子、平井 和明、巻野 雄介、山田 貴子、吉川 加奈子、渡邊 康人

1名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院8病棟、大分赤十字病院7病棟、大分大学医学部附属病院4病棟の計19病棟に6～7名の学生を配置した。インフルエンザの流行時期を避けるため、従来の2月から12月へ変更したことで、インフルエンザに関するトラブルはなかった。また新しい実習施設として大分大学医学部附属病院の協力が得られ、スタッフ一人一人が実習指導に熱心に関わってくれ、内容の濃い実習ができた。全員が実習目標を到達した。病態の理解やアセスメントでは、さらに努力が必要であるが、実習態度やカンファレンスの参加態度は、評価が高かった。

#### 4 卒業研究

- ・看護師と学生の眼球運動測定器による視覚情報とアセスメントの実態
- ・大分県内の災害拠点病院における災害医療需給均衡(RRR : Risk-Resource-Ratio)の検討 ー南海トラフ地震を想定したシミュレーションー
- ・避難所における災害支援ナースの活動内容と必要な能力 ー熊本地震における経験に基づく面接調査ー
- ・呼吸音・心音におけるシミュレーターを用いた学習効果の検討 ー分散学習の頻度の比較ー
- ・筋萎縮性側索硬化症の患者が経験している困難と心の支え-患者の語りより-

### 3-7-10 成人・老年看護学研究室

#### 1 教育方針

成人・老年看護学は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、担当教員以外に臨床で働く様々な医療職者を学外講師として招き、援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。最終的に、成人・老年看護学実習では、医療機関や高齢者施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学べるように組み立てている。

#### 2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、対象者を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるようにしている。また、成人・老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と同様の課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 成人看護学概論

2年次前期

小野 美喜、森 加苗愛

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。特に中範囲理論を学習し、成人の理解と看護アプローチの学びを深めた。また、地域包括ケアに向けた政策的な動きを踏まえ生活習慣病予防への対応に成人看護学の強化が望まれることを教授した。

#### 2) 老年看護学概論

2年次前期

小野 美喜

老年看護学概論では、老年期の発達課題や加齢による身体的変化、心理社会的変化を教授した。特に加齢により ADL に支障をきたす高齢者にどのように尊厳を保ちながら援助にあたるか、学生自身が考えられるように思考する時間を設けた。高齢者のフィジカルアセスメントと生活援助が状況に応じてできるように基本的な知識と考え方を教授した。

#### 3) 成人看護援助論

2年次前期

森 加苗愛、堀 裕子、宿利 優子

がん看護、生活習慣病を持つ患者の看護、周手術期における患者の看護を主軸として、循環器、呼吸器、内分泌、泌尿器、消化器、脳神経、女性生殖器系の患者の看護援助が根拠を持って実践できるように、授業計画を立て講義を行った。試験では平均点が低く、再試験者が多数を占めた。試験範囲が広すぎた事も再試験者が多くなった要因だと考える。また、アクティブ・ラーニングの推進ということで、学内実習では、グループワーク・ロールプレイが行えた。今後は、各講義においても、まずペアで考えて意見を述べる場面を作る授業内容に変更していく必要がある。

#### 4) 老年看護援助論

2年次後期

森 加苗愛、甲斐 博美、宿利 優子、西部 由里奈

高齢者の身体、心理、社会的特性を踏まえた上で、主に高齢者の感覚器障害、栄養・ADL低下、認知症を発症した高齢者およびその看護援助について系統的に根拠に基づいて学べるように授業を計画し講義した。

出席日数が不足し、試験の受験資格を得るために、補足の課題が必要であった学生もいた。出席に関しては十分なオリエンテーションや、開講時期が冬季であることから学生の体調管理への注意喚起も必要と考える。今後は、講義形式において高齢者の理解を深めるための、体験学習やグループ学習など更なる検討が必要である。

#### 5) 成人・老年看護学演習

3年次前期

小野 美喜、森 加苗愛、甲斐 博美、堀 裕子、宿利 優子、西部 由里奈、川村 弘樹、後藤 朋子

学生の臨床実践能力の向上を図るため、成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした演習を行った。成人期、老年期の特徴を踏まえ、臨床の場で様々な健康問題を持つ、急性期、慢性期、終末期の対象者に必要な援助を計画し、看護過程の展開の中で援助技術を練習できるように演習を行った。成人看護学演習では、胃がん周手術期のペーパーペイシャントを用いて看護過程を展開した。術直後の患者観察や術前に立案したケア評価と修正が自らできるように指導した老年看護学演習では、高齢の認知症に焦点をあててグループによるロールプレイなどを通し学生間の学びの共有を図った。

#### 6) 成人看護学急性期看護実習

3年次後期前半

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、宿利 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、麻生 優恵、山田 貴子、川村 弘樹

成人看護急性期実習は、急性期・回復期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために総合病院で実習を行った。大分日赤病院、大分県立病院、大分市医師会立アルメイダ病院にて学生数は実習期間6週間の実習で86名であった。目標到達できず欠席日数により実習指定規則の時間数を満たさなかった1名が単位取れず、85名が合格となった。

昨年同様に教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指し定着しつつある。

## 7) 成人・老年看護学慢性期実習

### 3年次後期前半

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、宿利 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、麻生 優恵、山田 貴子、川村 弘樹

成人・老年看護学慢性期実習は、慢性期や終末期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために総合病院で実習を行った。大分日赤病院、大分県立病院、大分市医師会立アルメイダ病院にて学生数は実習期間6週間の実習で86名であった。目標到達できず欠席日数により実習指定規則の時間数を満たさなかった1名が単位取れず、85名が合格となった。昨年同様に教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指し定着しつつある。

## 8) 老年看護学実習

### 3年次前期前半

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、宿利 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、後藤 成人、麻生 優恵、山田 貴子、川村 弘樹

施設に入所している高齢者および通所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設6施設、介護老人福祉施設6施設の合計12施設において1週間の実習を行った。

先に導入されている予防的家庭訪問で要支援の健康状態の高齢者と接していることがレディネスとしてあり、本実習では、介護度の高い高齢者の看護や多職種連携を基盤としたケアを学ぶことが主体であった。これまで実習最終日には学内でグループカンファレンスを行い、各施設での実践や学びを学生で共有する機会を設けていた。しかし、学生の学習効果のため1週間の実習のうち中間に帰学日を設けることに変更したが、最終的に総括する場がないことが課題として残った。

## 4 卒業研究

- ・死にゆく人の年齢に着目した成人遺族へのグリーフケアのあり方
- ・大分県における糖尿病看護認定看護師が行う災害に備えた糖尿病療養指導に関する研究
- ・訪問看護ステーションに勤務する診療看護師(NP)のチーム医療における実践—肺炎を疑った利用者の症例分析を通じて—
- ・胃瘻造設に関するA大学看護学生の認識調査
- ・緩和ケア病棟における診療看護師NPの実践
  - 同病棟に勤務する看護師の客観的評価を含めて—
- ・老年看護学実習で対象者理解を育むための重要な体験

### 3-7-11 小児看護学研究室

#### 1 教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

#### 2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

#### 3 科目の教育活動

##### 1) 小児看護学概論

2年次前期前半

高野 政子、草野 淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。

具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)子ども観の変遷と子どもの権利、3)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、4)小児の成長と発達総論、5)小児の形態・機能的発達、6)心理的・社会的・言語的発達である。最終回は、子ども観を発表形

式で、小児看護の動機づけとした。

## 2) 小児看護援助論

3年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健を講義し、援助技術の演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。一方、看護過程は、グループワークで紙上事例で看護過程を展開し、2グループずつ発表しディベートを行った。

## 3) 小児看護学演習

3年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

演習は2つの課題を実施した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を5事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。2つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。

小児看護技術の演習は、教員4名で、1)高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術小テスト、2)静脈点滴の固定、3)子どもの計測などを実施した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。学生と臨床看護師との相互関係が構築されるようにした。

#### 4) 小児看護学実習

3年次後期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾、平井 和明

小児看護学実習は、大分県立病院に1グループ学生8～9人で6グループ(合計56人)、別府発達医療センターに学生4～5人で6グループ(合計29人)配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生1人に対象児1人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、実習期間中に2人の受け持ちする可能性を避けた。1人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもの受け持つことで看護実践まで到達した学生も少なくない。

3日間の保育所実習は、7月末から8月第1週までに実施した。子どもの成長・発達の理解することができた。また、子どもとのコミュニケーションなどを実践することにより、9月からの病児と家族への関わりがスムーズになるため、健康な子どもの保育所実習は必要である。実習の時期は7月から8月に行うことで冬の感染の予防の視点からもよいと考える。間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を行い、学生個別の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

#### 4 卒業研究

- ・特別支援学校に勤務する看護師の医療的ケア技術の自己評価と研修ニーズ
- ・小学校に通う慢性疾患患児と発達障害児に関わる養護教諭の活動に関する文献検討
- ・在宅療養児者と家族に対する訪問看護師が行う医療的ケアの支援の現状
- ・在宅重症児を育てる父親のエンパワメントにおける役割と認識に関する文献検討

#### 3-7-12 母性看護学研究室

##### 1 教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護学援助論(母性看護学援助論Ⅰ、母性看護学援助論Ⅱ:平成27年度カリキュラム)、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をお

いて実習を展開している。

## 2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学の講義時間は1単位10コマと減少したので講義内容を厳選している。看護学実習においては、受け持ち患者の症例は正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や入院中の妊婦も受け持ち対象者としている。実習施設は3カ所で1施設の学生数が4～5名で指導し充実した実習となっている。平成27年度からは臨地実習時間を15時までに変更して学生の記録整理の時間を確保した。実習期間中の分娩数は施設によって異なるため、分娩件数の少ない施設での実習の工夫が課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 母性看護学概論

2年次前期

林 猪都子、梅野 貴恵

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性看護とは、セクシュアリティ、リプロダクティブヘルス／ライツ、母性看護の変遷、母子保健統計の動向、母性看護に関する法律、母性看護の対象理解、ライフサイクル各期の健康と看護、リプロダクティブヘルスケアなどについて教授した。リプロダクティブヘルスケアはグループワークを取り入れて、自主学習を進め、学んだ学習の中から課題を抽出し発表した。今年度は発表時学生間での質問を必ず実施したら活発なディスカッションとなった。

### 2) 母性看護援助論Ⅰ

2年次後期前半

林 猪都子

妊娠期の母子の生理的変化とその家族への看護について学ぶことをねらいとした。講義内容は妊娠の生理・経過、妊婦の健康診査、母体と胎児の管理、妊婦への看護、妊娠の異常と看護である。妊娠期の異常と看護はTBLの学習法を取り入れて、学生が自ら学習に取り組むようにした。

### 3) 母性看護学演習

3年次前期

林 猪都子、江藤 由布子、熊谷 幸江、樋口 幸

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義は、母性看護技術演習とウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の展開である。看護技術演習は、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常2事例、異常3事例をグループワークでまとめ、発表し学習内容の共有を図り、さらに、グループワークで担当しなかった事例について個別で看護過程を展開した。今年度は看護過程の講義を丁寧に行い、学生は2事例看護過程を展開したので、母性看護学実習での事例展開につなげることができていた。

### 4) 母性看護学実習

3年次後期

林 猪都子、江藤 由布子、熊谷 幸江、安部 真紀、稗田 朋子、姫野 綾

母性看護学実習施設は3施設であり、実習期間は1グループ2週間（延べ12週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生5名配置（合計30名）、大分県立病院は学生5名配置（男子学生3名）（合計30名）、アルメイダ病院は学生4～5名配置（男子学生4名）（合計25名）、担当教員は各施設1名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように指導した。1週間に1回帰学日を設けて、帰学日は記録のまとめや看護技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。

## 4 卒業研究

- ・女子学生のやせ願望と食行動に関する文献研究
- ・高校生男女の月経や月経教育に関する意識の相違
- ・A市の産科医療機関における産後ケアの実態
- ・月経随伴症状の経日的変化と身体活動量

### 3-7-13 助産学研究室

#### 1 教育方針

大学院助産学コースは、助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術やプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性の性と生殖に関わる健康問題に対応できる能力を修得し、他職種との連携や協働、社会資源の活用を図ることができる助産師を育成することを目的としている。特に、高度な周産期母子医療、ハイリスク妊産褥婦への助産診断能力及び助産技術を身につけさせるために、体験型の演習や技術試験を取り入れている。また、臨地実習における多重課題へのアセスメント力・実践力を強化するために、妊娠・分娩・産褥・新生児期の特論科目にも事例を用いたシミュレーション教育を実施している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、個別面談や2学年を交えた発表の機会を設けている。

#### 2 教育活動の現状と課題

大学院助産学コースは、昼間に助産学専門科目、夜間に共通科目を履修することになっている。1年次の前期・前半は、昼間も夜間も講義・演習があり課題レポートが重なるなど、体力的にモチベーションを維持することが困難な場面もみられたが、工夫して学修している。後期は、実習場での学びを学内で振り返り、対象に応じた助産ケアを教員の指導を受けながら思考する努力をしている。昨年度から取り入れた段階的 OSCE により、臨地での多重課題に混乱する場面はみられず助産過程を展開できた。2年次生は、5月から7月にハイリスク妊産婦ケア実習と分娩介助実習を履修している。今年度の学生の分娩介助例数は、平均 11 例であった。4週目に帰学週を設け休養をとり、前半の実習の振り返りを行うことができたため、助産過程の展開は無理なく終了することができた。9月以降は、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、助産師としてのアイデンティティの基礎を形成することができた。課題研究は調査票配布が 10 月に入った学生もいたが、データの解析、論文作成を指導により実施し、期日までに全員提出し 3 月 6 日に報告した。10 月の関連学会で発表する予定である。今後は、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながらカリキュラム全体を見直していく。

#### 3 卒業研究

- ・女子学生の月経随伴症状と月経の知識・意識や日常生活との関連
- ・母親の胎児に対する愛着の要因に関する文献的研究—日本とヨーロッパを比較して—
- ・父親の育児行動による子どもの発達への影響に関する文献的研究
- ・早産・低出生体重児の清拭方法に関する研究—皮膚バリア機能と皮膚常在細菌数に焦点をあてて—

### 3-7-14 精神看護学研究室

#### 1 教育方針

学部教育では、1)精神科領域での看護だけでなく他のさまざまな場で心に焦点を当てた看護を行うこと、2)看護の対象者の症状や疾病だけでなく、社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を宛てた看護を行うこと、3)対象者だけでなく看護者自身の心や治療的人間関係に目を向けること、および4)医療のみならず保健・福祉サービスとの連携を意識することを強調している。講義・演習・実習は、上記の目標に必要な視点、知識、技術、態度を獲得するための、一連の流れとして構成している。また卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

#### 2 教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などについて、具体的な事例や視聴覚教材を紹介しながら学生にイメージを把握させるよう努めている。演習は、紙上事例演習、グループワーク、体験的学習、実習施設や家族会・NPOのスタッフによる活動紹介などで構成し、続く実習への準備性を高めることを狙っている。

実習では、病棟実習を行う病院を新たに二つ追加して、計三病院で病棟実習を行った。これにより、4つの福祉サービス事業所での実習を3日以内に短縮し、病棟実習の日数を増やして、日数のバランスを取ることができるようになった。新しい実習病院の状況と、実習運営や学生指導とのすり合わせ作業を続けることも必要である。

卒業研究に関しては、学生の希望と計画の実現性をすり合わせながら進めることができしており、学生の満足度は高い。

#### 3 科目の教育活動

##### 1) 精神看護学概論

2年次後期

影山 隆之

本年度からコマ数を圧縮し、精神健康の概念、精神疾患と病態、及び治療の構造と方法、精神医療の歴史と法制を中心に濃密な講義を展開し、必須知識のサマリーを印刷資料として配布した。出席確認を兼ねた授業中の小レポートに加え、無記名で提出できる感想・質問カードを用いたが、質問カードの利用は少なかった。教材を精選し、小レポートや質問カードに書き込む時間を確保することが課題である。

## 2) 精神看護援助論

3年次前期前半

杉本 圭以子

学生にとってイメージしにくい精神看護の目標と役割を考えることを科目を通して心がけ、視聴覚教材、事例を多用し講義した。精神科看護における安全管理、権利擁護をはじめ、アセスメント、各精神疾患に対する看護、地域での生活を支える援助を中心に学んだ。

毎時、学生に授業の振り返りシートの記入を求め、内容をまとめたものを次回の授業開始に次に配布し全員で読み返し感想を述べることで前回の振り返りとお互いの意見から学びあうことができた。また、援助技法として SST (Social Skills Training:社会生活技能訓練)、呼吸法、ハンドマッサージなどを演習した。その後実習において見学・実施した学生が多く、本講義で学んだことと比較して学びを深めることができた。

## 3) 精神看護学演習

3年次前期後半

影山 隆之、杉本 圭以子、後藤 成人

演習の第1回目において実習と演習の結びつきについて説明した。主な演習内容として、紙上事例について精神科領域における看護過程の展開を行い、事例を通じた疾患や治療・看護ケアの理解を促した。また、自己理解、対象者理解、関係性の理解を深める方法を学ぶことを目的に、プロセスレコードを用いた自己一致に関する演習を行った。

また、障がい者社会福祉サービス事業所で実習を行うことも考慮し、関連施設スタッフや家族会メンバーによる特別講義を行った。学生の提出物から判断して、学生の興味・関心・疑問などを高めることができたものと推察される。

## 4) 精神看護学実習

3年次後期前半

影山 隆之、杉本 圭以子、後藤 成人、佐藤 弥生、吉川 可奈子

実習期間のうち2～3日は4つの福祉サービス事業所に学生が分散して実習を行い、残りの期間は大分丘の上病院、大分下郡病院（実習前半のみ）、衛藤病院（実習後半のみ）に分かれて病棟実習を行った。病棟実習では学生がそれぞれ一人の患者を受け持ち、全人的な理解とアセスメントおよび患者に行われている看護の理解に向けて指導を受けた。プロセスレコードやカンファレンス等を通じて対人関係における自己の特徴について実際的に学んだ。プロセスレコードに取り組む時間の確保と、病院毎のカンファレンスの持ち方が、次年度への課題である。障がい者社会福祉サービス事業所では、利用者に混じって各種のプログラムに参加し、精神障がい者が社会で生活で

きるための条件、そのために必要な援助、リハビリテーションのニーズを把握するためのアセスメントなどの実際を見て学んだ。さらに、実習最終日を帰学日とし、二つの場での学びを統合するための最終カンファレンスを行った。実習全体を通して、消極的な学生が従来より少なくなったが、対象者との関わりに難しさを抱える学生も一部に見られた。また、最終カンファレンスで学生同士が異なる体験を活発に情報交換できたグループと、表面的に終わりがちなグループが見られたので、カンファレンスの持ち方について適切な指導が必要である。

#### 4 卒業研究

- ・在宅高齢者の首尾一貫感覚と家族構成およびソーシャルサポートとの関連
- ・在宅高齢者の首尾一貫感覚と抑うつ症状および物忘れの自覚との関連
- ・子ども虐待に対する救急外来看護師の困難感と必要な支援
- ・メンタルケアが必要な中学・高校生への養護教諭の対応

### 3-7-15 保健管理学研究室

#### 1 教育方針

学生が地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得できるように教育を行った。また、学生が自律した学習態度を身につけるため、主体的に取り組める教育方法を積極的に取り入れた。保健管理学研究室の教育全般として、4年間の看護師教育に相応しい講義、演習、実習の内容を検討のうえ該当科目において学生が深く学べる教育を重視した。保健福祉の社会システムをはじめ、在宅におけるケアマネジメントや看護管理のマネジメント等、地域社会で生活する人々の多様な健康ニーズにあわせた看護を提供できるよう科目ごとに教育を行った。特に、地域包括ケアシステムやケアマネジメントについては、在宅看護を強化するため、社会資源の活用や他職種との連携・共同など、幅広くマネジメント能力を育成する教育を進めた。

#### 2 教育活動の現状と課題

講義は最新の知識や情報を提供し、多様な人々の健康ニーズと社会の要請に対応できるよう教内容や方法を検討した。3年次生の在宅看護論では、1年次、2年次で学習した内容から、学生が在宅で療養する対象について具体的なイメージができるよう、実習で経験した事例をもとに計画を考え、演習を取り入れるなど学生が主体的に取り組める教育を行った。また、3年次生が4年次生の実習を見据えて、地域の資源を活用したマネジメントができるよう、講義・演習内容を工夫した。学生がこれまで学んだ内容を応用し、自ら考えて看護を提供できるよう、さらなる学習方法の工夫が必要であ

る。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 健康論

1 年次前期

福田 広美、平野 互

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本 21 などの取り組みを交えながら講義を行った。

#### 2) 社会保障システム論

2 年次後期

平野 互

社会資源に関する理解は看護職に不可欠であり、社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。講義時間数の制約もあり、今後の講義の展開に備えて、社会保障の全体像が把握できるよう講義を構築し、特に他の講義で触れることの少ない福祉を中心に、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるように講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで医療・保健システム、福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者といった対象者ごとの保健・福祉政策について講義した。

出席した学生の学習態度は良好で、講義中の反応も良好と思われたが、過去と出題内容を変更したためか、期末試験成績が例年に比べて悪く、学生の理解の促進に課題を残した。

#### 3) 健康支援論

3 年次後期後半

福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子、赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、渡邊 康人

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について

て、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。講義にあたっては、地域看護学研究室の教員と分担をして講義を行い、必要に応じて演習も盛り込んだ。後半には健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークによる作業を行った。発表は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるといった点について、グループワークの過程で学習できていた。また、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていたと考える。

#### 4) 予防的家庭訪問実習

1年次

全学教員

1年次の実習目標に沿って、予防的家庭訪問の対象者とコミュニケーションをとり、他の学年とも協力しながら対象者の理解を深めることができていた。

#### 4 卒業研究

- ・健診・相談から始まる発達障がい児の地域支援～保健師の役割に関する実態調査～
- ・退院調整看護師がエンドオブライフ期の患者に行う意思決定支援の検討—患者が希望する退院を阻害するずれに着目して—
- ・訪問看護を利用する軽度認知症高齢者の服薬に対する思いと日常の服薬行動
- ・全国二次医療圏における在宅の見取りと医療介護サービスとの関連

### 3-7-16 地域看護学研究室

#### 1 教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動を行うために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、家族看護学概論、地域看護学実習を展開している。特に地域看護学概論では、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と実習の連動性を考慮して、内容や展開方法に工夫を凝

らしている。

## 2 教育活動の現状と課題

地域看護学概論の講義では、実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師および多職種の連携の必要性が理解できるよう教授している。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開ができるように、学内演習では実習場所を意識した事例を用いて、ロールプレイ等を行っている。地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行っている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児の事例を基に、保健師が行う家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解できるよう工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

## 3 科目の教育活動

### 1) 地域看護学概論

2年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、佐藤 愛、藤内 修二、峰松 恵理、大鶴 真由美、佐藤 綾美、村嶋 幸代

地域における個人・家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的な内容について講義をした。公衆衛生の概要や地域看護学の概要、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など地域看護の必要性を理解するために時間を十分にかけた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が地域で活動する看護職をイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

### 2) 家族看護学概論

2年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、稗田 朋子、渡辺 康人

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。内容は、家族看護学の概念、家族の機能、家族を理解するための諸理論、看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の

演習である。特に家族看護過程の演習では、家族システム理論に基づいて家族を一つのユニットとして捉えて支援することを目指し、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、より具体的に看護過程の展開が学習できるよう工夫した。

### 3) 地域看護学実習

4 年次前期前半

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、佐藤 愛、福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子、桑野 紀子、稗田 朋子

大分県下全域の保健所（保健部支所含む）10 か所、市町村保健センター及び支所 16 か所、支所配置 3 か所合計 29 か所の施設に、それぞれ 2～4 名の学生を配置し 2 週間の実習を行った。実習指導体制では、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、中間カンファレンスや終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。実習では、地域で生活する人々を理解すること、多職種との連携の必要性について学んだ。実習終了後、まとめ会を開催し、実習成果を学生間で共有した。

## 4 卒業研究

- ・都道府県別に見た健康寿命と大分県版お達者年齢の比較分析
- ・A団地に暮らす高齢者が高齢者サロン等の集まりに参加しない理由
- ・1歳6か月児をもつ母親の不安に関連する要因
- ・中山間地に暮らす高齢者の在宅生活継続の意向と実現可能性への認識に関連する要因

### 3-7-17 国際看護学研究室

#### 1 教育方針

Our department's program is designed for students to obtain knowledge to provide sensitive, competent and responsible care to people in different and similar community and countries in the world as well as acquisition of skills and attitudes for international nurse who can provide culturally sensitive caring to promote health and well-being. This program is designed for students to enhance capability to apply international nursing concepts and knowledge, and principles of transcultural nursing to health care setting. In addition, this program is designed for students to develop global leadership potentials and strong basis of professional identity in

the global era. Further, this program is created for students to learn autonomous attitude toward their study and to cultivate vision for global nursing.

## 2 教育活動の現状と課題

Class are conducted in English and Japanese.

Through lecture, we provided students with current knowledge of global nursing to expand their knowledge regarding culturally competent care which can meet the need of people living in different and similar community and countries through lecture. Students had opportunities to engage in indirect international nursing experiences through special lectures on real experience associated with Red Cross activities, JICA activities, WHO Kobe activities, and NGO activities as well as actual situation of foreign patient care in Japan. We arranged either group discussion or watching DVD relevant to the content of lecture following each session.

Students had chance to collaborate not only decision of their topic but also presentation through group work. Students are required to present their group work and to ask questions and comment in English.

Course evaluation was conducted to assess whether objective of the course is achieved and to improve teaching by both students and faculties.

It is expected for every student to participate actively in this class. This course will provide students with opportunities to apply global nursing knowledge to people living in different and similar community and countries in the world.

## 3 科目の教育活動

### 1) 国際看護学概論

2年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

This course is an introduction to understanding the concept of international nursing and health, the global perspectives on health, and the global cooperation of nursing and health. The objectives of this course are; to develop an understanding of nature and characteristics of international nursing, to enhance knowledge regarding implication and strategies for international nursing, to promote an understanding of risks to health and life in the world, and to facilitate acquisition of knowledge related to international organization.

We have revised and updated lecture contents as well as statistical data. We have invited

lecturer from WHO Kobe center to provide students current knowledge on global health problems and strategies to manage the problems. Students have participated in workshop operated by Oita JICA staff. Through workshop, they have discussed how to approach and solve the problems related to health of peoples in developing countries, and they have shared the results from workshop.

## 2) 国際看護比較論

3年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

This course is designed to promote understanding the new roles and responsibilities of nursing in diverse eco-geological, socioeconomic, cultural and political contexts, and to gain insights for cultural competency of transcultural nursing. The objectives of this course are; to enhance knowledge regarding MDGs, and health problems of each population group, to promote an understanding of culture and transcultural nursing, to facilitate acquisition of knowledge associated with human resources for global health care, to expand knowledge related to global strategies for health for all, and to gain insights into international relief activities and foreign patient care in Japan.

We have provided the recent global health issues using updated WHO statistical data. We have additionally provided global mental health problems as one of global health issues. We have invited nurses who have experiences on international nursing practices or activities from JICA, Red Cross, and Rinku hospital.

## 3) 国際看護学演習

3年次後期後半

Myoung-Ae Choe, N. Kuwano

The aim of this course is the development of perspectives on national, regional and global health issues and strategies, the realization of the roles and responsibilities of nursing in the development of the strategic planning on nursing/health, and the development of global leadership potentials.

In this course, students were divided into 11 groups, and each group decided their theme and topic according to the following theme such as health issues and strategies of a nation/population group, impact and context of the aid of JICA, impact and context of the aid of NGO, human resources for health / nursing of a nation.

Students have searched information and data related to their topic and have made contents

for presentation through discussion. We have given feedback on both progress and results of discussion as well as contents for presentation.

#### 4 卒業研究

- ・日本における在留外国人女性とその家族の健康に関する問題および健康維持行動  
Problems related to health and coping behavior for health of immigrant women and their family in Japan
- ・臓器提供と臓器移植に関する看護学生の知識と態度 ー日本と韓国を比較してー  
Comparison of knowledge and attitudes on organ donation and organ transplantation between Japanese and Korean nursing students
- ・地雷被害者の抱える問題と治療・サポートに関する文献研究  
Literature review on the landmine injured related to their problems, treatments and supports

### 3-7-18 共通科目

#### 1) 自然科学の基礎

##### 1 年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、吉田 成一、佐伯 圭一郎、野津 昭文、恵谷 玲央  
自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方を学ぶための内容を盛り込んだ。講義内容は次の通りである。1) 生物:細胞とは:生命の機能単位、2) 生物:DNA 構造・複製、3) 生物:細胞分裂の仕組み、4) 生物:遺伝の仕組み、5) 生物:遺伝子から表現型へ、6) 生物:タンパク質の働き、7) 生物:免疫~遺伝子と生体防御システム、8) 生物:発生、9) 生物:エネルギー・酵素・代謝、10) 生物:化学エネルギーを獲得する経路、11) 生物:分子生物学・ゲノム、12) 物理:電気と磁気、13) 物理:力とエネルギー、14) 物理:圧力・温度・相変化、15) 化学:物質の構造、16) 化学:物質の反応、17) 化学:モルと濃度計算、18) 化学:有機化合物の構造、19) 数学:数学の基礎1、20) 数学:数学の基礎2

## 2) 大学ナビ講座

### 1 年次前期前半

藤内 美保、村嶋 幸代、甲斐 倫明、影山 隆之、吉村 匠平、安部 眞佐子、関根 剛、野津 昭文、南保 昌孝（労働局局長）、石本 田鶴子（認定コミュニケーショントレーナー）

平成 27 年度カリキュラムから導入された新規科目である。リテラシーと呼ばれる大学で身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的としている。1 年次生で早期に開講することで、大学での学びをスムーズに導入できることもねらいとしている。

内容は、「大学で学ぶということ」「アルバイトリテラシー」「メモ・ノートの取り方」「大学カリキュラムの方針・考え方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「伝える技術 1：文を書く、レポートを書く」「伝える技術 2：話す、プレゼンする」「伝える技術 3：質問する、議論する」「メディアリテラシー：新聞・報道、インターネット活用」の 10 回で構成した。

早めに知りたい内容が多かったという昨年度の学生の意見を反映し、今年度は 4 月と 5 月に集中して実施した。また出席カードにより、参加状況を把握した。

## 3) 健康科学実験

### 2 年次後期

濱中 良志、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央、稲垣 敦

本健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 11 テーマからなる実験を行った。1) 解剖実習（担当者：濱中 良志、岩崎 香子、安部 眞佐子）、2) 組織学実習（担当者：濱中 良志）、3) 血液検査（担当者：定金 香里）、4) 基礎微生物学実習（担当者：吉田 成一）、5) ラットの解剖（担当者：市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里）、6) 測定誤差と変動（担当者：甲斐 倫明）、7) 放射線（担当：恵谷 玲央）、8) 染色体異常（担当者：小嶋 光明）、9) 呼吸循環器系持久力（担当者：稲垣 敦）、10) 心電図（担当者：岩崎 香子）、11) 食物栄養学実習（担当者：安部 眞佐子）

## 4) 総合人間学

### 4 年次後期前半

藤内 美保

さまざまな分野で活動され、かつ造詣の深い講師のものの視方、考え方に触れ、にんげんとして、また医療者として備えておくべき豊かな知識や感性を養うことをねらいとしている。9 月～10 月までの毎週金曜日に計 8 回を実施した。本科目は、公開講義とし、県内に広く情報を発信し参

加を促している。

- 第1回 「医療と報道」 中村 道子（朝日新聞岡山総局記者）
- 第2回 「ライフデザイン」  
佐藤 剛史（九州大学大学院農学研究員助教）
- 第3回 「生活週間と健康 ―アルコール感受性遺伝子との関係―」  
竹下 達也（和歌山県立医科大学教授）
- 第4回 「子どもの貧困対策」  
伊東 雅人（大分県子ども家庭・支援課課長）
- 第5回 「山間地での高齢者との暮らしぶりを世界へ発信する」  
林 浩昭（農林業・国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会会長）
- 第6回 「医療と仏教の協力について」  
田畑 正久（龍谷大学教授、佐藤第2病院院長）
- 第7回 「災害は忘れる暇なくやってくる ―熊本・大分地震と大雨―」  
花宮 廣務（気象予報士・防災アドバイザー）
- 第8回 「高齢者緩和ケア」  
キャロル・ロング（エンドオブライフケア看護教育協議会指導者）

## 5) 予防的家庭訪問実習

1～4年次

全教員

高齢者への継続的な家庭訪問を通して学生が、1) 地域に住む高齢者の健康や生活を学び、高齢者が自立して自宅で暮らし続けるための機能低下予防策を共に考えて実践するとともに、2) この支援を通して地域資源や生活について考え、学年を超えた支え合いの大切さを学ぶ、という理念の下に、全学部生 327 名が1～4年次生1名ずつで 80 チームを構成し、それぞれ 75 歳以上の在宅高齢者 1 名を定期的かつ継続的に家庭訪問した。全学的に本格実施して二年目となるので、学生要項をさらに整備し、学年別の目的・目標をいっそう明確化し、訪問時の交通の支援や記録物の様式・提出方法などを修正して実習を実施した。なお、平成 23 年カリキュラムで履修する学生においては、本科目は老年看護学実習（3年次）および第3段階看護技術演習（4年次）の一部として実施した。

このアウトリーチにより、学生が高齢者の健康問題またはそのリスクを早期に把握し、予防的な支援を行ったり、必要な場合には当該高齢者の了解を得て市保健師や地域包括支援センター等につないだりして、課題の早期解決を図った。また、地域の健康課題については、大学で集約して市や自治会につなぎ、対応を検討したり、公民館等での健康教室に反映したりする活動を行った。学年縦割りのチーム構成なので、上級生はリーダーシップの必要性を自覚し、下級生は上級生をロールモデルにする等の相互作用が生まれ、良い効果を挙げていることがレポート分析からうかがえ

た。

次年度の課題を明確化するため、看護研究交流センタースタッフ等が協力者に年度末訪問を行うとともに、学生の記録物等を分析した。これから抽出された課題を学内で共有して次年度に生かすため、学内検討会（2月28日）を開催した。

### 3-7-19 統合科目

#### 1) 保健ボランティア

2年次前期後半

藤内 美保

10名の学生が単位取得した。保健医療に関するボランティアを体験し、体験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。

学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探し、参加手続きをとり、体験し、参加レポートを記載するなど、自主性や行動力の向上につながっている。

熊本地震のボランティア活動、リレーフォーライフ、小児糖尿病キャンプ、障害のある子どもたちの遊びを通じた社会活動の場の提供、ALS患者会、久住コロニーのボランティア活動、なかには関東地域のナースステーションで訪問看護師・介護者と同行し食事を作るなど、県内外を問わず、様々な場やテーマで幅広く活動していた。

#### 2) 看護管理学概論Ⅰ

2年次後期

福田 広美、平野 互

看護管理の概念および看護管理を取り巻く社会背景を理解し、看護職として看護のマネジメントについて主体的に学ぶことをねらいとした。2年次が、医療政策における看護管理について理解を深め、社会の変化を予測しながら対応できる組織的な看護の必要性を理解し、看護の対象となる人々に効率的かつ質の高い看護を提供するための看護管理に関する基礎的な知識を学ぶことができるよう講義を行った。

#### 3) 看護の倫理

2年次後期

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理規範や社会規範に基づく判断のた

めの思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「生と死のかたちに関わる倫理」・「意思決定の倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」の9回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。

講義の中で、「ケースブック医療倫理」(医学書院)をテキストに事例演習を行った。また講義時間にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、時間的制約と必修科目ゆえに少人数での討論が形成できないことに加え、学生に予習の習慣がないために、事例演習が双方向的な討論の場になりにくいことがあげられる。また学生の授業評価の結果では、倫理という科目への関心が必ずしも高くないことも今後の課題となると思われる。

#### 4) 看護と遺伝

##### 3年次後期後半

岩崎 香子、定金 香里、松田 貴雄、濱口 和之、井原 健二、川野 由紀枝

一年次に学習したメンデル遺伝の仕組みを復習し、遺伝子変異、変異修復機構や体質とのかかわりなど、表現型の多様性を加味した遺伝学の基礎を講義した。これらを踏まえた上で成人、小児領域の臨床で遭遇する遺伝性疾患のうち、代表的な疾患についてその発現頻度や次世代への継承について学習を進めた。さらに出生前診断や遺伝カウンセリングについて実際の例を提示し、将来看護師として遺伝病を抱える対象者への関わり方を想起させ、必要とされる知識や態度についても考える機会を持たせた。

#### 5) 在宅看護論

##### 3年次前期、後期後半

福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。3年次が、2年次の看護アセスメント学実習と老年看護実習の体験をもとに、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例を示しながら教授した。また、「在宅酸素療法」、「終末期における在宅看護」についてアクティブラーニングを取り入れながら講義を行った。

## 6) 災害看護論

3年次前期後半、後期後半

石田 佳代子、福田 広美、佐藤 弥生、石丸 智子、松 久美（非常勤講師）

地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことが目的である。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、災害時要援護者への支援、在宅療養患者に対する災害看護活動など、災害および災害看護に関する基礎的知識の習得に重点を置いた。また、演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオに基づいた机上訓練を行った。最終日に筆記試験を実施した。

## 7) 看護科学研究

3年次後期後半

佐伯 圭一郎、市瀬 孝道、岩崎 りほ、草野 淳子、桑野 紀子、品川 佳満、野津 昭文、濱中 良志、樋口 幸、村嶋 幸代

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目標とし、研究テーマの設定から文献収集、研究計画書の作成といった過程のすすめ方、研究デザインの決定やデータ解析技法の知識と実践といった一連の内容を教授した。講義内容と担当は次の通りである。

1)看護研究の意義（村嶋）、(2)調査研究（桑野）、(3)実験研究（濱中）、(4)質的研究（岩崎）、(5)文献研究（草野）、(6)文献検索と読み取り（佐伯）、(7)統計学の考え方（野津）、(8)データ解析の方法（野津）、(9,11)文献検索&抄読演習 1,2（佐伯）、(10)研究計画の作成（佐伯）、(12)研究の倫理と安全（市瀬）、(13,15)データ解析演習 1,2（野津、品川）、(14)論文の書き方、発表の仕方（樋口）

## 8) 看護管理学概論

4年次後期前半

福田 広美、伊東 朋子、吉川 加奈子

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解することを目標とした。昨年度から看護管理学入門を担当し、すでに学習した内容も含まれているが、系統的に看護管理について教授した。次年度は、4年次後期から前期の講義となり時間数も増

えることから、看護を実践するにあたって必要なマネジメントについて、実践的な課題を考えられる機会となるよう、講義内容を検討していきたいと考えている。

## 9) 看護探索セミナー

3年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、河野 優子、西部 由里奈、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、麻生 優恵、山田 貴子、川村 弘樹

成人急性期看護実習および成人老年慢性期実習を履修した3年次生81名に対し、どちらかの実習での受け持ちケースに対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケーススタディのまとめを行った。各担当教員が学生4～7名を担当しケーススタディのテーマ決定、看護の考察に対する助言を行い、発表までの過程を指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポート作成と発表を行い全員が合格した。

## 10) 第1段階看護技術演習

2年次後期後半

石田 佳代子、足立 綾、石丸 智子、江藤 由布子、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、森 加苗愛

看護アセスメント学実習の移行に伴い、時期を12月から1～2月へ移行した。

第1段階看護技術演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。基本的な手順だけではなく、患者にとっての安全や安楽などについても学生同士で考えてロールプレイを行い、援助全体を評価する能力を養った。今年度は、ワークノートの活用を推進するとともに、新たに「第1段階看護技術演習実施記録」を追加し、自己が実践した生活援助技術について評価する能力の強化を図った。また、卒業前の看護技術習得状況の調査結果で到達度が低かった項目（口腔内観察の評価項目など）を事例課題に追加した。

例年通り、担当教員が3～4名の学生を指導し、最後に技術チェックを行う方法で実施した。

- 1) 1月中旬 学生オリエンテーション
- 2) 1月下旬～2月上旬 事例に応じた援助技術の練習（生活援助を中心とした7症例）、担当教員による個別・グループ指導
- 3) 2月中旬（2日間） 援助技術の評価（担当教員による技術チェック）

## 11) 第2段階看護技術演習

3年次前期後半

石田 佳代子、足立 綾、安部 真紀、石丸 智子、江藤 由布子、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、森 加苗愛

第2段階看護技術演習の目的は、対象への安全・安楽に配慮し、専門領域別の基礎看護技術の実践応力を身につけることである。対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。基本的な手順だけではなく、患者にとっての安全や安楽などについても学生同士で考えてロールプレイを行い、援助全体を評価する能力を養った。

例年通り、担当教員が3～4名の学生を指導し、最後に技術チェックを行う方法で実施した。

- 1) 6月中旬 学生オリエンテーション
- 2) 6月下旬～8月 援助技術の練習（専門領域別の援助技術、診療の補助技術を中心とした7症例）、担当教員による個別・グループ指導
- 3) 8月下旬（2日間） 援助技術の評価（担当教員による技術チェック）

## 12) 第3段階看護技術演習

3年次前期

石田 佳代子、足立 綾、安部 真紀、石丸 智子、江藤 由布子、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、森 加苗愛

第3段階看護技術演習の目的は、これまでに学んだ基礎看護技術を、E-ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に能力を高めることである。例年通り、看護技術習得確認シートの卒業時到達目標AAの看護援助技術46項目の強化を図った。

- 1) 4月中旬 学生オリエンテーション
- 2) 4月下旬～9月 E-ラーニング（ナーシング・スキル46項目に対応したWeb上に提示されている31課題の「テスト」の実施）による知識確認、援助技術の練習
- 3) 9月末 レポート提出
- 4) 予防的家庭訪問での援助の実施、レポート提出

## 13) 第4段階看護技術演習

4年次後期

石田 佳代子、足立 綾、石丸 智子、江藤 由布子、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、森 加苗愛

第4段階看護技術演習の目的は、基礎看護技術のうち、習得度が低い項目について、正確な知識、状況判断に基づいた的確な実践能力を養うことである。対象学生は希望者のみである。昨年度

と同様に、臨床現場に近い設定の下で経験を重ねた。終了後にアンケートを実施して評価を行った。その結果、参加した学生全体の9割以上が「卒業後に就職先で実施できる自信がついた」、「外部講師からの指導は、自分の技術習得のために効果があった」と感じており、外部講師と教員による丁寧な指導によってとても勉強になったなどの肯定的な意見が多かったことなどから、演習効果を確認することができた。

1) 12月 受講者の決定と実施項目(心肺蘇生法、点滴静脈内注射、採血)

の選択

2) 2月下旬 学生オリエンテーション、技術の練習

3) 2月下旬(2日間) 大分赤十字病院の看護師(学外講師)によるデモンストレーション、学外講師および担当教員による個別・グループ指導

#### 14) 看護スキルアップ演習

4年次前期後半・後期前半

林 猪都子、佐藤 弥生、佐藤 愛(～8月)、渡辺 康人(9月～)、山田 貴子、足立 綾、西部 由里奈、伊東 朋子

基礎看護教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいにして、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開していくように調整・準備した。

具体的には医療・保健現場において遭遇しやすい事例(成人老年看護学領域:呼吸器疾患、循環器疾患、運動器疾患、小児:気管支喘息、母性:切迫早産、在宅:終末期)を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身につけさせた。

発表会では教職員による患者役の演示や指導助言をいただいた。学部卒業後できるだけ若い卒業生5名と大学院修了生1名を実習病院である大分県立病院、別府医療センター、大分赤十字病院、大分医療センターなどから講師として、アドバイザーになっていただき、演習効果も上がった。卒業生の姿に自分の将来を投影し、理想の看護師像を描いていた。卒業生・修了生の感想も学生はよく努力していたとの評価であった。

#### 15) 在宅看護論実習

4年次前期

福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子、赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、佐藤 愛、山田 貴子、麻生 優恵、桑野 紀子、岩崎 りほ

在宅看護論実習は、訪問看護ステーションでの実習を通して、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケースマネジメントを行い、訪問看護の必要性和援助方法の実際、様々な機関や他職種との連携・協働について理解することを目的と

した。2週間の実習で事例を受け持ち、看護過程を展開し看護計画に基づいた実践と評価までを行った。また、訪問看護師に同行させていただき多くの家庭での訪問看護を体験させていただくことができた。これらの体験を通して、在宅看護における訪問看護師の役割や他の職種や機関との連携、また対象者本人と家族に対する個別的な看護の重要性について学ぶことができていた。今後は、地域包括ケアとケアマネジメント、在宅医療・介護の連携などにも焦点をあてた実習を組み立てていきたい。

## 16) 総合看護学実習

4年次前期

看護系教員全員

総合看護学実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことである。本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点にある。

6月下旬から約3週間の実習を行い、学生は指導・助言のもとに実習目標を達成することができた。また、主体的に取り組んだことで、「自分が学びたい分野を深めることができた」など、達成感を感じることができた。保健・医療・福祉の連携と課題を考えることについては、他の目標と比べて評価が低かったため、各施設の特徴をふまえ、地域住民の疾病予防からケアに至るまでの包括的な活動の場面を実習計画に組み込むような調整や、地域中核病院を実習施設に追加するなどして、学生が幅広く学べるようにすることが課題と考えられる。

なお、次年度の実習受入れに関し、新規施設（地域中核病院）を2施設増やした。今後も県内の広い地域で実習施設を開拓していく必要がある。

## 17) 予防的家庭訪問実習

1～4年次

全教員

高齢者への継続的な家庭訪問を通して学生が、1) 地域に住む高齢者の健康や生活を学び、高齢者が自立して自宅で暮らし続けるための機能低下予防策を共に考えて実践するとともに、2) この支援を通して地域資源や生活について考え、学年を超えた支え合いの大切さを学ぶ、という理念の下に、全学部生327名が1～4年次生1名ずつで80チームを構成し、それぞれ75歳以上の在宅高齢者1名を定期的かつ継続的に家庭訪問した。全学的に本格実施して二年目となるので、学生要項をさらに整備し、学年別の目的・目標をいっそう明確化し、訪問時の交通の支援や記録物の様式・提出方法などを修正して実習を実施した。

このアウトリーチにより、学生が高齢者の健康問題またはそのリスクを早期に把握し、予防的な

支援を行ったり、必要な場合には当該高齢者の了解を得て市保健師や地域包括支援センター等につないだりして、課題の早期解決を図った。また、地域の健康課題については、大学で集約して市や自治会につなぎ、対応を検討したり、公民館等での健康教室に反映したりする活動を行った。学年縦割りのチーム構成なので、上級生はリーダーシップの必要性を自覚し、下級生は上級生をロールモデルにする等の相互作用が生まれ、良い効果を挙げていることがレポート分析からうかがえた。

次年度の課題を明確化するため、看護研究交流センタースタッフ等が協力者に年度末訪問を行うとともに、学生の記録物等を分析した。これから抽出された課題を学内で共有して次年度に生かすため、学内検討会（2月28日）を開催した。

## 18) 看護科学研究・卒業研究

### 4年次

#### 教員全員

平成28年度は76名の4年次生が各研究室に所属し、開学以降行っている1人1テーマで研究に取り組むことを継続した。スケジュールとして、まず1月8日に各研究室の責任者である教員が、研究室の特色、研究室で行っている研究テーマやこれまでの卒業研究などを紹介した。その後、学生の希望を考慮し76名が17研究室に配属され、それぞれ配属された研究室において教員の指導のもと、卒業研究のテーマを3月31日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。実験研究や調査研究、文献研究など多彩なテーマや方法で興味深いものが多い。文献研究以外は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、研究倫理についての学習過程を踏み、学びを深めた。研究室の配属から約10ヶ月間で、研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。12月7日・8日の2日間は、口頭による研究発表（6分間の発表、4分間の質疑応答）を講堂で行った。

今年度の工夫として、質疑応答の時間で、質問までの待ち時間を少なくするため、学生の配席を工夫したり、マイクの本数を増やすなどした。

学長からの講評で、良かったこと、改善点などのコメントがあった。

## 3-7-20 養護教諭科目

### 1) 教職概論

#### 1年次前期

伊東 朋子、吉村 匠平、関根 剛、赤星 琴美、麻生 良太、堀本 フカエ、横山 秀樹

専門職としての教員としての基本的な心構え、教職の意義、教員の役割・職務内容などについて

学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。受講者 18 名。

## 2) 生徒指導

2 年次前期

長谷川 祐介、関根 剛、吉村 匠平

教師として生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

## 3) 教育学概論

2 年次前期

鈴木 篤

教育に関する本質的理念について、これまでに受講者が有してきた経験や理解を問い直すことを通して、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

## 4) 教育相談

2 年次前期

関口 洋美、河野 伸子、飯田 法子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かを理解する。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

## 5) 養護概論 I

2 年次前期

赤星 琴美、松木 留美子

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などについて

教授した。具体的には、養護についての本質や基本的概念、養護教諭の沿革、職務内容の変遷などについて、既存の資料や図書館におかれている本・資料などを用いてディスカッションを行い学びを深めた。さらに養護教諭の職務と果たすべき役割、子どもを取り巻く健康問題とその解決の支援について、現職の養護教諭の講義、演習をとおして学びを深めていった。

## 6) 学校教育心理学

2年次後期

関口 洋美、藤田 文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけから入り、発達、知能、パーソナリティ、学習などの個々の生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

## 7) 教育課程論

2年次後期

今井 航

将来教員として授業を計画する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基礎力の習得を目的とし、「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった2点の問いを持って、授業を進めた。

### 3-7-21 選択科目

#### 1) 音楽とこころ

2年次前期

宮本 修

クラシック音楽からポピュラー音楽まで、それぞれの楽しみ方のポイントをひもとき、音楽とこころの関係について考察すること、さらに、音楽療法についての講義を行った。単位認定者数は22名であった。

## 2) 美術とこころ

2年次前期

澤田 佳孝

人が生まれながらに持っている物を作る力・表現する心・工夫する能力などについて、描くことを体験するとともに、西洋美術史について学ぶ講義を行った。単位認定者数は22名であった。

## 3) 言語表現法

1年次前期

松田 美香

人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために必要かつ不可欠な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に講義を行った。単位認定者数は85名であった。

## 4) 韓国語

1年次前期

劉 美貞

ハングル文字の発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学び簡単な会話のやりとりができるよう講義を行った。単位認定者数は70名であった。

## 5) 哲学入門

1年次前期

西 英久

医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本問題が考察できるよう講義を行った。単位認定者数は53名であった。

## 6) 社会学入門

1年次後期

大杉 至

社会学者がどのように社会をとらえてきたか、概説し、社会を見る目が豊かになるよう講義を行った。単位認定者数は17名であった。

## 7) 法学入門（日本国憲法）

1 年次後期

二宮 孝富

市民生活に関わりの深いトピックを取り上げながら、日本国憲法の基本原理～国民主権・基本的人権の尊重・平和主義～について理解できるよう講義した。特に人権に関する諸問題について、具体的な事例を多く取り上げた。単位認定者数は 63 名であった。

## 8) 文化人類学入門

1 年次後期

足立 恵理

医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を行い、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるよう講義を行った。単位認定者数は 77 名であった。

## 3-8 大学院における教育活動

### 3-8-1 博士（前期）課程

#### 1) 生体科学特論

1 年次前期

濱中 良志、安部 眞佐子、岩崎 香子

現状において、1 年次生は、臨床経験有しているため、生体科学（解剖・生理・生化学）の分野の基本的な理解はできていた。よって、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を“対話形式”で授業を進めた。

#### 2) 病理学特論

1 年次前期後半・後期前半

市瀬 孝道

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、代謝障害、先天異常などの病気の基礎と更に系統別の個々の疾患についてプリントとパワーポイ

ンを用いて詳しく講義した。また、系統別疾患の講義の中で疾患症例について、マクロ病理（解剖時の所見）とミクロ病理（病気の組織像）についてパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

### 3) 病態生理学特論

1 年次前期・後期前半

崔 明愛、巻野 雄介

This course was designed to provide students with knowledge on alterations in human physiological functions that result from disease processes. Students received lecture from faculties. Each student presented pathophysiology of two diseases; one disease by individual student while the other disease by a group of two students. Moreover, students did case study and presented about it. Through the preparation for disease presentation, case study, and discussion with faculties and other students, students deeply studied pathophysiology. We provided students with knowledge on pathophysiology of diseases. In addition, we guided students to study about pathophysiology of diseases and gave feedback regarding their presentation. We guided students to conduct case study using the knowledge of pathophysiology and gave feedback regarding their presentation. We directed students to explain rationale of the occurrence of clinical manifestations using pathogenesis. We led students to enhance an understanding of in-depth knowledge regarding the fundamentals of disease which it could be applied to clinical practice.

### 4) 人間関係学特論

1・2 年次後期

関根 剛、吉村 匠平

行動変容の基礎理論であるオペラント条件づけについて、問題演習を行いながら講義をすすめた。特に、行動目標の設定の際に陥りやすい点について繰り返し指摘した。また、後半は人を変えるための技術に関わる諸問題として、信頼関係の形成、生活習慣や考え方の変容法、講義すぎる（教育目標と方法等）、リーダーシップや対人魅力などについて、解説しながら、相互討議を行なわせて、それぞれの専門分野の立場での理解を深めさせた。

## 5) 保健情報学特論

1・2年次前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。6回以降の生物統計学に関する内容については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかった。

各回の内容は以下の通り。

1～2.情報管理・処理のためのコンピュータ技術

3～4.医療・保健分野でのデータ処理

5.情報システムの構築と管理

6～7.統計データとは、データの要約

8～9.確率，確率分布

10.推測統計総論

11.推定

12.検定

13.統計ソフトウェア演習 1

14.検定各論

15.統計ソフトウェア演習 2

なお、本年度は学長の決裁による特例として、転コースの学生1名に対して後期にも開講を行った。

## 6) 看護科学研究特論・健康科学研究特論

1・2年次前期

小嶋 光明、村嶋 幸代、影山 隆之、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、福田 広美、平野 互、関根 剛、岩崎 りほ、大田 えりか（非常勤講師）

看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じ、実践的能力の育成をおこなった。

- |                       |    |
|-----------------------|----|
| 1. 看護研究の意義とリサーチクエスション | 村嶋 |
| 2. 学術誌・オリジナリティ・ピアレビュー | 影山 |
| 3. リサーチクエスションと疫学的発想   | 影山 |
| 4. 研究デザインと生態学的研究      | 影山 |
| 5. 心理学的測定の方法          | 関根 |
| 6. 生活と行動科学的評価         | 佐伯 |
| 7. 疫学的観察研究            | 甲斐 |

8. 社会調査の方法と手続き	福田
9. 実験的研究	小嶋
10. 質的研究	岩崎
11. 二次資料と文献研究	関根
12. 研究倫理と研究計画書の書き方	平野
13. 論文の構成と表現	影山
14. 文献レビューとクリティーク	大田

## 7) 看護管理学特論

### 1・2年次後期

福田 広美、佐藤 弥生、桜井 礼子、小野 千代子、甲斐 仁美

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授し、管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能や看護管理者に必要とされる能力について学生自身が考える機会となることを目指した。学生には、いくつかの課題を提示して、文献や自らの経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションは実施した。看護職の業務管理のあり方、病院経営と看護管理についても講義やディスカッションが活発に行われた。

## 8) 看護理論特論

### 1・2年次後期

藤内 美保、高野 政子、秦 さと子、桑野 紀子、李 笑雨、伊東 朋子

看護における理論を構築することの必要性和科学的解釈の本質を考究することの意義について触れた。外部講師として李教授に看護理論の総論の部分を講義依頼し、各論として他の5名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式で講義した。看護理論のパラダイムの視点から履修学生に課題として調べさせた理論家について発表させ、看護実践との関連について考察させた。看護理論は実践の場との結びつきを実感しにくい科目であり、理論に裏打ちされた実践が必要で有効な手段であることへの理解が重要となる。その点においても、履修生は大半が臨床の看護職であることから、この科目が実践を振り返る学びの場ともなっていた。学習習得状況は良好であった。

## 9) 看護教育特論

後期前半

高野 政子、宮崎 文子、山崎 清男、梅野 貴恵、石田 佳代子、吉村 匠平

本年の受講生は、看護管理・リカレントコース、助産学コース、NP コースの5名であった。科目の構成は、前半講義と後半演習で展開した。看護基礎教育の内、専門分野の看護教育学、看護教育課程、看護教育方法、看護教育評価を含む内容を教授した。新規に今年度から教育原理、教育心理学を加えた。

後半はアクティブラーニングとして、各自の立場で教育的視点に立ち、問題を明確化した。レポートと発表を課題として意見交換した。

## 10) 看護コンサルテーション論

1・2年次前期後半

杉本 圭以子、吉村 匠平、関根 剛、畑中 明子

受講生は、NP コース 9 名、看護管理・リカレントコース 4 名、助産学コース 1 名の 14 名であった。看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略の講義の後、対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について講義した。県内の専門看護師によるコンサルテーションの実際についての講義と、事例について演習を行うことで、臨床現場に則した現実的なコンサルテーションについて考察させた。後半では、学生それぞれが経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることでさらに理解を深め、看護コンサルテーションの課題について全員で検討した。

## 11) 看護倫理学特論

1・2年次前期前半

平野 互、小野 美紀、関根 剛

倫理的思考は、専門性や領域を問わず全ての看護職に不可欠であることから、受講者が専攻する領域で活かせるよう、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく思考訓練を行うことを目的に講義を組み立てている。11 回の講義と 3 回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告（レポート）による討論を行った。

講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「人間の尊厳と自己決定権」・「プライバシー権」・「苦情解決と倫理」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野が担当した。

事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は3名の教員全員が出席してコメントし、評価を行った。

## 12) 看護政策論

1年次後期後半

影山 隆之、村嶋 幸代、小池 智子、立森 久照、小山 秀夫、中西 三春

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策の決定プロセス、その背景となっている社会情勢、政策が看護現場に及ぼす影響、政策の評価方法などを考えるために、オムニバス形式で講義を行った。国政レベルでの保健医療政策、保険診療制度の仕組み、政策や活動の評価方法、政策の国際比較、政策の根拠資料など、今日における看護政策課題などの講義から、学生自らが看護政策について思考するための視点を教授した。

## 13) 英語論文作成概論

1年次前期後半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)構造化アブストラクト、3)日本人が間違いやすい英語表現、4)調査研究データ特有のアブストラクトの事例の書き方、5)実験研究データ特有のアブストラクトの事例の書き方、修士論文研究のアブストラクトを作成する課題を出し、添削した。

## 14) Intensive English Study

1年次前期

Gerald T. Shirley、馬場奈穂

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructors during the eight-week course.

Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructors. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

#### 15) 原書講読演習

1 年次前期

宮内 信治

発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の習得、英文法基礎知識の確認と演習を行ったうえで、看護（Nurse Practitioner）に関する英語表記の原著論文の読解翻訳演習を行った。各講義のはじめに単語小テストを実施し、学習確認と評価を行った。

#### 16) 看護アセスメント学特論

1 年次前期後半

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライアントマネジメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点目は、看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2 点目は、小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。3 点目は、在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した

#### 17) 精神保健学特論

1 年次後期

影山 隆之

地域・職域における精神保健活動に役立つことを目標とし、精神健康のモデルと評価法、事例のアセスメント、精神保健のシステムと活動、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。

## 18) 基盤看護学演習

1 年次後期

影山 隆之、藤内 美保、品川 佳満、伊東 朋子

基盤看護学における研究の方法について、様々な視点からその手技方策を具体的に解説するために4名の担当教員によるチュートリアル形式で展開した。主な担当領域は影山 隆之「精神健康測定法」、藤内 美保「看護師の臨床判断と形成過程」、品川 佳満「自律神経機能とその測定方法」、伊東 朋子「看護研究における実験的研究」で今年度の履修生は1名であったが、学生は与えられたテーマに沿ってレポートを作成したり、プレゼンテーションなどで発表する形式をとった。学習習得状況は良好であった。

## 19) 小児看護学特論

前期後半

高野 政子、草野 淳子、式田 由美子

履修生は研究者コースの1名であった。講義は小児看護で用いる理論、小児と家族を取り巻く環境と社会資源、小児医療における生命倫理、愛着形成の障害と児童虐待、障がいを持つ児と家族への看護を行ない、学生は2つの課題をレポートし発表して、教員と事例検討した。本年度も糖尿病療養指導士を講師として招聘し、小児糖尿病の理解を深めることができた。

## 20) 成人看護学特論

1 年次前半

小野 美喜、森 加苗愛

1名が履修した。成人看護学の急性期・慢性期・終末期に関する研究、教育の動向について担当がオムニバス方式で教授した。成人期の急性期・回復期に関する現状と課題、看護理論（小野）。成人期の慢性期に関する現状と看護の課題、看護理論（森）。講義に続いて、学生が最も興味関心の高いテーマで看護の現状と課題、学び等についてプレゼンテーションを行い、意見交換を行った。

## 21) 老年看護学特論

1 年次前期

小野 美喜、森 加苗愛

2名が受講した。高齢者の加齢に伴う身体的変化、心理社会的変化や健康問題と看護についての

知識を教授した。さらに受講生が看護体験から関心を高くしている問題、課題について、文献学習やディスカッションを行いアプローチについて検討した。身体拘束や高齢者の治療の意思決定に関する看護の問題について議論が深まり個々の見解についてはレポートにまとめた。

## 22) 発達看護学演習

2年次前期

小野 美喜、林 猪都子、梅野 貴恵

看護管理・リカレントコースの選択学生2名が老年看護学に関する発達看護学演習を履修した。加齢による身体・心理的機能の変化を受け入れながら、最期まで自分らしく暮らすことの支援について事例検討を行い、各自のテーマにおいてプレゼンテーションとディスカッションを行った(小野)。

大学院前期課程研究者コースの選択学生1名を担当した。学生の研究課題である発達障害について、学校教員が発達障害の疑いのある教職員へどのように対応しているかについて、本や資料に基づき学生と教員でディスカッションした。(林、梅野)

## 23) 地域看護学特論

1年次

赤星 琴美

ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域における個人、家族、集団へのアプローチの方法や地域看護診断の手法と理論を用いながら教授した。さらに行政システムの視点から、新たな健康ニーズへの対応や地域看護の機能についてもディスカッションを含めて講義を展開した。

## 24) NP 実習

1年次前期後半

小野 美喜、石田 佳代子、森 加苗愛、甲斐 博美、生野 直子

NPの診療活動に同行し、活動の実際を体験することでNPの役割の理解を深め、包括的健康アセスメントと看護的治療マネジメント(特定行為を含む)の実際を理解した。更にNPに必要な必要高度看護実践能力を考察しと自己の課題を明確にした。今年度から、症例を担当し包括的健康アセスメントの実施することや、施設の医療安全体制を理解できることを強化するプログラムにして学びを深めた。

## 25) 老年 NP 特論

### 1 年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、甲斐 博美、安部 眞佐子、佐藤 弥生

NP コース履修生 9 名が受講した。加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NP としての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義およびディスカッションを行った。NP の看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。最終回は、学習を統合させる目的で、学生の身近なケースをアセスメントし看護の視点でマネジメントする課題を課しプレゼンテーションを行った。看護を基盤とした NP の実践が考えられていることが学生の発表から評価できた。

## 26) 老年疾病特論

### 1 年次後期

濱中 良志、糸永 一郎、工藤 欣邦、一万田 正彦、財前 博文、竹下 泰、甲原 芳範、小寺 隆元、塩月 成則、木村 成志

NP としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病および継続医療における臨床評価について学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

## 27) 老年臨床薬理学特論

### 1 年次後期

吉田 成一、伊東 弘樹、佐藤 雄己

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。そのため、本試験で合格できない学生が複数名いた。しかし、本試験後の自主学習により全ての学生が相当の理解度に到達し、全員単位修得することができた。

## 28) 老年診察診断学特論

1 年次前期半

濱中 良志、岩波 栄逸、山口 豊、永瀬 公明、工藤 欣邦、糸永 一朗、阿部 航、安藤 優

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって専門医師による講義、実習を行った。

## 29) 老年アセスメント学演習

2 年次前期

立川 洋一、永瀬 公明、久保 徳彦、小野 美喜、石田 佳代子、森 加苗愛

老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）に対して、包括的健康アセスメントおよび看護的治療マネジメントを行うことを目的に、専門的知識と技術を修得するうえで必要なシミュレーショントレーニングを行った。症例は心疾患や感染症など **common disease** に焦点を当て、医療面接、身体診察、アセスメント、プロブレムリストの作成、マネジメントをしていく臨床推論を強化した。学生のプレゼンテーションに対し、医師や NP が講評し、学生のアセスメント力を強化した。

## 30) 老年薬理学演習

2 年次前期前半

塩月 成則、小寺 高元、小野 剛志、甲斐 博美

NP コース 4 名が履修した。老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を事例によるシミュレーションを通して学んだ。特定行為を含む学習の強化スケジュールに基づいて課題事例を用い、毎回プレゼンテーションを実施した。医師や NP からの助言を受けてディスカッションを深め、臨床推論を強化することにつなげていった。

## 31) 老年実践演習

2 年次前期

佐藤 博、古川 雅英、山本 真、迫 秀則、一万田 充俊、恵谷 玲央、小野 美喜、前田 徹、竹内 山水

NP 履修生 4 名が履修した。特定行為を履修できるように 21 区分のうち技術を要するものに焦点をあて専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行った。デブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換、気管挿管、人工呼吸器の設定、末梢動脈血、PICC 挿入、エコー、X 線読影のスキルが向上する演習を展開した。学生には授業時間だけでなく課外の自主トレーニングも実施できる環境を整え全体的な到達度が上がった。

### 32) 老年 NP 実習

2 年次前期後半・後期前半

小野 美喜、森 加苗愛、甲斐 博美、生野 直子、濱中 良志

慢性疾患を持ちながら地域で暮らす高齢者(成人を含む)に対して医師と連携しながら自律的に医療介入も行いプライマリケアを提供できる実践力を養うことをねらいに、老年看護における NP の役割を理解し、包括的健康アセスメントおよび看護的治療マネジメントの高度看護実践力を習得する目的で実習をした。看護的治療マネジメント(特定行為を含む)を強化する為に急性期の領域での実習も充実させることやでより多くの実践を経験し、アセスメント能力や臨床推論の能力を高めた。

### 33) 老年 NP 探求セミナー

2 年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、甲斐 博美、生野 直子

老年 NP 実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートを作成をした。また次段階の実習準備として介護老人保健施設での研修を設けた。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する高齢者の健康問題と NP 役割を考察につなげられた。

### 34) NP 論

1 年次前期前半

小野 美喜、藤内 美保、田村 委子、廣瀬 福美、光根 美保、村嶋 幸代、草間 朋子

NP の歴史的変遷、日本における NP の創設、NP に必要な能力役割、大学院 NP 教育の考え方、NP の実践活動など教授した。「特定行為に係る看護師の研修制度」が制度化したことに伴い、H27 年度から「手順書」に関する内容を修了生に教授してもらっている。医療安全と手順書に関する知識を教授した。またハワイの FNP である魁生氏と小児 NP のデンデマン美智子氏に特別講義を依頼し、海外における NP の活動を聴講する機会を設けた。

### 35) フィジカルアセスメント学特論

1 年次前期

藤内 美保、石田 佳代子、濱中 良志

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教

授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように、試験は中間試験と総合試験を実施し、それぞれ筆記試験および OSCE を行った。

### 36) 広域看護学概論

#### 1 年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、藤内 修二、村嶋 幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

### 37) 地域保健特論

#### 1 年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、大津 孝彦、朝見 智子、佐藤 紀子

地域で生活する個人・家族・集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。受験生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

### 38) 産業保健特論

#### 1 年次後期

川崎 涼子、高波 利恵、緒方 文子

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割・具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論やモデルを用いて教授した。

産業保健に関する最新のトピックや事例を用いて講義を行い、産業保健師の活動がイメージしやすく理解が深められるよう教授した。

### 39) 健康危機管理論

#### 1 年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、本山 秀樹、甲斐 倫明、末永 宏、玉井 文洋

健康障害のある個人、家族、集団を対象として保健師が行う支援の基本的な考え方が理解できるように講義した。さらに、地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する考え方や保健師活動の展開方法および多職種連携について理解を深めるために時間を十分にかけた。

県健康危機管理室の参事、県食品課の担当者、保健所の保健師を講師として招くことで、地域での健康危機管理の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義を行った。

また、大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、学習に深みを持たせられるよう配慮した。

### 40) 健康増進技術演習

#### 1 年次

稲垣 敦、安倍 眞佐子、関根 剛

本講義では、健康レベルに応じて個人・集団の健康と生活を評価し、効果的な疾病予防・健康増進ができる知識と能力を養うことを目標に、運動指導、栄養指導、心理相談の3領域にわたる講義を行った。

運動指導（合計6回）では、科学的根拠に基づいたストレッチングの効果を実験的に検証したり、自転車エルゴメーターによる最大下負荷で各自の最大酸素摂取量を間接法により推定した。また、加速度計を装着して各自の身体活動の特徴を明らかにし、生活習慣病予防の対策を考察したり、正しいエクササイズ・ウォーキングを実技を実施した。

栄養指導（合計7回）では、健康政策の中の栄養の位置づけを明らかにし、食品についての知識を増やすために、学生が資料を作成し、プレゼンテーションを行った。さらに各種疾病時の食事摂取と、ライフステージ別の食事摂取指導資料を学生が作成して、プレゼンテーション後質疑応答を行い、補足説明を加えた

心理相談（合計8回）では、カウンセリングロールプレイ、構成的エンカウンター、自律訓練、プレゼンテーションを実際に行ってみる体験から理解を深める一方、座学においても必ず討議の時間を取って理解を深めるよう配慮した。

#### 41) 広域看護アセスメント学演習

1 年次前期

川崎 涼子、赤星 琴美、緒方 文子、村嶋 幸代

地域看護診断を用いて地域社会の健康課題の抽出および評価方法、改善策を導き出す過程について、関連するモデルや理論を提示しながら講義を行った。

演習では、「地域マネジメント実習」を行う対象の市町の既存資料や二次データを用いて健康関連指標や人口動態・静態、地理情報等の情報を収集し、整理分析を行い、対象地区や対象集団の理解およびニーズを多面的にアセスメントし、健康課題を抽出した。また、2回の発表会を通して、整理分析の手法や結果の提示方法について院生間で意見交換し学びあうことで地域診断技術を深めた。

#### 42) 健康教育特論

1 年次前期

川崎 涼子、赤星 琴美、緒方 文子

個人と集団が、自らの健康及び福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義および演習を行った。

講義では健康行動理論や社会認知理論等を教授し、保健師としての教育的働きかけと地区活動の展開方法について具体的事例を挙げ、基礎知識や技術の習得を目指した。

演習では、個人への保健指導と集団への健康教育について、全員が企画・指導案と媒体の作成を行い、ロールプレイを実施した。集団への健康教育は院生と教員間でディスカッションを重ね、修正を行う過程を踏むことで学習を深めた。

#### 43) 健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

#### 44) 疫学特論

1 年次前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を身につけることを目的としてテキストの講読とディスカッションを行った。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

#### 45) 保健統計学

1 年次前期

佐伯 圭一郎、野津 昭文

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を教授した。

内容は以下の通りである。なお、生物統計学部分については、保健情報学特論の生物統計学部分と同内容である。

1. 健康情報の基盤となる理論
2. 人口統計
3. 傷病に関する統計
4. その他の保健統計
- 5～14. 生物統計学
15. 地域保健医療データの統計解析

#### 46) 疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

広域コースとリカレントコースの受講者に対しては、演習例題等の内容に相違点があるか、基本的な内容は以下の通りであった。

1. 情報処理・情報管理の基礎
2. 情報収集の技術

3. 疫学データの解析
4. 保健統計データの解析(1)
5. 保健統計データの解析(2)
6. グラフィカルな手法・マッピング
7. シミュレーション
8. 情報発信の技術

#### 47) 社会保障システム特論

1 年次前期

平野 互

保健師に必要な基礎知識として、社会保障制度の意義および理念と構造を理解するために、講義を構築した。社会保障の存在理由である生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、社会資源としての諸制度に対する理解を深めることを目的に、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度について講義した。受講生が8名であったため、ゼミのような一問一答の討論も可能であった。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の2回のレポート提出により行った。

#### 48) 保健医療福祉政策論

1 年次後期前半

平野 互、阿部 実

保健師に必要な、政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状と課題、保健活動と社会福祉の事業評価、障がい論とくに社会モデルの意味と課題、自立支援について講義し、さらに県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿部講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画とその実施の歴史と課題について2回の講義をいただいた。

成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

#### 49) 疾病予防学特論

1 年次前期

赤星 琴美、藤内 修二、池邊 淑子、三浦 源太、増井 玲子

さまざまな健康レベルにある個人、集団を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を取得できるように教授した。

#### 50) 実践薬理学特論

1 年次前期前半

吉田 成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が8名であったため、受講者の学習状況に差が認められた。学部での医薬品に関する理解度が基礎となるため、本講義での内容理解に影響が生じたモノと考える。

#### 51) 薬剤マネジメント学特論

1 年次

赤星 琴美、川崎 涼子、平川 英俊

ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬剤管理（残薬管理等）と服薬方法などについて教授した。さらに、健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法や内服方法、効能などについての薬剤指導法（DOTS、抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮痛剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服薬方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。

## 52) 環境保健学特論

1 年次前期

甲斐 倫明

環境と健康との関係を理解するために、社会的ニュースを事例にして、物理的要因、化学的要因、生物的要因および社会的要因と健康との関係についての基礎概念の整理を行い、最新の英語原著論文を紹介しながら最新のトピックスをもとに概念の理解を深めた。講義内容は次の通りである。1)環境保健とは何か、2) 生存率とハザード関数などの指標の基礎概念、3)DALYs(障害調整生存年数)と健康寿命、4) オッズ比と相対リスク、5)リスク評価—曝露から疾患まで、6) ワクチンのリスクベネフィット、7) 喫煙、ETS のリスク、8) 放射線のリスク、9)携帯電話とがんリスク、10) 、11) 化学物質のリスク、12) 感染症のリスク、13) 食の安全、14) 生活因子/社会因子/遺伝因子、15) 分子レベルと健康

## 53) 地域生活支援実習

1 年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として県内8か所の市町において保健師に同行あるいは院生単独で訪問し、実習を行った。6月から2月までの9か月間に合計4回～8回の訪問を行い、成果報告会を2月7日に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。9名全員が事故なく実習を終了することができた。

## 54) 地域マネジメント実習

1 年次

川崎 涼子、赤星 琴美、緒方 文子

広域アセスメント学演習で実施した地域看護診断に基づいて、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うことを目的に実習を展開した。

県内の8市において4週間の実習を9名の院生が履修し、事前打ち合わせ・情報収集等を含め主体的に取り組み、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。また、10月13日に学内報告会を開催し、実習施設の指導者および県内市町の保健師27名の参加を得て実習成果を共有した。

## 55) 広域看護活動研究実習

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

県内の保健所において、5週間の合計 25 日で構成した。9名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

12月13日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

## 56) 学校保健特論

2年次前期

赤星 琴美、工藤 優

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的方法について教授した。

公立小学校にて、学校保健活動や健康相談活動（ヘルスカウンセリング）の実際について見学させていただいた。さらに、文献を用いて、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健との連携や組織的な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。

## 57) 広域看護学演習

2年次

赤星 琴美、福田 広美、崔 明愛

公衆衛生看護、看護管理、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。

学生と綿密に文献検討、原書講読を行い、ディスカッションにより内容を深めた。

## 58) 助産学概論

1年次前期

梅野 貴恵、林 猪都子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで

期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に取り組む姿勢や助産師のキャリアラダーについて系統的に教授した。授業は、資料を用いた講義と学生が事前課題についてプレゼンテーションし、ディスカッションを行う方法をとった。「出産の満足度」に関する研究論文を各自でクリティークし発表した。また『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、社会に求められる助産師の役割について自己の考えを述べることができた。

## 59) 周産期特論

### 1 年次前期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、後藤 清美、梅野 貴恵

すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、主な疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施した。

## 60) 母子成育支援特論

### 1 年次前期

高野 政子、平野 互、吉村 匠平、桑野 紀子、佐藤 敬子、井上 祥明、上野 桂子、梅野 貴恵

母子関係や家族をめぐる問題、女性のライフサイクルにおける不妊や出生前診断、愛着喪失などの心理・社会的問題、子育てを取り巻く問題や支援制度を理解し、助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。各分野の専門性を考慮し、学内外の講師のオムニバス形式で実施した。

## 61) リプロダクティブ・ヘルスト論

### 1 年次前期

井上 貴史、中村 聡、嶺 真一郎、宇津宮 隆史、谷口 一郎、堀永 孚郎、梅野 貴恵

すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。性分化の機序、生殖器に関する形態機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向についても教授された。評価は、筆記試験を実施した。

## 62) ウイメンズヘルスト論

### 1 年次前期

梅野 貴恵、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、赤星 琴美、桑野 紀子、實崎 美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる健康問題を理解し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を考慮したオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

## 63) 妊娠期診断技術特論

### 1 年次前期

安部 真紀、吉田 成一、安部 眞佐子、小嶋 光明、梅野 貴恵、渡邊 しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、臨床推論を用いた妊娠の生理と診断に必要な情報とアセスメント、助産師外来の実際、妊娠期のフィジカルアセスメント、妊産褥婦の栄養摂取と栄養指導、妊産褥婦と薬剤、妊婦の日常生活適応への支援と保健指導、母子に対する放射線の影響、出生前診断を受ける妊婦への支援、MFICUにおける妊婦管理、ハイリスク妊婦の支援である。成績評価は、筆記試験と出席状況により行った。

## 64) 分娩期診断技術特論

### 1 年次前期後半

樋口 幸、安部 真紀、生野 末子

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的に、講義と事例を用いたシミュレーション演習を取り入れたことで、より臨床での場面をイメージしながら、母児の生命の安全維持かつ、母親が主体的に分娩に臨み、満足感を得ることができるよう支援するための基本的な助産の実践能力を習得できた。また、段階的に様々な事例を展開することで、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る基本的な知識及び技術を習得できるよう講義と演習を行った。

## 65) 産褥・新生児期診断技術特論

### 1 年次後期

樋口 幸、和田 美智代

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践するための内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU 課題探究セミナー」の導入とした。評価は、筆記試験、レポート、演習参加度から実施した。

## 66) 周産期診断技術演習

### 1 年次後期

樋口 幸、佐藤 昌司、河野 富美代

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。胎児の健康状態の診断については、高機能シュミレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。さらに、CTG 波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法 B コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティーピクス、産褥体操など分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授したうえで、実際に体験した。

また、新生児の栄養について、桶谷式乳房ケアを行う臨床助産師を講師に招き、乳房トラブルの予防やマッサージの方法など、実際に乳房モデルや模型を使用して演習を行った。なお、様々な新生児の健康状態に合わせて対応できるよう、人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

## 67) 助産保健指導演習

### 1 年次

安部 真紀、梅野 貴恵、樋口 幸、林 猪都子

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する健康問題を理解する。また、女性とその家族の

個性を理解し、それぞれの発達段階にある個人及び集団を対象として保健相談、健康教育、援助活動が効果的に実践できるための理論的基礎を学び、指導案・教材を利用しプレゼンテーションを行った。妊娠期では個別指導、産褥期では集団指導の指導案及び教材を作成しロールプレイを行い、実践力を高める授業とした。集団指導は、実習施設の母親学級の見学と市内小学校でのいのちの教育を実演した。

## 68) 分娩期実践演習

2年次前期

梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀、江藤 由布子

産婦に対する助産実践に必要な基本的分娩介助技術を習得することを主な目的に教授した。講義やVTRデモンストレーションで一通りの分娩介助技術を指導した。1年次より分娩介助時の技術に必要な清潔操作などの基礎看護技術OSCEを終えていることもあり、分娩介助に必要な技術を中心に指導することができた。学生は休日や時間外を利用して練習し、教員が産婦役のOSCEにも合格することができた。ひとつおりの学んだあと、産婦の状況に応じて介助を実施するフリースタイル分娩の方法や会陰裂傷縫合の技術についても、デモンストレーションを行い、実演により学びを深めた。

## 69) 助産過程展開演習

1年次後期

梅野 貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシエントを用いて習得し、実践へ応用する能力を身につけさせるために教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦1事例、正常経過をたどる分娩期事例1例、正常から逸脱する可能性の高い分娩期事例1例の計3事例を用いて助産過程の展開を実施した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークを行った。特に分娩期事例では、思考の確認をするために一人ひとり発表し教員とディスカッションするなどの方法も取り入れ、グループディスカッションが円滑に進むようにした。評価は、提出されたレポート、発表内容等から行った。

## 70) 助産マネジメント論

1年次後期

梅野 貴恵、宮崎 文子、生野 末子、戸高 佐枝子、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を

教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等を取りあげ、オムニバス形式で実施した。評価は、筆記試験を実施した。

## 71) 地域母子保健学特論

2年次後期

梅野 貴恵、赤星 琴美、佐藤 貴子、佐藤 紀子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境についてオムニバス形式で実施した。

## 72) 助産マネジメント演習

2年次後期

梅野 貴恵、安部 真紀、生野 未子、菊池 聖子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習科目とした。地域周産期医療センターの母体搬送事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアについてディスカッションし、シミュレーション学習をした。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定してシミュレーション学習を行った。さらに、助産院の院長について日常的な助産管理全般を経験し学びを深め、将来の目標と自己の課題を明確にし、助産師としてのアイデンティティを培うことにつながった。

## 73) 分娩介助実習

2年次前期

梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケア実践能力を養うことを目的に8週間の実習を行った。実習施設は、診療所2施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数を13例以上として取り組み、平均11例の実施となった。夜間・休日の実習や待機もあるため、実習4週目に帰学週をもうけ、身体を休め体調管理を行い、分娩介助の振り返りを実施した。その後の実習も体調不良を起こすことなく終了した。また、分娩介助事

例の記録は、助産過程の展開を1例1例振り返り時間はかかったものの提出することができた。継続事例3例を妊娠期から産後1か月まで受け持ち助産実践を行うことで、妊産褥婦個々の問題に寄り添い、ケアを実践することの重要性と継続支援の必要性を自覚することができた。

#### 74) ハイリスク妊産婦ケア実習

2年次前期

梅野 貴恵、安部 真紀

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで2週間の実習を行った。受持ち対象者のリスク状況を判断し、母児の安全に配慮し助産過程を展開することができた。総合周産期母子医療センターにおける助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携等について学びを深めることができた。

#### 75) 妊娠期課題探究セミナー

1年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸、姫野 綾

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習としている。前半の8週間で大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、12月からは、堀永産婦人科医院、国立病院機構別府医療センター産婦人科外来に分かれて実習した。2月第4週からは6～7月に出産する予定の妊婦を継続事例として受持ち、健診日に実習した。臨地での産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査20例と個別に応じた保健指導の実際12例以上の目標は、到達することができた。

#### 76) NICU 課題探究セミナー

1年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICUで、2週間実習を行った。学生はハイリスク新生児（経験者は超低出生体重児）1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程

の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護や他部門との連携を見学・参加することで、母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりを考えた育児環境の調整、助産師として妊娠期から果たすべき役割について学ぶ機会となった。

## 77) 地域母子保健演習

2年次後期

梅野 貴恵、甲斐 慶子、佐藤 紀子、渡邊 しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習科目とした。大分市・別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、大分市・別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。4か月児健康診査（大分市は個別健診のため、堀永産婦人科で開催されている3か月児健康診査）、1歳6か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組、他機関との連携を理解した。特に、4か月児健康診査では、継続事例または分娩介助実習での受け持ち母子の健診に付き添うことで、家族や地域の人に支えられ成長していく母子への助産師としての役割を認識することができた。

## 78) 健康増進科学特論

1年次前期

安部 眞佐子、稲垣 敦

加齢と体力、エネルギー代謝、運動強度、身体活動量、呼吸循環器系持久力、筋力トレーニング、ストレッチ、運動処方、運動療法等について講義し、測定実習等を行った。

栄養では、栄養学基礎の復習と、腎臓病食、脂質異常症、高齢者に対応する食事について講義した。

## 79) 放射線保健学特論

2年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

医療で用いられ放射線・放射性物質、自然放射線・放射性物質、それからの被ばくと健康影響について基礎的な知識を整理するとともに、最新のトピクスを交えて、医療および原子力災害における看護職が住民に対応するときに必要な知識を教授した。

## 80) 身体機能適応科学演習

2年次前期

稲垣 敦

修士論文テーマに関連する論文を学生および教員が選んで精読し、フォームにまとめて発表した。また、随時、修士論文の指導を実施した。

## 81) 健康運動科学演習

2年次前期

稲垣 敦

科学の考え方を学べる専門書を選び、修士論文に関係づけながら解説した。また、随時、関連する課題を出した。

## 82) 放射線健康科学特論 I

1年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

放射線基礎医学（第12版）を教科書として、放射線物理、放射線の線量、放射線治療、放射線生物（細胞レベルから組織応答まで）、放射線健康影響、放射線リスクまでの基礎を講義形式で行った。最新のトピックスを交えて、放射線に関する現代の課題を整理しながら教授した。

## 83) 放射線リスク学特論

1年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明

最新の放射線リスクや線量評価に関する原著論文の抄読を課して論文の解説と、最新のトピックスを解説するスタイルで進めた。取り上げた内容は、骨盤 X 線計測に伴う被ばく線量、CT のリスクベネフィット（日独比較）、大分県の原子力災害対応と診療放射線技師の役割、汚染スクリーニングの理論と実践、小児 CT の撮影条件と DRL、画質と線量の分析法、参考レベルの課題、放射線被ばく相談の課題

#### 84) 特別研究（看護学専攻）

通年

主指導教員：影山 隆之、濱中 良志、石田 佳代子、桑野 紀子

副指導教員：吉村 匠平、藤内 美保、吉村 匠平、甲斐 博美

学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度の提出論文と指導教員は下記の通りであった。

- ・片岡 愛子：公立の高等学校・特別支援教頭における「発達障がい（AD/HD・ASD）の傾向のある教員」と関わり経験：学校種による当事者理解や障がい理解の比較
- ・田中 佳子：血液透析患者における血流音の周波数特性に関する基礎的研究
- ・山本 真由美：新人看護師の社会人基礎力と入職後の職場環境との関連
- ・吉田 智子：へき地における地域の文化を考慮した看護職の役割と求められる支援

#### 85) 課題研究（助産学）

通年

主指導教員：梅野 貴恵

副指導教員：樋口 幸、安部 真紀

下記の研究テーマの論文指導を行った。

- ・中城 紗也子：産衣への助産師の認識と産婦の快適性・医療者の利便性を考慮した産衣の改良に関する研究
- ・照井 遥：妊活の講座を受講した20～30代男女のライフプランと生殖・不妊に関する認識
- ・松井 咲樹：妊産婦の温泉入浴についての禁忌事項認知と利用頻度に関する実態調査
- ・水町 祐里：地方で出産する母親のマタニティマークの利用状況と認識

#### 86) 課題研究（広域）

通年

指導教員：吉村 匠平、関根 剛、影山 隆之

副指導教員：赤星 琴美、岩崎 りほ

学生ごとに指導教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の論文が提出された。

- ・長谷川 あすか：妊婦の体重増加に係る知識と食物摂取の関係
- ・秋田 沙也加：大分県における事件・事故及び災害発生時の保健師による地域支援  
－CRTを中心にして－

- ・大畑 江里：住民の自殺念慮と関連要因  
－こころの健康についての A 市民意識調査から－

## 87) 課題研究 (NP)

通年

指導教員：小野 美喜、福田 広美

副指導教員：小野 美喜、福田 広美、中釜 英里佳、佐伯 圭一郎

学生ごとに担当教員が研究指導を行った。今年度は上記教員の指導により以下の課題研究が提出された。

- ・樋口 マキ：老人保健施設の診療看護師 (NP) による高齢者への栄養管理に関する効果
- ・日高 美晴：高齢者の緊急入院のプロセスからみた地域密着型病院の診療看護師(NP)の役割
- ・松吉 晃子：老人保健施設における診療看護師(NP)の 糖尿病高齢者に対する血糖管理の効果
- ・森田 真純：老人保健施設における診療看護師 (NP) の褥瘡ケアに対する効果

## 88) 課題研究 (リカレント)

通年

指導教員：影山 隆之、福田 広美、藤内 美保

副指導教員：赤星 琴美、佐藤 弥生、宮内 信治

臨床や地域で活動する看護職として、履修者がそれぞれの課題について、研究に取り組み、今後の活動に繋げる成果を得た。各履修者の課題は、次のとおりであった。

- ・門林 秀弥：12 時間夜勤における仮眠の時間帯と早朝の眠気に関するシミュレーション実験
- ・淵野 万希子：機能強化型訪問看護ステーションによる地域の高齢者サロンを対象とした在宅療養に関する啓発プログラムの効果
- ・栃折 綾香：診療看護師 (NP) による腰痛麻酔管理の安全性の検討

### 3-8-2 博士（後期）課程

#### 1) 看護基礎科学演習

後期

甲斐 倫明、市瀬 孝道、安部 眞佐子、稲垣 敦、佐伯 圭一郎、影山 隆之、吉村 匠平

チュートリアル方式で、各分野の教員が課題あるいは論文を与え、レポートあるいは課題に対するプレゼンを行い討論を行うスタイルで担当教員ごとに実施した。

#### 2) 健康運動科学特別演習

後期

稲垣 敦

学位論文に関連する論文を学生および教員が選んで精読し、フォームにまとめて発表した。また、随時、修士論文の指導を実施した。

#### 3) 看護管理学特論

前期

福田 広美

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生には、自らの経験を踏まえたプレゼンテーションを課題とし文献等を活用しながら看護管理学への理解を深めた。

#### 4) 精神保健学特論、メンタルヘルス特論Ⅱ

前期

影山 隆之

実際の原著論文や文献に基づき、精神保健学研究の方法について教授した。

## 5) 生殖看護学特論

後期

林 猪都子、梅野 貴恵

「産後ケア事業」と「助産における課題と展望」について教授した。また、「現代における子どもをとりまく環境の変化」について学生がプレゼンテーションし、学生と教員間で現代の助産の現状や子どもをとりまく環境、育児支援についてディスカッションした。

## 6) 生活支援看護学特論

1 年次後期

藤内 美保、伊東 朋子、村嶋 幸代

看護の概念や機能など、看護学の発展のための研究手法を探求することを目的としている。看護実践に必要とされる理論を考察し、具体的な実践活動に還元する方法論について考察するものである。学生の博士課程のテーマと関連する領域を深められるよう、理論に基づく研究手法を多角的、広域的な観点から3名の教員がそれぞれ研究課題を課した。

## 7) 放射線健康科学特論 II

1 年次

甲斐 倫明、小嶋 光明

研究テーマに関係した最新の CT の健康リスクと線量評価に関する原著論文の抄読を課して論文の解説を行った。CT 検査を受けた小児のリンケージ研究によって白血病と脳腫瘍のリスクが被ばくによって増加することが報告され、その後、小児の CT 検査の疾患を報告した論文、英国における CT 線量の低減傾向を報告した論文などを中心に討論した。

## 8) 健康統計学特論 II

1 年次前期

佐伯 圭一郎、野津 昭文

受講者1名に対し、生物統計学の理論的基礎の習得状況を確認の後、研究テーマに対応する応用の統計手法を中心に教授した。また、R および SPSS による解析手法の実践を指導した。

## 9) 特別研究（看護学専攻）

通年

主指導教員：高野 政子

副指導教員：村嶋 幸代、佐伯 圭一郎、石田 佳代子

履修者がそれぞれの課題について、研究に取り組み、今後の活動に繋げる成果を得た。修了者の論文は、次のとおりであった。

- ・草野 淳子：乳幼児期の在宅療養児の母親が医療的ケアの技術を獲得するプロセス
- ・平井 和明：犯罪被害者の特性と受診行動に関連する要因についての研究

## 10) 特別研究（健康科学専攻）

通年

主指導教員：稲垣 敦

副指導教員：品川 佳満

履修者がそれぞれの課題について、研究に取り組み、今後の活動に繋げる成果を得た。修了者の論文は、次のとおりであった。

- ・加藤 貴志：脳損傷者の自動車運転技能評価に有効な神経心理学的検査に関する研究

### 3-9 ボランティア活動

#### 1) 富士見が丘団地「夏祭り」

宮内 信治

1年次生：井上 優香、岩男 かおり、谷 秀子、戸嶋 咲希、東 紗綾、福世 一稀、松本 実紗、宮丸 佳子、井ノ久保 朋里、大塚 奈央、河面 亜実、七村 玲奈、野尻 和、平川 みなみ、向江 南歩、吉澤 賢成、土肥 真由子、松田 佳吾、山本 真子、井坂 麻瑞美、松原 結菜、幸 日向子

富士見が丘公民館前広場で開催された富士見が丘団地「夏祭り」（7月23日-24日）で、盆踊り、各種イベント補助に参加した。

#### 2) 富士見が丘団地連合自治会「文化祭」

宮内 信治

1年次生：芦刈 咲希、川野 詩織、清原 千聖、熊井 遥、東 紗綾、松下 紗織、明松 瑞穂、宇野 つくみ、川島 俊介、徳永 萌香、富高 稜華、野尻 和、廣池 百合乃、福世 一稀、森崎 令士、柳井 祥穂

富士見が丘団地連合自治会主催の「文化祭」（11月12日-13日）で、自宅開放ギャラリーの各会場にて受付などを行った。

#### 3) 横瀬小学校夏休み算数教室採点ボランティア

宮内 信治

4年次生：井 佑美、一丸 あゆみ、井俣 美穂、國武 美希、中塚 真以

2年次生：井崎 紫帆、大嶋 花奈、高野 ほのか、西 倅平、西岡 綾乃、羽田野 朱音、藤田 華、吉木 彩佳

1年次生：釘宮 百夏、小野 日菜子、向江 南歩

横瀬小学校で開講される夏休み算数教室（8月25日-31日）において、小学4年生から6年生の算数課題の採点作業を行った。

#### 4) 第40回収穫祭

伊東 朋子

1年次生：宇野 つくみ、柳井 優希、川島 俊介、大嶋 花奈、芦刈 咲希、上村 優希、西田 瑞穂、  
西村 菜央、土肥 真由子、長島 優佳、浅尾 紗百合、荒木 菜結、明松 瑞穂、廣池 百  
合乃、竹田 百伽、徳永 萌香、松下 紗織

2年次生：加藤 瑛可、甲斐 好恵

11月5日、6日の2日間、福祉農場コロニー久住より第40回収穫祭でのボランティア活動の要請があり1、2年生19名の学生とともに参加した。今年度より収穫祭だけではなく、次世代を担う子供たちの健全な育成も目的にキンダーフェストと称して子供の職業体験や収穫体験などが同時に実施された。学生は福祉農場コロニー久住入所者との物品販売や参加者への血圧測定、ちびっこ看護師体験などに関わった。

#### 5) 第22回日本ALS協会大分県支部総会

伊東 朋子

1年次生：明松 瑞穂、後藤 ゆめ、永家 実歩、馬場 悠介、清原 千聖、児玉 百香

2年次生：加藤 瑛可、堀江 真生、榊田 志帆

3年次生：中川 穂南

4年次生：東 映里、伊東 亜由未、中西 可奈子、森崎 武司、矢野 亜紀子

第22回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどい(平成28年5月22日)に参加した。参加学生はボランティアとして、受付や司会補助、患者移動支援、患者家族制作の物品販売等に関わった。多くの学生が参加することで、支部からは大変に感謝された。また学生自身、将来看護職に就く者として患者・家族のつどいに参加することの意義や必要性も見い出していた。

#### 6) 夏休み子どもサイエンス2016

定金 香里

3年次生：天野 佑香、大島 夕奈、川野 理恵、武末 沙己、東 真由

大分大学で行われた「夏休み子どもサイエンス2016」(8月7日、共催：大分大学、本学、大分県理科・科学教育懇談会 他)に指導員として参加した。本学は、「色が変わる不思議な花」という実験テーマで、4回に分けて、小学4年生～6年生とその父兄、計92組に対し実験を行った。

## 4 学内セミナー

### 4-1 CALL 英語学習システム講座

CALL システムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月17日（日）のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

### 4-2 Adult ESS

This is a study group comprised of faculty members and office staff to practice English conversation. The study group meets twice a month.

Participants: Ryoji Hamanaka, Akifumu Notsu, Noriko Kuwano, Keiko Akimoto, Keiko Tanaka, Naho Baba, Hanako Ishikawa, Tomomi Katayama, Gerald Shirley

## 5 学内プロジェクト研究

### 5-1 NP プロジェクト

研究者 小野 美喜、村嶋 幸代、石田 佳代子、甲斐 博美、草野 淳子、佐伯 圭一郎、高野 政子、藤内 美保、濱中 良二、福田 広美、宮内 信治、森 加苗愛、生野 直子

地域包括的ケアに向けた在宅での NP（診療看護師）の活動成果に焦点を当て、訪問看護のフィールドで活動している修了生の成果を検証することを目的に一般看護師と NP（診療看護師）の訪問成果の比較検討調査を行っている。勤務施設の概要、稼働率、特定行為を必要とする事例を収集継続中である。現段階では複数の「水分・栄養管理」「創傷管理」などの特定行為事例が在宅に多数みられた。看取り事例については高い臨床推論が必要な場面が多々あり、診療看護師（NP）の能力が発揮された事例が多かった。

### 5-2 健康増進プロジェクト

研究者 稲垣 敦、濱中 良志、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、秦 さと子、巻野 雄介、田中 佳子、宿利 優子、安部 真紀、馬場 奈穂

#### 1. ショウガ成分含有ケール搾汁粉末溶解液の嚥下反射機能への影響

ケール搾汁粉末溶解液にショウガ成分を追加した場合の摂取前後の嚥下反射潜時を比較することで、嚥下反射機能改善に効果的なケール搾汁粉末溶液の摂取方法を検討する。健康な若年者 56 名（男性 11 名、女性 45 名； $21.36 \pm 0.90$  歳）を対象にケール単独+水 100ml（ケール群）、ケール+ショウガ+水 100ml（ケール+ショウガ群）、ショウガ単独+水 100ml+食紅（ショウガ群）、水 100ml+食紅（水群）の 4 群に対し、各溶液の摂取前、摂取後（直後、10 分、20 分、30 分）について、簡易嚥下誘発試験（SSPT）を用いて嚥下反射潜時（LSR）を測定し、各群の変化を比較した。各群の飲料水 100ml の摂取時間は、約 5~30 秒であった。各群内で、LSR の摂取前から摂取後 4 時点に関して LSR の平均値に差を認めなかった。しかし、ケール+ショウガ群の摂取直後においては、箱ひげ図における四分位範囲（第一四分位~第三四分位）が短縮していた。各群内で、LSR の変化に差を認めなかった原因として、100ml の液体では咽喉頭に与える刺激時間が短いこと、対象者が嚥下機能の低下の影響を受けにくい年齢であったため平均値に顕著な変化が現れなかった可能性がある。しかし、ケール+ショウガ群では摂取直後のばらつきが抑えられている傾向がみられたことから、ケール原末単独を溶解して液体摂取する場合には、ショウガ成分濃度を増加させると嚥下機能改善効果が期待できると考えられる。ケール原末を液体摂取する場合には、ショウガ成分濃度を増加させることで嚥下機能改善の可能性があることが示唆された。

#### 2. 血液透析患者におけるシャント血流音の周波数特性に関する基礎的研究

血液透析時に使用するシャントは、狭窄や閉塞が生じることが多く、医療者や患者によるシャント管理が重要である。シャント異常の早期発見のため聴診することが多いが、音の変化と血管の変化についての客観的指標はない。また、シャント血流音の周波数はその解析手法が解明されていない。そしてシャント狭窄は動脈硬化も要因だと考えられているがその関連性は明らかになっていない。そ

ここで、本研究ではシャント血流音の周波数特性について明らかにすること、シャント血流音の周波数特性とシャント狭窄度、患者の身体所見の3者の関連を明らかにすることを目的とし、調査を行った。血液透析を行っている患者20名を対象にシャント血流音、狭窄度、身体所見(脂質異常に関する血液検査値や透析期間等)を収集した。シャント血流音は、スペクトログラム、高速フーリエ変換(FFT、ハミング窓関数)、ウェーブレット変換(WT、シムレット14関数:分解レベル10)により周波数解析を行い、その特徴とシャント狭窄度と身体所見の3者についてそれぞれt検定( $p<.05$ )もしくは、ピアソンの相関係数( $p<.05$ )を求めた。20名すべてのスペクトログラムにおいて、0~約250Hz帯域までは密度が高かったことから、この帯域がシャント血流音の基本周波数だと考えられた。そして500~600Hz帯域の特徴からシャント狭窄度30%未満はパターンI、50%以上はパターンIIに分類された。FFTにおいては、第1ピーク(0~約50Hz)、第2ピーク(約200Hz)、第3ピーク(約450Hz)、第4ピーク(約550Hz)にピークを見出し、狭窄度と第2( $r=.645$ )と4( $r=.492$ )ピークで強い相関をみとめた。また第3ピークは狭窄度が低い方が音圧レベルは高いことが分かった。WTでは、その波形の特徴から狭窄度42%未満のパターンAと43%以上のパターンBに分類され、狭窄度とd6( $r=-.465$ )、d4( $r=-.652$ )で負の相関をみとめた。これらの結果は、今後の周波数解析方法の手がかりになり得ると考えられる。シャント狭窄度と身体所見では、いずれも有意な相関をみとめなかった。スペクトログラム、FFT、WTいずれにおいても、狭窄度83.1%の特徴は狭窄度が低いパターンに類似していた。以上より、FFTの第2、4ピークとWTのパターンBを組み合わせて判定すれば、狭窄度30%付近でシャント狭窄を発見することが可能となることが示唆された。

### 3. 離島住民の健康寿命とストレス：大分県姫島村について

大分県の北東部にある姫島は、南北4km、総面積6.87km<sup>2</sup>、人口2,189人、世帯数913の離島である。姫島村は高齢化率33.6%、要介護認定率は11.6%(大分県18.4%)であり、住民の健康寿命は男性76.10歳(全国70.42歳)、女性82.19歳(同73.62歳)と長い。本研究は姫島村住民の長い健康寿命の要因を探るため、ストレスについて検討した。対象者は、姫島村在住の65歳以上の男性90名(71.1±5.2歳)、女性102名(70.8±4.6歳)であり、予め文書で同意を得た。このうち姫島村在住60年以上は112名(58%)、40年以上は159名(83%)であった。対象者には平成22年11月に生活習慣等の質問紙調査を実施し、平成19年厚生労働省国民健康・栄養調査の結果と比較した。(1)ストレス：男性では60歳代で「大いにある」「多少ある」の割合が全国より有意に低く、「あまりない」が有意に高く、女性でも60歳代で「大いにある」が有意に低く、「あまりない」が有意に高かった。70歳以上では、男女とも60歳代と同様な傾向であったが有意差は認められなかった。(2)ストレス対処法：男性の70歳以上で「テレビを見たり、ラジオを聴く」が有意に低く、女性では60歳代で「趣味を楽しんだり、リラックスする時間をとる」「家族や友人に悩みを聞いてもらう」が有意に低く、70歳以上で「テレビ、ラジオ」が有意に低かった。(3)余暇の過ごし方：男性の60歳では「友人、知人と過ごす」が有意に高く、70歳でも「友人、知人」「運動する、スポーツジム、フィットネスクラブに行く」が有意に高く、「自宅でのんびりする」は有意に低かった。女性では60歳代で「買い物に出かける」が有意に低く、70歳以上では「ボランティア活動に参加する」「運動する、スポーツジム、フィットネスクラブ」が有意に高く、「習い事や資格取得に利用する」は有意に低かった。姫島村の高齢者はストレスが少なく、これが長い健康寿命に関連している可能性がある。これ

は活動的であり、ボランティア活動や友人との交流が多いことが一因と考えられる。稲垣ら(2015)は、対象者の一日の歩数が多く、身体活動時間が長く、自転車の利用頻度が多いことを報告した。また、自然環境に恵まれ、村民間の交流や互助が多く、犯罪もなく安心して生活できるという点で、物理的・化学的・情緒的・刺激自体が少ないことも一因と考えられる。

#### 4. 脳損傷者の実車運転技能に関連する神経心理学的検査について：システムティックレビューとメタ分析

脳損傷者の運転技能について神経心理学的検査(以下、検査)との関連が報告されているが、運転技能予測に有効な検査は確立されていない。今回筆者らは脳損傷者の運転技能と検査の関連を検討した研究を対象にメタ分析を実施し、運転技能予測に有効な検査と認知機能を検討した。MEDLINE、医学中央雑誌など8つのデータベースから脳損傷者に対し実車評価を実施しているなどの基準を満たした研究を抽出し、2つ以上の研究で用いられていた検査の標準化効果量・統合オッズ比を求めた。11,047文献から20文献が抽出された。このうち9検査にメタ分析を行った結果、Trail-Making Test(TMT)-A、コンパス、道路標識の効果量が高く、注意力や遂行機能など、複数の認知機能が運転技能予測に関与している可能性が示された。結果より運転技能予測に関連する認知機能について示唆が得られた、今後これらの知見をもとに、国内にて運転技能予測に有効な検査について検討を重ねていく必要がある。

#### 5. オッズに基づいた評価理論および評価基準

現場での体力の評価は5段階評価等の相対評価が多く、本質的に良いのか悪いのか、何に悪いのかもわかりにくい。この結果、現実味に欠け、行動変容につながりにくい。元来、評価は合目的的で、同じ項目、同じ測定値であっても、目的によって評価は異なる。したがって、何らかの外的基準に関連づけた評価をすべきであるという視点から、稲垣(2001)は疾病等のリスクに基づいた評価理論を提案し、実際に新しい体力評価基準を報告した。本研究では、オッズに基づいた評価理論を提案する。たとえば、ある疾病等を有する母集団および有していない母集団の「ある体力項目」と暦年齢の分布が2変量正規分布であると仮定すると、特定の暦年齢、特定の体力測定値を有する個人のオッズを求めることができ、このオッズの値で体力をその疾病等に関連づけて評価できる。また、5段階評価をする場合は、あらかじめ暦年齢と体力が張る平面に特定のオッズの値を示す曲線を引き、これを評価カテゴリーの境界線とすれば、年齢を考慮した絶対評価ができる。この境界を見つける問題は、その体力測定値の二次方程式を解くことに帰着する。

#### 6. 体育・スポーツ科学で生まれた数理モデルや解析法(4)：ファジィ多変量解析

科学の各分野では、研究対象となる現象に合った数理モデルや解析法が提案され、独自の発展を遂げて来た。その過程で計量経済学や計量心理学等のように一つの学問領域として独立し、学会が設立されるまでに至った。体育・スポーツ科学においては日本体育測定評価学会が、そして日本体育学会においては測定評価専門領域がこれに相当する。Zadeh(1965)から始まったファジィ理論は、研究および実用化の点で日本が世界を牽引している分野の一つであり、既にほとんどの電子機器がファジィ理論を応用しているのが現状である。体育・スポーツ科学では体力評価等での応用が提案されて

きたが、他分野と比較すると活用が遅れている。稲垣は動作の意識やイメージの研究の経験から、ファジィ重判別分析・ファジィ数量化理論Ⅱ類（1997）、ファジィ主成分分析・ファジィ数量化理論Ⅲ類（2000）、ファジィ時系列分析（2002）等のファジィ多変量解析を開発した。これらは、クリスプ集合であるカテゴリーをファジィ集合に一般化したものである。本研究では、オリジナルの方法との差異を明らかにし、体育・スポーツ科学における応用可能性について考察した。

### 5-3 予防的家庭訪問実習プロジェクト

研究者 影山 隆之、藤内 美保、福田 広美、小野 美喜、川崎 涼子、稲垣 敦、宮内 信治、岩崎 りほ、杉本 圭以子、定金 香里、巻野 雄介、山田 貴子、村嶋 幸代

本プロジェクトは、文部科学省地（知）の拠点整備事業として採択されている「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」の計画・実行・評価を担っているが、授業科目としての実習については別項で記載し、本項では事業評価のための研究について報告する。本年度は、予防的家庭訪問実習前年度から開始した、協力者 80 名及び対照群約 200 名の健康・生活等に関するデータ収集と蓄積を継続した。主な作業は、看護研究交流センタースタッフが核となり、これに本プロジェクトメンバー、卒業研究学生とボランティア学生が参加して、実施した。

実習協力者のデータについては、学生の訪問実習で収集できなかった情報を、看護研究交流センタースタッフ等による年度末訪問で補充した。対照群については、10 会場で実施した地域交流会の際に、問診・血圧測定・体力測定等を実施した。学生レポートについては、主として看護研究交流センタースタッフが分析した。

これらの分析結果、及び学生レポートの分析結果の一部を、米国西部看護協会学会（4 月）及び第 75 回日本公衆衛生学会（10 月）で発表し、さらに学術雑誌に投稿する準備を進めた。米国での学会では、community health nursing の専門家と討論し、事業の効果測定等について情報を収集した。実習の概要を、日本公衆衛生学会の出展及び「看護展望」誌への投稿によりで発表した。コロラド大学名誉教授 Magilvy 博士を招聘し（11 月）、本実習の学生訪問同行、地域関係者インタビュー等とともに、本実習と研究的分析についてコンサルテーションを受けた。

## 6 先端研究

### 6-1 鉄濃度による骨細胞機能変化

研究者 岩崎 香子、末延 里沙

慢性腎臓病（Chronic kidney disease: CKD）の主な合併症である腎性貧血には相対的鉄欠乏状態が存在し、鉄欠乏状態は心血管イベント発生数を増加させることが報告されている。一方、CKD患者には骨ミネラル代謝異常（chronic kidney disease related mineral bone disorder: CKD-MBD）も存在し、この病態の進行も心血管イベント発生を増加させる。最近、動物実験や鉄剤を投与した臨床研究において、血中鉄濃度が変化すると、同時に血中リン濃度が変動することという結果が散見されるようになった。これらの報告から鉄濃度低下がCKD-MBD発症に関与する可能性が考えられるが、その機序についての基礎検討はほとんど行われていない。そこで本研究ではリン代謝調節ホルモンの産生臓器である骨細胞を解析対象とし、鉄濃度が骨細胞を介してCKD-MBDの発症・進展に関与するか否かを明らかにすることとした。培地中の鉄濃度を低下させると培養骨細胞のSOST,FGF23といった機能遺伝子発現が増加した。細胞内鉄濃度調節に関与するトランスフェリン受容体ならびにferroportin遺伝子発現にも変化がみられた。合わせて細胞生存率が低下することも確認された。これらの結果から低鉄濃度環境では細胞内鉄濃度維持機構に変化がみられ、骨芽細胞機能を抑制するSOST,FGF23遺伝子発現が亢進すると考えられた。また鉄濃度低下は骨細胞数の減少を引き起こし、骨代謝異常の発症に関与する可能性が考えられた。今後これらの機序に関する詳細な検討が必要である。

### 6-2 保健師教育における技術項目と卒業時到達度調査（第2報） —大学院修士課程コース、学部保健師選択制コース、学部保看統合コースの違い—

研究者 赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子（地域看護学研究室）、岩崎 りほ（看護研究交流センター）、村嶋 幸代

平成21年度に保健師助産師看護師法が改正され、保健師の教育年限が6か月から1年間に延長、指定規則も改定され、保健師教育も変化の時期に来ている。現在は、大学院修士課程で保健師教育を実施している大学（修士課程コース）、学士課程である学部の保看統合カリキュラムで保健師教育を実施している大学（保看統合コース）と学部の保健師教育に選択制を導入し一部の学生にのみ保健師教育を実施している大学（保健師選択コース）とがある。本研究では、教育課程別に実習前および実習後での学生の到達度を明らかにすることを目的とした。修士課程コース1大学9名（以下修士課程）、保看統合コース5大学357名（以下保看統合）、保健師選択コース6大学204名（以下選択制）の計561名を対象に、実習前の時期である2014年6月（保看統合・選択制）および2016年5月（修士課程）に、更に、実習後の時期である2016年1月（保看統合・選択制）および2017年1月（修士課程）に無記名自記式質問紙調査を実施した。実習前後に卒業時到達度の到達度得点をツールとして用いて比較した結果、到達度レベルの自己評価度は大学院修士課程および保看統合大学・保健師選択大学の間有意な差が見られた。保看統合大学・保健師選択大学は大学院修士課程大学よりすべての大項目に関して到達度レベルを高く回答している者が多く、表面的な理解により自己評価が高

かった。専門的に学んだ学生の方が低い点であり、これは使用したツールが学部教育の講義・実習の教育内容を反映しているため、保看統合や学部選択制の学生の方が馴染みやすく回答しやすく、修士課程の到達度として正しく測定できていないのではないかと考える。あるいは、修士課程教育により教員の学生に求めるレベルは高くなり、そのため、大学院修士課程大学の学生は自己評価が低くなったとも考えられる。養成コースによって修了時の到達度レベルに差があることは、国家試験である保健師の基礎教育としては望ましくない。今後保健師の質をよりよく揃えることが求められる。

### 6-3 カロリー制限が放射線照射したマウス造血幹細胞の細胞動態に与える影響

研究者 小嶋 光明

カロリー制限が放射線誘発急性骨髄性白血病 (rAML) の発症率を抑制することが報告されている。しかし、この抑制メカニズムは明らかではない。これまでの研究で、rAML を発症した C3H マウスでは 2 番染色体上の Sfp1/PU.1 遺伝子に点突然変異が生じていることが報告されている。本研究では、放射線が Sfp1/PU.1 遺伝子に点突然変異を生成するメカニズムとして次のような仮説を立てた。マウスの全身に放射線を照射すると、放射線感受性が非常に高い末梢血の細胞数が著しく減少する。大腿骨内の造血幹細胞 (LSK 細胞) は失った末梢血の細胞を補うために過度な細胞分裂を開始する。これにより DNA 複製ストレスがかかり、点突然変異が生じやすくなる。よって、放射線による LSK 細胞の細胞動態の変化が Sfp1/PU.1 遺伝子に点突然変異を引き起こす原因になると考えた。そこで、本研究ではカロリー制限が放射線照射後の LSK 細胞の細胞動態にどのような影響を与えるのか明らかにすることを目的として、7 週齢の C3H マウス (雄) に 95 kcal/週 (非カロリー制限群) または 65 kcal/週 (カロリー制限群) になるように餌の量を調整して飼育した。飼育を開始してから 1 週間後に両群に 3 Gy の X 線を全身に照射し、7 日目、30 日目、140 日目、280 日目に大腿骨から LSK 細胞 (Lin<sup>-</sup>, sca-1<sup>+</sup>, c-kit<sup>+</sup>) を単離し、細胞数、細胞増殖能、Sfp1/PU.1 遺伝子の機能異常をそれぞれ調べた。その結果、非カロリー制限群に放射線を照射すると細胞増殖をしている細胞の割合が照射後 280 日経っても有意に高いことが分かった。この結果は、非カロリー制限群では放射線照射後 DNA 複製ストレスが長期間かかっていることを意味している。しかし、この現象はカロリー制限群では見られなかった。よって、カロリー制限をしながら放射線を照射すると LSK 細胞に DNA 複製ストレスがかからないため、rAML の発症の抑制につながるのではないかと考えられた。

### 6-4 複数評価者データに対する回帰分析の適用

研究者 野津 昭文、石川 勝彦

アイススケートの採点データにみられるように、複数の評価者が同一のパフォーマンスを評価した際に得られるデータは複数評価者データと呼ばれる。一般に複数評価者データは様々なテスト理論を用いて評価の信頼性を分析することが可能であるが、被評価者や評価者の背景や特性などがどのようにパフォーマンスと関連するかが分析できなければ、ティーチングやコーチングにつなげることができない。そこで本研究では、複数評価者データに対し回帰分析の適用を行った。具体的には、小論文採点データを収集したうえで、学生の特性や評価者である教員の特性が、評価スコアにど

のように関連しているかを、回帰分析を用いて分析した。分析の結果、評価者の甘さ辛さ、評価スコアに影響を与える学生の背景情報の特定とその影響力の安定性に関する情報が得られることが示唆された。

## 7 奨励研究

### 7-1 助産師学生への超音波診断装置を用いた教育に関する調査研究

研究者 安部 真紀、梅野 貴恵、樋口 幸

本研究は、全国の助産師教育における超音波診断装置を用いた教育の現状と課題を明らかにすることを目的とし、全国の助産師養成学校 184 校の助産師教育養成責任者を対象に質問紙調査を行った。回収数 88 部のうち、無効回答を除く 87 部（有効回答率 47.3%）より回答を得た。調査内容は、超音波診断装置を用いた教育内容（教育時間、講義・演習内容、使用教材、講義・演習・実習の到達度設定、指導者）である。

全体の 72%にあたる 63 校で超音波診断装置を用いた教育を行っていたが、演習の実施は 49 校（56.3%）、実習に関しては 27 校（31%）の実施に留まっていた。技術テストは 2 校（0.2%）のみで大学院及び大学専攻科のみの実施であった。理由としては、教材（妊婦）の確保、時間の確保、指導者の確保が難しい要因が挙げられ、助産師教育における超音波診断装置の教育方針にはさまざまな認識が存在し、実践場面で必要となる性状逸脱判断時の対処や、実践を通じた判断や対処の教育に至っていなかった。今後医師と連携・強化し多様なニーズを持つ妊産婦に、より良い助産ケアを提供できる助産師教育には卒後教育の体制を整える必要性が課題として明らかになった。

### 7-2 精神科デイケアにおける精神障害者のリハビリ支援に関する研究—IMR の導入と実施

研究者 杉本 圭以子、影山 隆之

精神障害者の地域生活支援には、薬物療法と合わせて効果的な心理社会的プログラムの提供が重要である。IMR（Illness Management and Recovery：疾患管理とリハビリ）プログラムは専門的技法を使い、精神障害者が疾患とうまく付き合っていくための知識や技術を週一回のセッションで 6 か月から 1 年かけて学ぶようマニュアル化されている。統合失調症患者の症状改善などの効果が報告されているが、日本における IMR 普及は始まったばかりでプログラム実施や効果の報告は少ない。

本研究では、デイケアを利用する精神障害者が IMR に参加することによるリハビリの度合い、社会生活の質や満足感への影響を調査する。また、IMR 実施による精神科病院医療職者のリハビリ志向への影響を調査する。

IMR プログラムの効果として、IMR 参加者と未参加者に対して IMR 前後に本人が感じる社会生活の質と満足感の変化、リハビリゴールに向けての行動の変化を質問紙調査する。デイケアスタッフによる IMR 前後の社会生活技能評価と合わせて効果を評価する。

平成 28 年度、大分県内の 2 つの精神科病院デイケアで IMR が開始され、実施前のデータを取得したところである。今後 IMR 終了後のデータを取得し調査分析の予定である。

### 7-3 我が国の院内トリアージの現状と今後の課題—諸外国の報告と比較して—

研究者 石丸 智子

院内トリアージを行う際の判断基準の指標として、1990年代よりカナダでは救急外来での救急外来患者緊急度判定システム・CTAS (Canadian Triage & Acuity Scale) が開発・運用されている。また、院内トリアージによる判定の結果が、実際の病状と合致したものであったかを評価する事後検証が、その質の向上のために必要不可欠であるとされている。特に優先順位をつける際に実際の症状よりも軽症として判定を低くしてしまうアンダートリアージは、患者の予後を左右するため、その発生を減少させることが重要であると考えられている。我が国でのアンダートリアージの発生率は施設毎での調査が散見されるのみである。本研究では、全国の院内トリアージの取り組みの現状と、アンダートリアージの発生率について明らかにすることを目的とする。

日本看護協会ホームページに記載されている救急看護認定看護師が所属する 573 病院に対し自記式質問紙を用いた調査を依頼した。

573 施設中、有効回答は 179 施設 (有効回答率 32.2%) であった。院内トリアージ実施「有」施設は、173 施設中 137 施設 (76.5%) であり、その中でも「日本版救急患者緊急度判定支援システム (Japan Triage and Acuity Scale: 以後 JTAS) を使用している施設は 137 施設中 87 施設 (63.5%) であった。

また、先行研究の報告ではアンダートリアージ率は 0.28%~15.2%と施設ごとに異なっており単純に比較ができないが、回答のあった 54 病院のアンダートリアージ率は 0%~29.0%と幅広く、全体のアンダートリアージ率は 2.1%であった。アンダートリアージの発生要因としては、89 施設から回答 (複数回答可) があり、「疾病の評価不足 (64)」、「バイタルサインの評価不足 (56)」、「問診不足 (54)」、「痛みの評価不足 (35)」の順で多かった。今後は本調査の結果を諸外国との調査報告と比較、検討する予定である。

### 7-4 自殺対策におけるゲートキーパーの経験と、その後の自殺に対する思いの変化について

研究者 後藤 成人

自殺対策におけるゲートキーパー (以下 GK) は、地域の自殺念慮者を支援する人々であり、各自治体で多くの GK が活躍している。しかし、GK としての経験がその後の自殺に対する思いにどのように影響を与えたかは明確でない。そこで今回は、GK としての経験年数と自殺観や自殺対策への考え方、介入スキル (SIRI) の違いを検討した。対象者は、大分県 A 市で GK をしている 105 名であり、郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、厚労省の調査や先行研究を参考に独自作成し、GK としての経験年数 (2 年以上か 2 年未満か)、自殺観や自殺対策への考え方、自殺の危機介入スキル尺度 (SIRI) を含んだ。

結果、39 名 (37.1%) から回答が得られた。GK としての経験年数が 2 年以上の人が 14 名 (35.9%) で、そのうちの 10 名 (71.4%) は、自殺念慮者の対応を行ったことがあった。経験年数が 2 年以上と 2 年未満の 2 群で、自殺観や自殺対策への考え方に差はなかった。SIRI の“妻が四年前に亡くなってから私は生きる意味を見失ってしまいました。子供たちは、今はもう成長し、結婚していて、私は会社を退職してしばらく経ちます。なんだか死んだ方がましなような気がするんです。”という訴え

に、“でも、考えてみてください。奥様はあなたにどうしてほしいと思うのでしょうか。あなたに生産的な人生を送り続けてほしいと思うのではないのでしょうか？”と答える項目と、“私は本当に父親を憎んでいるんです！父は私に一度も愛情を示してくれたことはありませんし、いつも完全に無視されています。”という訴えに“あなたがもっとも必要としている時に父親が側にいなかったことに対して、あなたはとても怒りを感じるのでしょうかね。”と答える項目の2つに差があった。以上のことから、GKとしての経験年数が増えるにつれ、様々な事例に出会う機会が増し、より専門家に近い介入ができるようになる可能性があることが明らかとなった。

## 7-5 外国人患者ケアに関する看護職者向け研修プログラムの効果

研究者 桑野 紀子

本研究では、O 県の病院に勤務する看護師の外国人患者に対する態度、経験、および文化的感受性について現状を調査し（調査1）、外国人患者ケアに関する看護職者向け研修の実施・効果検証を行い（調査2）、その結果をふまえて、より実情に即した効果的な研修プログラムを策定することを目的とした。研修の実施については2施設から内諾を得て計画中である。調査1では、外国人患者のケアに関する経験について、十分ケアできたという満足を得られず、コミュニケーションにも満足しなかった対象者が多かった。また今回の ISS 得点は、全国調査を行った先行研究と同等の点数であり（桑野 2015）、ISS について O 県の看護師が平均的であることが示唆された。今後外国人患者の増加は必然の流れであるが、それに対応するための研修を実施している病院は全国的にみても数施設のみである。研修へのニーズは増していると推察されるため、引き続き O 県での研修実施・効果測定、および全国の病院施設に提案できる研修プログラムの策定に取り組みたい。

## 7-6 血液透析患者におけるシャント血流音の周波数特性に関する基礎的研究

研究者 田中 佳子

血液透析時に使用するシャントは、狭窄や閉塞が生じることが多く、医療者や患者によるシャント管理が重要である。シャント異常の早期発見のため聴診することが多いが、音の変化と血管の変化についての客観的指標はない。また、シャント血流音の周波数はその解析手法が解明されていない。そしてシャント狭窄は動脈硬化も要因だと考えられているがその関連性は明らかになっていない。そこで、本研究ではシャント血流音の周波数特性について明らかにすること、シャント血流音の周波数特性とシャント狭窄度、患者の身体所見の3者の関連を明らかにすることを目的とし、調査を行った。

血液透析を行っている患者 20 名を対象にシャント血流音、狭窄度、身体所見(脂質異常に関する血液検査値や透析期間等)を収集した。シャント血流音は、スペクトログラム、高速フーリエ変換(FFT、ハミング窓関数)、ウェーブレット変換(WT、シムレット 14 関数:分解レベル 10)により周波数解析を行い、その特徴とシャント狭窄度と身体所見の3者についてそれぞれ t 検定( $p<.05$ )もしくは、ピアソンの相関係数( $p<.05$ )を求めた。

20 名すべてのスペクトログラムにおいて、0～約 250Hz 帯域までは密度が高かったことから、こ

の帯域がシャント血流音の基本周波数だと考えられた。そして 500～600Hz 帯域の特徴からシャント狭窄度 30%未満はパターンⅠ、50%以上はパターンⅡに分類された。FFT においては、第1ピーク(0～約 50Hz)、第2ピーク(約 200Hz)、第3ピーク(約 450Hz)、第4ピーク(約 550Hz)にピークを見出し、狭窄度と第2( $r=.645$ )と4( $r=.492$ )ピークで強い相関をみとめた。また第3ピークは狭窄度が低い方が音圧レベルは高いことが分かった。WT では、その波形の特徴から狭窄度 42%未満のパターン A と 43%以上のパターン B に分類され、狭窄度と  $d6(r=-.465)$ 、 $d4(r=-.652)$  で負の相関をみとめた。これらの結果は、今後の周波数解析方法の手がかりになり得ると考えられる。シャント狭窄度と身体所見では、いずれも有意な相関をみとめなかった。スペクトログラム、FFT、WT いずれにおいても、狭窄度 83.1%の特徴は狭窄度が低いパターンに類似していた。以上より、FFT の第2、4ピークと WT のパターン B を組み合わせて判定すれば、狭窄度 30% 付近でシャント狭窄を発見することが可能となることが示唆された。

## 7-7 予防的訪問看護実習における学生の学びの内容および学年間の学び合いの様相

研究者 平井 和明、岩崎 りほ、野津 昭文、川崎 涼子

本研究の目的は、縦割りチーム構成という他に類を見ない形態で取り組まれている予防的家庭訪問実習における学生の学びの内容を整理することである。分析対象は、予防的家庭訪問実習終了後に、全学生が提出した最終レポート。収集したデータは、質的帰納的分析及び計量テキスト分析を行った。

質的分析は平成 27 年度の 1 年分を対象に分析を行い、その結果、学年間の知的体験は、少なくとも次の 10 つのカテゴリ、24 サブカテゴリに整理された。全学年共通する体験は、7 つのカテゴリに整理されており、「チームワーク」、「認識の多様性」、「先輩・後輩からの学び」、「学習へのモチベーション」、「人間関係の構築の契機」、「共有・協力の大切さ」、「成長の自覚」だった。その中でも、学年特有の体験に関しては、3 年次生の「立場変換」、4 年次生の「自己認識の契機」が整理された。

また、計量テキスト分析では、平成 27 年度及び平成 28 年度の 2 年分を分析した結果、全学年 2 年分の最終レポートのテキストデータは、文章数 13702、総抽出語数 378477 語、分析対象語数 145159 語であり、異なり語数 5442 語、分析対象異なり語数 4751 語であった。学生の学びの様相を整理するために、「学び」「学ぶ」「学習」の 3 語（抽出語上位 150 語に出現した語）を「学び」とコーディングワードを設定し、その語を中心とした共起ネットワークを描写したところ、「生活」「健康」「情報」「聞く」「訪問」「大切」というそれぞれ 6 つの語が、学生の学びと強い共起関係にある事が分かった。これらの結果から、学生は予防的家庭訪問実習をとおして、学年特有の学びだけでなく、学年を超えて共通した学びをしていることが明らかになった。

## 7-8 市町村保健師の職業的アイデンティティの構造

研究者 岩崎 りほ、蔭山 正子、永田 智子

本研究では、市町村保健師が感じる職業的アイデンティティの構造を明らかにすることを目的とした。グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく質的研究とし、首都圏の市町村に1年以上勤務する保健師25名に平成25年7月から翌年11月に半構造化インタビューを実施した（平成28年は大分県内）。インタビューでは、「どのような時に保健師であると感じるか」、「どのような時に保健師の職業に合っていると感じるか」について尋ねた。東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理審査委員会の承認を得た。

分析の結果、《直接的な対人支援をするのが保健師》、《行政組織の中で働くのが保健師》、《よりよい地域づくりのために活動するのが保健師》が抽出された。アイデンティティが前面に出る様態は個人によって異なっていた。同一保健師でも、時期によって前面に出るアイデンティティが異なり、また前面に出ている場合でも、安定と揺らぎの両方向があった。これらのアイデンティティ間は共存していたが、《行政組織の中で働くのが保健師》と他二つのアイデンティティの間に葛藤が確認された。葛藤を感じていた者は悶々として居心地の悪さを感じていた。

保健師は、直接住民の相談等が持ち込まれる立場であると同時に、行政という組織の中で順守する役割やルールも多い。これらの二重の職業的役割に挟まれているために、アイデンティティ間に葛藤を生じていることが概念レベルで確認された。また、《直接的な対人支援をするのが保健師》の立場では＜行政の管理職になると保健師でなくなる＞と捉えているのに 対して、《行政組織の中で働くのが保健師》の立場では＜行政の管理職に変身する＞と捉えており、両義的な性質を持つことが確認され、この両義性が保健師の職業的アイデンティティを複雑にしている一因であると示唆された。

## 8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

「看護科学研究」14巻2号（2016年8月）、14巻3号（2016年12月）が刊行された。

### 第14巻2号 目次

#### 資料

「臨地実習における看護学生の内省傾向 - ポートフォリオ導入後の成長報告書の内容分析から - 」  
李 慧瑛、深田 あきみ、新橋 澄子、横山 美江、橋本 智美、下高原 理恵、西本 大策、緒方 重光

<企画> 「大分県立看護科学大学 第16回看護国際フォーラム」

‘NP activities in the United States: Practice and research’

Jamesetta A. Newland

‘The current situation of nurse practitioner education focusing on clinical practicums in Korea’

Jae Sim Jeong

### 第14巻3号 目次

#### 総説

「妊産婦のレストレスレッグス症候群/Willis-Ekbom 病」  
近藤 英明、加藤 千穂、江藤 宏美

「産褥期における精油を付加した足浴の効果に関するシステマティックレビュー」  
小川 千晶、白石 三恵、安井 まどか、岩本 麻希、島田 三恵子

#### 研究報告

「日本人のハイリスク妊娠におけるレストレスレッグス症候群/Willis-Ekbom 病の有病率、臨床像及び分娩アウトカム」  
坂本 遥、加藤 千穂、江藤 宏美、近藤 英明

## 9 業績

### 著書

小野 美喜：プライマリ・ケア看護学 基礎編, 南山堂, 2016

影山 隆之、小林 敏生：心の健康を支える「ストレス」との向き合い方 BSCPによるコーピング特性  
評価から見えること, 金剛出版, 2016

高野 政子：プライマリ・ケア看護学 基礎編 一部分担, 株式会社 南山堂, 2016

Myoung Ae Choe : Clinical Application of Pathophysiology and Pathology for the Health Professions, Elsevier  
Korea L.L.C, 2016

藤内 美保：日本プライマリ・ケア連合学会 プライマリ・ケア看護学（基礎編）, 南山堂, 2016

Eguchi S., Notsu A., and Komori O. : Spontaneous Learning for Data Distributions via Minimum Divergence.  
Chapter, Computational Information Geometry, Part of the series Signals and Communication Technology,  
Springer International Publishing AG, 2017

福田 広美：日本プライマリ・ケア連合学会プライマリ・ケア看護学 基礎編, 南山堂, 2016

平野 互他：新版 患者の権利オンブズマン勧告集 最新事例で検証する患者の権利の現状（患者の  
権利オンブズマン全国委員会篇）, 明石書店, 2017

村嶋幸代：日本プライマリ・ケア連合学会 プライマリ・ケア看護学（基礎編）, 南山堂, 2016

井伊 久美子、荒木田 美香子、松本 珠美、堀井 とよみ、村嶋 幸代、平野 かよ子.（編集・分担執筆）：  
保健師業務要覧第3版 2017年版, 日本看護協会出版会, 2017

森 加苗愛：特集「こころに残る楽しい糖尿病教室・教育」看護の視点からチーム医療を考える 日本糖  
尿病協会機関紙第24号6(1), (株)日経メディカル開発, 2017

## 研究論文

赤星 琴美：就業女性（フルタイムおよびパートタイム）および主婦のがん予防に対する認識とがん検診受診行動に関する調査, 看護展望, 41(5), 79-83, 2016

赤星 琴美、佐藤 愛、佐伯 圭一郎：保健師による保健指導を通して把握した地域住民の疾病、服薬に対する認識の実態, 保健の科学, 58(5), 351-356, 2016

赤星 琴美、武石 綾美、佐伯 圭一郎：就業女性（フルタイムおよびパートタイム）および主婦のがん予防に対する認識とがん検診受診行動に関する調査, 看護展望, 41(5), 503-507, 2016

赤星 琴美、甲斐 倫明：Multiple logistic regression analysis on the health checkup data and the lifestyle habits of medicated residents: A population-based cohort study, JCPHN Journal of Community & Public Health Nursing, 2 (132) , 100132, 2016

赤星 琴美、佐伯 圭一郎：保健師による保健指導を通して把握した地域住民の疾病、服薬に対する認識の実態, 保健の科学, 58 (5), 351-356, 2016

石田 佳代子：災害現場で黒タグ者に対応する看護師に必要とされる能力—DMAT 看護師を対象とした質問紙調査より—, 日本災害看護学会誌, 17 (3), 3-13, 2016

石丸 智子：救急外来部門における看護師のマネジメント能力：自己評価と他者評価の比較, 日本精神衛生学会誌「こころの健康」, 3 11), 64-70, 2016

石丸 智子：救急外来部門における看護師のマネジメント能力測定尺度の開発, 日本救急看護学会雑誌, 19 (1), 33-41, 2017

He M., Ichinose T., Liu B., Song Y., Yoshida Y., Kobayashi F., Maki T., Yoshida S., Nishikawa M., Takano H., Sun G. : Silica-carrying particulate matter enhances Bjerkandera adusta-induced murine lung eosinophilia, Environ Toxicol, 31(1), 93-105, 2016

He M., Ichinose T., Yoshida S., Shiba F., Arashidani K., Takano H., Sun G., Shibamoto T. : Differences in allergic inflammatory responses in murine lungs: Comparison of PM2.5 and coarse PM collected during the hazy events in a Chinese city, Inhal Toxicol, 28(14), 706-718, 2016

He M., Ichinose T., Yoshida S., Takano H., Nishikawa M., Shibamoto T., Sun G. : Exposure to bisphenol A enhanced lung eosinophilia in adult male mice., Allergy Asthma Clin Immunol, 12, 16, 2016

Bekki K., Ito T., Yoshida Y., He C., Arashidani K., He M., Sun G., Zeng Y., Sone H., Kunugita N., Ichinose T. : PM2.5 collected in China causes inflammatory and oxidative stress responses in macrophages through the multiple pathways, *Environ Toxicol Pharmacol*, 45, 362-369, 2016

Yanagisawa R., Koike E., Win-Shwe TT., Ichinose T., Takano H. : Low-dose benzo[a]pyrene aggravates allergic airway inflammation in mice., *J Appl Toxicol.*, 36(11), 1496-1504, 2016

加藤 貴志、岸本 周作、井野辺 純一、稲垣 敦：脳損傷者の実車運転技能に関連する神経心理学的検査について：システマティックレビューとメタ分析，*総合リハビリテーション*，44，1087-1095，2016

加藤 貴志、末綱 隆史、山崎 理絵、久保田 直文、井野辺 純一、稲垣 敦：脳損傷者の運転技能に関与する認知機能について，*日本臨床作業療法研究*，3，33-38，2016

梅野 貴恵、角沖 久夫、軽部 薫：40～50歳代有経女性の授乳経験と脂質代謝・動脈硬化や更年期症状との関連－授乳婦と非授乳婦－，*日本女性医学学会雑誌*，23(2)，154-160，2016

前村 あゆみ、梅野 貴恵：死産の介助を経験した助産師の心理受容過程，*PERINATAL CARE*，473，89-94，2017

Ojima M., Iwashita K., Kashino G., Kobashigawa S., Sasano N., Takeshita A., Ban N., Kai M. : Early and delayed induction of DBSs by nontargeted effects in ICR mouse lymphocytes afer in vivo X irradiation., *Radiat Res.* , 186, 65-70, 2016

麻原 きよみ、三森 寧子、八尋 道子、小西 恵美子、百瀬 由美子、小野 美喜、安藤 広子：看護研究の倫理審査に関する考察：アメリカ合衆国の事例を踏まえて，*日本看護科学学会誌*，36，80-84，2016

玉山 清美、小野 美喜：整形外科疾患をもつ高齢者に対する身体抑制開始時の判断要件，*日本看護倫理学会誌*，9(1)，31-37，2017

Wardaningsih S., Kageyama T. : Perception of community health workers in Indonesia toward patients with mental disorders, *International Journal of Public Health Science*, 5(1), 27-35, 2016

西田 隆宏、川崎 涼子、西原 三佳、本田 純久：地域在住の二次予防プログラム参加者における運動機能と認知機能の変化，*保健学研究*，28，77-83，2016

中尾 理恵子、井口 茂、田中 浩二、川崎 涼子、中根 秀之：福島県川内村における「健康サポーター」育成が帰村後の地域活動に与えた影響，*保健学研究*，28，21-28，2016

- 草野 淳子: 医療的ケアが必要な在宅療養児の母親の技術習得に関する文献検討, 母性衛生, 57 (2) , 2016
- 草野 淳子: 在宅療養児の母親が子育ての喜びを感じるまでのプロセス, 母性衛生, 57 (4) , 2017
- 草野 淳子、高野 政子: 在宅療養児の母親が医療的ケアを実践するプロセス, 日本小児看護学会誌, 25(2), 24-30, 2016
- Doba N, Tokuda Y, Saiki K, Kushiro T, Hirano M, Matsubara Y, Hinohara S. : Assessment of Self-Efficacy and its Relationship with Frailty in the Elderly., *Internal Medicine*, 55(19), 2785-2792, 2016
- Sadakane K., Ichinose T., Nishikawa M., Takano H., and Shibamoto T. : Co-exposure to zymosan A and heat-inactivated Asian sand dust exacerbates ovalbumin-induced murine lung eosinophilia., *Allergy Asthma Clin Immunol.*, 12(48), 10.1186/s13223-016-0153-x., 2016
- 秦 さと子、末崎 夏帆: 防水性マットレスカバーに対するずれにくいシート作成法の検討, 日本看護技術学会誌, 15(3), 276-280, 2017
- 杉本 圭以子: 救命救急センター看護師の自殺リスク評価に影響を与える要因: 質問紙調査による分析, 日本臨床救急医学会雑誌, 19(3), 480-488, 2016
- 高野 政子: 特別支援学校における看護師と養護教諭の医療的ケアの実態と連携, 育療, 59, 8-15, 2016
- 長谷川 健美、高野 政子、市瀬 孝道: 在宅における終末期患者の死亡確認の現状と特定看護師の役割 - 訪問看護師のインタビューから -, 看護科学研究, 14, 1-10, 2016
- Hijiya N, Shibata T, Daa T, Hamanaka R, Uchida T, Matsuura K, Tsukamoto Y, Nakada C, Iha H, Inomata M, Moriyama M. : Overexpression of cannabinoid receptor 1 in esophageal squamous cell carcinoma is correlated with metastasis to lymph nodes and distant organs, and poor prognosis. , *Pathol Int.*, 67, 83-90, 2017
- 樋口 幸: 生後1か月児の皮膚状態と母親の認識との比較研究, 母性衛生, 57 (4), 2017
- 工藤 瞳子、巻野 雄介: 看護師が実施する末梢静脈カテーテル留置における静脈穿刺の不成功に関わる要因, 看護理工学会誌, 4(2), 2017
- Eto M., Miyauchi S. : Falls after Ophthalmological Surgery Experience among the Community-dwelling Elderly in Japan, *Journal of Community Health Nursing*, 34/1, 1-9, 2017

Tanaka C., Naruse T., Taguchi A., Nagata S., Arimoto A, Ohashi Y., and Murashima S. : Conformity to the neighborhood modifies the association between recreational walking and social norms among middle-aged Japanese people. *Japan Journal of Nursing Science*.13, 451-465, 2016

岩本 里織、岡本 玲子、小出 恵子、西田 真寿美、生田 由加利、鈴木 るり子、野村 美千江、酒井 陽子、岸 恵美子、城島 哲子、草野 恵美子、齋藤 美紀、寺本 千恵、村嶋 幸代：「東日本大震災により被災した自治体職員の被災半年後の語りに見られた身体的精神的健康に影響する苦悩を生じた状況」*日本公衆衛生看護学会誌*, 4(1), 21-31. 2017

**日本公衆衛生看護学会学術奨励賞(優秀論文部門)**

鈴木 良美、岡本 玲子、野村 美千江、村嶋 幸代：行政保健師の現任教育に関する保健師教育機関の関わりの特徴－研修に着目した国公立と私立大学による関わりと比較－, *保健師ジャーナル*, 72(10), 866-872, 2016

大橋 由基、新村 津代子、有本 梓、渡井 いずみ、成瀬 昂、田口 敦子、永田 智子、村嶋 幸代：修士課程保健師コースにおける生活習慣病予防を目的とした地域診断・活動展開実習の事例－山間部の高塩分食・喫茶店のモーニング文化と保健師活動－, *保健師ジャーナル*, 72(11), 946-952, 2016

森 加苗愛：慢性疾患とともにある男性のセクシュアリティの看護ケアに関する文献研究, *日本性科学会雑誌*, 34(1), 43-55, 2016

山田 貴子、藤内 美保：早期退職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス, *日本看護研究学会雑誌*, 38 (5), 41-51, 2016

高比良 祥子、吉田 恵理子、片穂野 邦子、松本 幸子、山田 貴子：看護学生が抱く手術直後患者の観察における困難感と対処, *日本看護研究学会雑誌*, 39 (4), 115-124, 2017

Yoshida S., Ichinose T., Arashidani K., He M., Takano H., Shibamoto T. : Effects of Fetal Exposure to Asian Sand Dust on Development and Reproduction in Male Offspring., *Int. J. Environ. Res. Public Health*, 13, 1173, 2016

光武 智美、吉村 匠平、森田 慶子：発達障害児・者の家庭での性教育の必要性に関する研究, *学校保健研究*, 58 (3), 168-179, 2016

## その他の論文

市瀬 孝道、戸次 加奈江、伊藤 智彦：PM2.5 の炎症誘導とアレルギーへの影響，健康の科学，58 (9)，601-606，2016

岩崎 香子：CKD 患者の骨質と骨折，Clinical Calcium，24，1809-1814，2016

岩崎 香子：高齢者における骨管理，腎臓内科・泌尿器科，5，235-240，2016

岩崎 りほ：理解して生かす保健師用語（第 15 回）アウトリーチ，地域保健，47(7)，78-79，2016

岩崎 りほ、平井 和明、板井 里枝、影山 隆之、村嶋 幸代：高齢者の健康と生活から学生が学ぶ予防的家庭訪問実習，看護展望，41(10)，42-46，2016

梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀：未来の助産師を育てています わたしたちの教育現場 22 大分県立看護科学大学大学院看護学研究科博士課程(前期)看護学専攻 実践者養成助産学コース，助産雑誌，70 (12)，1058-1062，2016

小野 美喜：大学院修士課程における NP 課程修了生の活動と成果，看護科学研究，14 (1)，14-16，2016

甲斐 倫明：日本保健物理学会の取組み，放射線安全管理学会誌，15 (2)，138-139，2016

甲斐 倫明：シーベルト，放射線安全管理学会誌，15 (1)，1-2，2016

高野 政子：大学院における小児 NP 養成を開始した経緯と教育カリキュラムの開発，小児看護，39 (4)，469-475，2016

高野 政子：米国における大学院小児 NP 教育と日本版小児 NP の教育，小児看護，39 (6)，746-751，2016

高野 政子：小児看護の現在（いま）をみつめ、未来を創造する，日本小児看護学会誌，25 (3)，103-108，2016

村嶋 幸代：保健師にかかる研修の今後のあり方ー保健師の能力を開発し、地域保健を効果的に進めるためにー，保健医療科学，65(5)，461-466. 2016

村嶋 幸代：連載「特定行為に係る看護師の研修制度」を小児領域でどう活かすかーいよいよ始動した日本版小児 NP の活動の実際ー第 9 回(最終回) 小児 NP の発展への期待，小児看護 1 月号，116-119. 2017

高比良 祥子、山田 貴子、吉田 恵理子、片穂野 邦子、松本 幸子：看護学生が認知する術後観察場面での看護師の関わり，長崎県立大学看護栄養学部紀要, 15, 1-9, 2017

## 学術講演等

市瀬 孝道：シンポジウム PM2.5 生体影響研究の最前線. 粒子状物質全般の呼吸器系への影響(実験系)，第 86 回日本衛生学会，北海道, 2016.5

市瀬 孝道：シンポジウム 1. 大気環境と子どもの呼吸. 1-2. 大気中の粒子状物質の肺の炎症とアレルギーへの影響，第 49 回日本小児呼吸器学会，富山県, 2016.10

市瀬 孝道：シンポジウム環境物質がもたらす健康影響.アレルギーなのかガンなのか！？ 大気中の粒子状物質の肺の炎症とアレルギーへの影響，日本分子生物学会，神奈川県, 2016.12

市瀬 孝道：大気中の粒子状物質の肺の炎症誘導とアレルギー増悪作用，第 46 回大気汚染公害認定研究会，大阪府, 2017.2

小嶋 光明、廣内 篤久、甲斐 倫明：急性骨髄性白血病につながる造血細胞の放射線応答，第 59 回日本放射線影響学会，広島, 2016.10

甲斐 倫明：低線量放射線の健康リスクと放射線防護：科学と社会の視点，日本保健物理学会第 49 回研究発表会，弘前市, 2016.6

甲斐 倫明：低線量放射線の健康影響に関する研究の現状と今後 ー日本保健物理学会，第 53 回アイソトープ・放射線研究発表会，東京, 2016.7

Michiaki Kai : On lessons learned from accidents, Hereditary effects and cancer risk related with lifestyle, 14th International Congress of the International Radiation Protection Association, Cape Town, 2016.5

甲斐 倫明：広島・長崎は放射線の影響と向きあうための科学の基礎になった，日本放射線影響学会公開講座，広島, 2016.10

甲斐 倫明：2015 年度学会賞受賞記念講演：放射線リスク -リスク学の発展に貢献するために，日本リスク研究学会第 29 回年次大会，大分市, 2016.11

Michiaki Kai : Radiation protection after Fukushima - What has been changed ?, University Day of IRPA14, Cape town University, , Cape town, 2016.5

影山 隆之 : 全学生と全教員が参加する定期的な家庭訪問実習, 第 44 回九州地区学生指導研究集会, 大分市, 2016.9

影山 隆之 : 学校における自殺対策, 大分工業高等専門学校特別講演会, 大分市, 2016.9

品川 佳満 : 「医療情報」を学び, 実践し, 研究・教育してきた 25 年間の経験から思うこと, 川崎医療福祉大学 医療情報学科 公開セミナー 医療情報学科 25 周年記念 医療情報シンポジウム, 岡山県, 2016.11

高野 政子 : 小児看護の現在 (いま) を見つめ, 未来を創造する, 日本小児看護学会第 26 回学術集会 会長講演, 別府市, 2016.7

Myoung Ae Choe, Noriko Kuwano, Kyung-Sook Bang, Mi Kyung Cho, Rika Yatsushiro & Yuki Kawata : The development of doctoral nursing program; Hurdles and Attainments in Korea, The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, 2017.3

村嶋 幸代 : 保健師の人材育成の推進に向けて思うこと 検討会報告を契機に成し得たいこと, 厚生労働省健康局健康課 保健師中央会議, 東京都, 2016.7

村嶋 幸代 : 多職種連携の中で保健師の専門性を発揮し, 人々の生を衛る - 保健師活動のコアをとおして -, 日本公衆衛生協会 保健師等ブロック別研修会 (九州ブロック), 沖縄県, 2016.8

村嶋 幸代 : 自治体保健師のキャリアラダーと人材育成体制の構築の推進 - 保健師に係る研修の在り方に関する検討会報告より -, 全国保健師教育機関協議会 秋季研修会, 大阪府, 2016.10

村嶋 幸代 : 自治体保健師に求められる能力と人材育成体制, 福岡県保健師協議会 20 周年記念研修会, 福岡県, 2016.10

Murashima S. : Taking a Leadership Role for Innovation in Nursing in Japan: An Example from OUNHS. The 70 Anniversary of International Nursing Symposium, Seoul, Korea, 2016.11

村嶋 幸代 : 「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」から考える公立大学の役割と課題, 公立大学協会 公立大学の在り方に関する検討会議, 東京都, 2016.12

村嶋 幸代：“地域志向のケア”教育強化に向けた取り組み 大分県立看護科学大学の場合 -「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた 地域のまちづくり事業」を中心に-, 日本赤十字広島看護大学 地域包括ケア時代に向けた看護基礎教育カリキュラム, 広島県, 2017.2

吉村 匠平：専門家チームによるコンサルテーション, 大分県合理的配慮推進事業, 大分市, 2016.9

吉村 匠平：体罰についてななめから考える, 学校心理士会大分支部 公開学習会, 大分市, 2016.10

吉田 成一：越境大気汚染物質による雄性生殖機能の低下, JARI 主催講演会, 東京都, 2016.9

## 学会発表

安部 眞佐子：Impact of season of birth and maternal folic acid supplementation on food allergy in children , EAACI, ウイーン, 2016.6

石田 佳代子：災害時に黒タグ者に対応するためのシミュレーション訓練と評価—看護師によるマネジメントのための課題—, 第 47 回日本看護学会—看護管理—学術集会, 石川県, 2016.9

石田 佳代子：災害訓練における“黒”のトリアージ・エリアでの訓練内容の検討—複数病院での災害訓練の比較—, 第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 愛知県, 2017.2

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、嵐谷 奎一、He Miao：PM2.5 の TLR2, 4 と MyD88 シグナル経路を介した肺のアレルギー増悪作用, 第 57 回大気環境学会, 北海道, 2016.9

市瀬 孝道、吉田 成一：PM2.5 による炎症反応における LPS と酸化的ストレスの関与, フォーラム 2016. 衛生薬学環境トキシコロジー, 東京都, 2016.9

市瀬 孝道、吉田 成一：PM2.5 と黄砂の単一及び複合曝露がアレルギー性気道炎症に与える影響, 日本薬学会第 137 回年会, 宮城県, 2017.3

Kato T, Suetsuna T, Shino M, Yamazaki R, Kubota N, Inobe J, Inagaki A：Predictable neuropsychological tests on driving ability for patients with brain disorders, Asia Pacific Stroke Conference 2016, Brisbane, 2016.7

稲垣 敦、大久保 三代：離島住民の健康寿命とストレス：大分県姫島村について, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016.10

稲垣 敦：体育・スポーツ科学で生まれた数理モデルや解析法（4）：ファジィ多変量解析，日本体育学会第 67 回大会，大阪，2016.8

岩崎 香子、若杉 奈央、吉江 溪介、深川 雅史、風間 順一郎：アンギオテンシン II 濃度上昇は骨脆弱性の要因と成りうる，第 59 回日本腎臓学会学術集会，横浜市，2016.6

**第 59 回日本腎臓学会 優秀演題賞**

岩崎 香子、大和 英之、松垣 あいら、中野 貴由、深川 雅史、風間 順一郎：慢性腎臓病での骨脆弱性因子は骨代謝回転とは独立している，第 36 回日本骨形態計測学会，新潟市，2016.6

岩崎 香子、田中 寿絵、大和 英之、丸山 徹、深川 雅史：アミノ酸代謝産物 p-cresyl sulfate の負荷は腎性骨症の易骨折性を増悪する，第 18 回日本骨粗鬆症学会，仙台市，2016.10

岩崎 りほ、平井 和明、甲斐 博美、野津 昭文、影山 隆之、村嶋 幸代：看護学生による予防的家庭訪問実習（第 3 報）学生の学びの様相，第 75 回日本公衆衛生学会総会，大阪府，2016.10

村嶋 幸代、福田 広美、岩崎 りほ、平井 和明、野津 昭文、影山 隆之：看護学生による予防的家庭訪問実習（第 1 報）全学的取り組みの経過，第 75 回日本公衆衛生学会総会，大阪府，2016.10

岩崎 りほ、蔭山 正子、永田 智子：市町村保健師の職業的アイデンティティの構造，第 5 回日本公衆衛生看護学会，宮城県，2017.1

Iwasaki R, Sato T, Kathy Magilvy, Kageyama T, Murashima S : Development of a project supporting aging in rural Japanese communities, 49th Western Institute of Nursing, California, 2016.4

平井 和明、岩崎 りほ、野津 昭文、影山 隆之、村嶋 幸代：看護学生による予防的家庭訪問実習（第 4 報）学生間の知的体験の様相，第 75 回日本公衆衛生学会総会，大阪府，2016.10

梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀：40～50 歳代女性の糖・脂質代謝に対するエクオール摂取の効果に関する研究，第 57 回日本母性衛生学会学術集会，東京，2016.10

松尾 妃奈、梅野 貴恵、石岡 洋子：9～11 か月児を養育する母親の子育て支援事業の認知と活用度の実態，第 57 回日本母性衛生学会学術集会，東京，2016.10

矢野 杏子、梅野 貴恵、樋口 幸：褥婦に対するマッサージ施行部位別の乳房表面温度変化と疲労の自覚についての比較，第 57 回日本母性衛生学会学術集会，東京，2016.10

緒方 文子、鳩野 洋子：交代制勤務者の慢性疲労の実態と影響要因，第 26 回日本産業衛生学会全国協議会，京都，2016.9

A. Ogata, Y. Hatono : Five day fluctuations of continuous night shift fatigue, 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, 2017.3

小嶋 光明、岩木 志保里、甲斐 倫明：放射線を繰り返し照射した C3H マウスの骨髄細胞における 染色体異常の蓄積性，第 49 回日本保健物理学会，青森，2016.6

小嶋 光明、田代 裕子、恵谷 玲央、甲斐 倫明：カロリー制限が放射線照射後の 造血幹細胞の細胞動態に与える影響～カロリー制限が放射線誘発急性骨髄性白血病を抑制するメカニズムを考える～，第 53 回放射線影響懇話会，大分，2016.7

小野 美喜、堀 英里子、中釜 英里佳、河野 優子、西部 由里奈、甲斐 博美：医療機関で遭遇する身体拘束に対する看護学生の認識，日本看護倫理学第 9 回年次大会，京都市，2016.5

甲斐 倫明、岩男 真代、小嶋 光明：甲状腺がんのスクリーニング発見率と罹患率との関係についての考察，日本保健物理学会第 49 回研究発表会，弘前市，2016.6

松本 真之介、古場 裕介、甲斐 倫明：陽子線治療時に発生する 2 次中性子線の装置間誤差要因の推定，日本保健物理学会第 49 回研究発表会，弘前市，2016.6

吉武 貴康、小野 孝二、石口 恒男、甲斐 倫明：複数回の CT 検査を受けている小児の検査理由の分析，日本保健物理学会第 49 回研究発表会，弘前市，2016.6

嶋田 和真、甲斐 倫明：喫煙習慣を考慮した日本人集団に対する放射線被ばくの生涯肺がんリスク，日本保健物理学会第 49 回研究発表会，弘前市，2016.6

甲斐 倫明：外部被ばくと内部被ばくのリスク比較，日本保健物理学会第 49 回研究発表会，弘前市，2016.6

影山 隆之、大畑 江里：成人住民の自殺念慮と関連要因：こころの健康についての大分市民意識調査から，第 75 回日本公衆衛生学会総会，大阪，2016.10

Kaori Yamauchi, Ai Otani, Ryoko Kawasaki, rieko Nakao. : Verification of a Fire Incident in a hillside City Area in Nagasaki., 2016 Joint Internal Symposium of GISUP-KOGSIS, Chuncheon, KOREA, 2016.2

西田 隆宏、川崎 智子、川崎 涼子、西原 三佳、中尾 理恵子、本田 純久：地域在住の二次予防事業対象者における転倒歴と足趾間力との関連，第 75 回日本公衆衛生学会総会，大阪市，2016.10

草野 淳子、高野 政子：在宅療養児への訪問看護師の介入に対する母親の認識，日本看護研究学会第 42 回学術集会，茨木県，2016.8

草野 淳子：医療的ケアが必要な在宅療養児の母親の技術習得に関する文献検討，第 57 回母性衛生学会学術集会，東京都，2016.10

草野 淳子、高野 政子：小児の訪問看護に対する看護師の知識・技術の不足の認識，第 36 回日本看護科学学会学術集会，東京都，2016.12

H. Utsunomiya, MA. Choe, N. Kuwano, S. Wardaningsih : Comparison of perception on menstruation and coping strategies with the menstrual symptoms between Japanese and Indonesian Women, The 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, 千葉県, 2016.3

Myoung Ae Choe, Noriko Kuwano, Kyung-Sook Bang, Mi Kyung Cho, Rika Yatsushiro & Yuki Kawata : Difference in Motivation for Joining Disaster Relief Activities as a Nurse in the future between Japanese and Korean Nursing students, The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, 2017.3

定金 香里、市瀬 孝道：手指消毒に用いられる医薬部外品がアトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼす影響，第 86 回日本衛生学会学術総会，北海道，2016. 5

定金 香里、市瀬 孝道、西川 雅高、高野 裕久：微生物由来成分 LPS と  $\beta$ -グルカン及び黄砂の複合曝露によるアレルギー性気道炎症増悪作用，第 57 回大気環境学会年会，北海道，2016. 9

杉本 圭以子：精神看護学実習における障害者副サービス事業所での学びの分析－目標の明確化と課題の追加による記録内容の変化，日本精神保健看護学会第 26 回学術集会，滋賀県，2016.6

杉本 圭以子：精神科デイケアにおけるリハビリ支援－IMR の導入、実施による利用者のリハビリの状況及び医療職者のリハビリ志向の変化，日本精神障害者リハビリテーション学会第 24 回長野大会，長野県，2016.12

工藤 渚、高野 政子：病院における在宅療養児者と家族のためのレスパイトケアの実態と課題，日本小児看護学会第 26 回学術集会，別府市，2016.7

高野 政子：小児がん患児が入院中に原籍校と ICT を用いて交流した復学プロセス，第 14 回日本小児がん看護学術集会，東京，2016.12

Myoung Ae Choe : Difference in Motivation for Joining Disaster Relief Activities as a Nurse in the future between Japanese and Korean Nursing students, The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, 2017.3

江藤由布子、林猪都子、松尾美穂 : A 市における産後 1 か月の初産婦が産後ケアを希望する背景と内容,第 57 回日本母性衛生学会学術集会,東京都,2016.10

野津 昭文、岩崎 りほ、平井 和明、川崎 涼子、福田 広美、影山 隆之、村嶋 幸代 : 看護学生による予防的家庭訪問実習 (第 2 報) : 効果測定のベースラインデータ, 日本公衆衛生学会総会, 大阪府, 2016.10

野津 昭文、石川 勝彦 : 複数評価者データに対する回帰分析の適用, 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会, 宮城県, 2017.3

矢野 博之、濱中 良志、太田 三紀、張 媚媚、松尾 哲孝、吉岡 秀克 : 放射線による 1 型コラーゲン発現調節における microRNA の機能とその発現, 日本分子生物学会年会, 神奈川県, 2016.12

西田 欣広、太田 三紀、北村 裕和、檜原 久司、花田 俊勝、濱中 良志 : マウスにおいて  $\beta$  セクレターゼは胎児発育と関連している, 日本分子生物学会年会, 神奈川県, 2016.12

樋口 幸 : 生後 1 か月児の皮膚状態と母親の認識との比較研究, 第 30 回日本助産学会, 京都, 2016.3

戸倉 史織、樋口 幸、梅野 貴恵、安部 真紀 : ベビーオイルの脂質過酸化と保存条件及び UV 照射の関連, 第 57 回日本母性衛生学会, 品川, 2016.10

竹内 いずみ、樋口 幸、梅野 貴恵、安部 真紀 : 生後 1 か月までの予防的スキンケアが皮膚バリア機能に与える影響, 第 57 回日本母性衛生学会, 品川, 2016.10

村嶋 幸代 : Initiatives of the Nurse Practitioner (NP) Education and Practice in Japan, 9th ICN, Hong Kong, 2016.9

村嶋 幸代 : Taking a Leadership Role for Innovation in Nursing in Japan: An Example from OUNHS, ソウル大学 The 70th Anniversary of SNU International Nursing Symposium, Seoul, 2016.11

國武 美希、巻野 雄介 : 確実な超音波ガイドによる末梢静脈穿刺にむけたプローブ固定装置の開発, 第 4 回看護理工学会, 岩手県, 2016.10

宮内 信治 : 物語朗読における Free Indirect Discourse の役割と意義 : 文献検討, 日本英語音声学会第 17 回関西・中国支部研究大会, 大阪市, 2016.6

森 加苗愛：糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の開発，第 21 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会，山梨，2016.9

**第 21 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会賞**

吉田 成一、村木 直美、伊藤 剛、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：微小粒子 PM2.5 の胎仔期曝露による雄性出生仔の生殖機能への影響発現のメカニズムの解析，第 57 回大気環境学会，北海道，2016.9

吉田 成一、村木 直美、伊藤 剛、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：微小粒子 PM2.5 の胎仔期曝露による出生仔免疫系への影響解析，フォーラム 2016. 衛生薬学環境トキシコロジー，東京都，2016.9

吉田 成一、市瀬 孝道：胎仔期 LPS 曝露による雄性出生仔生殖系への影響，日本薬学会第 137 回年会，宮城県，2017.3

吉村 匠平：相方との温度差がペア学習に与える影響（2），第 22 回大学教育研究フォーラム，京都，2016.3

吉村 匠平：熊本地震における学校心理士によるスタートアップ支援，学校心理士会 2016 年度大会，東京都，2016.12

## 受賞

高野 政子

平成 28 年度 大分県小児保健協会実践活動賞

岩本 里織、岡本 玲子、小出 恵子、西田 真寿美、生田 由加利、鈴木 るり子、野村 美千江、酒井 陽子、岸 恵美子、城島 哲子、草野 恵美子、齋藤 美紀、寺本 千恵、村嶋 幸代：「東日本大震災により被災した自治体職員の被災半年後の語りに見られた身体的精神的健康に影響する苦悩を生じた状況」日本公衆衛生看護学会誌, 4(1), 21-31. 2017

日本公衆衛生看護学会学術奨励賞(優秀論文部門) (再掲)

岩崎 香子、若杉 奈央、吉江 溪介、深川 雅史、風間 順一郎：アンギオテンシン II 濃度上昇は骨脆弱性の要因と成りうる, 第 59 回日本腎臓学会学術集会, 横浜市, 2016.6

第 59 回日本腎臓学会 優秀演題賞 (再掲)

森 加苗愛：糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の開発, 第 21 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 山梨, 2016.9

第 21 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会賞 (再掲)

## 10 地域貢献

### 講演等

#### 石田 佳代子

臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編，平成 28 年度大分県看護協会研修会，大分市，2016.6  
看護過程，平成 28 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2016.8

フィジカルアセスメント（心音・呼吸音・全身皮膚），平成 28 年度看護力再開発講習会（研修Ⅱ）  
～看護技術研修～，大分市，2016.10

看護記録シリーズ2 ここがポイント！わかる・できる・看護記録～PONR を中心に～，平成 28 年  
度大分県看護協会研修会，大分市，2016.11

観察〔各種資器材による観察〕，消防職員専科教育救急科（第 19 期）講義・演習，大分市，2017.2  
看護診断講義，平成 28 年度大分県立病院看護師研修会，大分市，2016.8

看護診断とアセスメント 講義・演習，平成 28 年度豊後大野市民病院看護師研修会，豊後大野市，  
2017.1

#### 市瀬 孝道

PM2.5 と黄砂の健康への影響について，大分県立看護科学大学公開講座，日田市，2015.12

#### 伊東 朋子

介護職員等による喀痰吸引等（特定の者対象）研修，NPO 法人エイエルエス大分・第三号研修，大  
分市，2016.6

介護職員等による喀痰吸引等（特定の者対象）研修，NPO 法人エイエルエス大分・第三号研修，大  
分市，2017.3

#### 稲垣 敦

健康スポーツ学概論，一般社団法人大分県スポーツ学会「平成 28 年度第 7 期スポーツ救護講習会」，  
大分市，2016.4

今日から始める 10 年後のための元気なからだづくり：手軽にできる運動に挑戦，姫島村健康づく  
り事業講習会，姫島村，2016.9

姫島スロー・サーキット・トレーニング：軽スポーツセンターの機器を使って，姫島村健康づく  
り事業研修会，姫島村，2017.3

介護予防運動：自分らしく生きるために，大分市地域ふれあいサロン事業研修会，大分市，2017.2  
ストレスを計ろう！，大分県立看護科学大学「第 18 回若葉祭」，大分市，2016.5

筋肉を計ろう！，大分県立看護科学大学「第 18 回若葉祭」，大分市，2016.5

健康・体力チェック，おおいたホームタウン推進協議会「おおいたスポーツ広場 2016」，大分市，  
2016.10

健康・体力チェック，大分トリニータホームゲーム，大分市，2016.10

健康チェック, 第 33 回緑が丘体育祭, 大分市, 2016.10  
健康チェック, 第 42 回富士見が丘体育祭, 大分市, 2016.10  
健康チェック, 大分市野津原地区「第 31 回ななせの里まつり」, 大分市, 2016.11  
健康・体力チェック, 大分市野津原地区「大分川ダムウォーキング大会」, 大分市, 2016.11  
健康・体力チェック, 大分県総合型地域スポーツクラブチャレンジ選手権, 大分市, 2017.1  
健康チェック・救護班, 2017 大分市森林セラピートレイルランニング大会 in のつはる&芽吹きウォーキング, 大分市, 2017.3  
健康チェック, 富士見が丘団地「第 5 回森林探検ウォーキング」, 大分市, 2017.3  
めじろん元気アップ体操パンフレット, 大分県介護予防体操普及推進事業, 大分県, 2016.4  
めじろん元気アップ体操動画配信 (大分県 HP・YouTube), 大分県介護予防体操普及推進事業, 大分県, 2016.4  
めじろん元気アップ体操パンフレット PDF 版、同ビッグ 4 パンフレット PDF 版 (大分県 HP), 大分県介護予防体操普及推進事業, 大分県, 2016.4

#### 梅野 貴恵

助産師教育課程, 平成 28 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2016.6  
出前講義「看護職を知ろう」, 平成 28 年度大分県立臼杵高等学校, 臼杵市, 2016.6  
4 年生「第二次性徴」と「生命誕生と命の大切さ」, 平成 28 年度大分市立三佐小学校「いのちの教育」, 大分市, 2016.10

#### 小野 美喜

大分県における NP 養成と活動の実際, 離島看護学, 鹿児島県, 2016.6  
感染予防の実際, 南海病院研修会, 佐伯市, 2016.6  
看護倫理の基礎, 大分県看護協会研修, 大分市, 2016.8  
実習指導計画・指導案の作成, 大分県実習指導者養成研修, 大分市, 2016.8-9  
実習指導案の作成, 大分県立病院実習指導者短期養成プログラム, 大分市, 2016.8  
看護倫理, 中津ファビオラ看護学校講義, 中津市, 2016.9  
専門看護別看護論演習 (成人看護), 大分県専任教員養成研修, 大分市, 2016.9,10  
看護倫理を深めよう (実践編), 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2016.11  
特定行為研修制度と NP, NPin おおち研修, 邑智市, 2016.12  
高齢者のフィジカルアセスメント, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2016.12  
高齢者の感染予防, JCHO 南海医療センター第 1 回感染全体集会, 佐伯市, 2016.6  
特定行為研修と NP 教育, 看護師が行う特定行為 in おおち, 島根県, 2016.12

#### 影山 隆之

社会福祉施設における職員のメンタルヘルス対策, 社会福祉施設管理者等人権擁護研修及びメンタルヘルス対策研修, 大分市, 2016.8  
メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センターマネジメント研修, 大分市, 2016.5

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センター課長級ト研修, 大分市, 2016.5  
教職員のメンタルヘルスとストレスチェック, 平成 28 年度大分市教育委員会第 1 回教頭研修, 大分市, 2016.6  
地域における自殺対策, 平成 28 年度豊後大野市自殺対策ゲートキーパー研修会, 豊後大野市, 2016.9  
職場におけるメンタルヘルス対策について, 大分地方気象台メンタルヘルス出前講座, 大分市, 2016.11  
職場におけるメンタルヘルス対策について, 大分県メンタルヘルス対策出前講座 (大分地方気象台), 大分市, 2016.11  
ストレスマネジメント, 消防職員幹部教育上級幹部科, 由布市, 2016.11  
職場メンタルヘルスにおける管理職の役割, 宇佐市平成 28 年度ラインケア研修会, 宇佐市, 2016.1  
自殺予防という考え方と大分市の現状, 大分市自殺対策講演会, 大分市, 2017.3  
自殺予防の必要性和ゲートキーパーの役割, 九重町民生委員児童委員協議会研修会, 九重町, 2017.3

#### 草野 淳子

平成 28 年度大分県医療的ケア教員・看護師研修会, 大分市, 2016.8

#### 後藤 成人

精神科看護の基礎, 日本精神看護協会大分県支部研修会, 大分市, 2016.7

#### 定金 香里

色が変わる不思議な花, 夏休み子どもサイエンス 2016, 大分市, 2016.8

#### 佐藤 弥生

新任訪問看護師を「訪問看護 OJT マニュアル」を使って系統的に育てよう, 大分県看護協会 平成 28 年度訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2016.4

訪問看護 OJT マニュアルを使った新任訪問看護師育成フォローアップ研修, 大分県看護協会 平成 28 年度訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2017.2

訪問看護ができること～地域包括ケアシステムにおける新たな挑戦～, 大分県訪問看護ステーション連絡協議会第 9 回事例発表会総評, 大分市, 2017.1

実践的な事例のまとめ方 パワーポイントでの発表方法, 別府市訪問看護ステーション連絡協議会・在宅看護研修会, 別府市, 2016.8

病院・訪問看護相互体験事業「第 2 回体験者等交流会」講師, 大分市保健所 看護地域ネットワーク推進事業, 大分市, 2017.3

『地域で支えるエンド・オブ・ライフケア』 パネルディスカッションコーディネーター, 第 5 回大分県訪問看護フォーラム, 大分市, 2016.12

## 品川 佳満

看護研究の基礎及びデータ解析入門, 鹿児島大学 医学部保健学科 公開講座, 鹿児島県, 2016.7  
やってみよう看護研究2 文献検索と量的研究, 大分県看護協会 教育研修, 大分市, 2016.7  
ヘルスケアサービス管理論, 看護協会 認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修, 大分市,  
2016.12  
情報科学, 大分県専任教員養成講習会, 大分市, 2016.5

## 杉本 圭以子

やってみよう看護研究 ステップ1, 大分県看護協会 教育研修, 大分市, 2016.5  
やってみよう看護研究 ステップ1, 大分県看護協会 教育研修, 大分市, 2016.6  
ストレスの理解、セルフケア、よりよい人間関係を築くためのコミュニケーション法, 大分市役所  
採用4年目職員メンタルヘルス研修, 大分市, 2016.5  
地域の医療機関の救急看護師が自殺未遂者に行う看護, 大分県立看護科学大学公開講座, 大分市,  
2016.9

## 関根 剛

犯罪被害者の治療, 大分被害者支援センター「継続研修会」, 大分市, 2016.4  
心理教育, 大分被害者支援センター「直接支援員養成講座」, 大分市, 2016.6  
職場のメンタルヘルス, 大分自治人材育成センター「新任監督者研修」, 大分市, 2016.5  
メンタルヘルス, 大分自治人材育成センター「新任係長級研修」(4回), 大分市, 2016.7  
カウンセリングの理論と実際(1), 大分いのちの電話協会「電話相談員養成講座」, 大分市, 2016.5  
カウンセリングの理論と実際(3), 大分いのちの電話協会「電話相談員養成講座」, 大分市, 2016.11  
聴くということ, チャイルドラインおおい「電話受け手ボランティア養成講座」, 大分市, 2016.10  
犯罪被害者支援とは何か, 紀の国被害者支援センター「平成28年度被害者支援活動員養成講座」,  
和歌山県, 2016.6  
長い電話への対応, 和歌山いのちの電話協会「月例研修会」, 和歌山県, 2016.6  
面接技法, 大分県看護協会「Eラーニングを活用した訪問看護師養成講習会」, 大分市, 2016.7  
カウンセリングの原理と実際, 大分県看護協会「保健師.助産師.看護師実習指導者講習会」(2日間),  
大分市, 2016.7  
被害者の心理と相談対応, 山口県警察学校, 山口県, 2016.9  
相談対応の基本, 大分県警察学校, 大分市, 2016.9  
犯罪被害者の心理と被害者支援, 大分県警察学校, 大分市, 2016.9  
国民の期待に応える警察活動—警察官目線の見直し, 大分県警察学校, 大分市, 2017.2  
支援センターにおけるコーディネーターの役割, 全国被害者支援ネットワーク「平成27年度春期  
全国研修会」, 東京都, 2016.1  
研修の企画, 全国被害者支援ネットワーク「平成27年度春期全国研修会」, 東京都, 2017.1  
惨事ストレス対策, 大分県消防学校, 大分市, 2017.3

関係機関との連携Ⅱ心理支援，全国被害者支援ネットワーク「平成 28 年度秋期全国研修会」，東京都，2016.10

スーパーバイズ，大分いのちの電話，大分市，2016.7

スーパーバイズ，大分いのちの電話，大分市，2016.9

スーパーバイズ，大分いのちの電話，大分市，2016.12

スーパーバイズ，大分いのちの電話，大分市，2017.1

児童生徒や保護者との信頼関係を築くコミュニケーション，大分県教育委員会「コミュニケーション能力向上研修」，大分市，2016.6

危機時のこころのケア総論，大分県こころとからだの相談支援センター「平成 28 年度 CRT 隊員養成研修」，大分市，2016.7

こころのアセスメントと心理的アプローチ，豊肥保健所「在宅難病患者支援研修会」，豊後大野市，2017.2

利用者に対する円滑なコミュニケーションの持ち方，大分市社会教育関係職員研修会，大分市，2016.7

支援技術，かがわ被害者支援センター「ボランティア相談員養成講座」，香川県，2016.9

チームワークとメンタルケア，全国被害者支援ネットワーク「平成 28 年度九州・沖縄ブロック質の向上研修」，大分市，2016.7

被害者への関わり方（県民として），大分被害者支援センター「被害者支援ボランティア養成講座」，大分市，2016.9

全国被害者支援ネットワークと支援者の育成，大分被害者支援センター「被害者支援ボランティア養成講座」，大分市，2017.2

被害者をとりにまく状況，大分被害者支援センター「被害者支援ボランティア養成講座」，大分市，2017.2

全国被害者支援ネットワークと人材育成，大分被害者支援センター「被害者支援ボランティア養成講座」，大分市，2017.2

こころの健康とゲートキーパーの役割，臼杵市保健所「ゲートキーパー養成講座」，臼杵市，2017.2

## 高野 政子

たんの吸引の基礎と指導ポイント（講義・演習），平成 28 年度第 1 回医療的ケア看護師研修会，大分市，2016.4

重度障がい児者の障がい・疾病に関する理解と医療的ケアについて，平成 28 年度 医療的ケア実施校担当者等研修会，大分市，2016.5

重症心身障がい児者の健康管理，平成 28 年度大分県立別府支援学校校内研修会，別府市，2016.7

重度・重複障がいのある児童生徒の摂食指導，平成 28 年度 重度・重複障がい教育研修会，大分市，2016.7

呼吸と緊急時の対応、たんの吸引の基礎（講義・演習），平成 28 年度 第 2 回医療的ケア研修，大分市，2016.8

健康の把握と誤嚥、経管栄養の基礎（講義・演習），平成 28 年度 第 3 回医療的ケア研修，大分市，2016.8

経管栄養の基礎、経鼻経管栄養の実施と手順（講義・演習），平成 28 年第 2 回医療的ケア看護師研修会，大分市，2016.8

医療的ケアを要する子どもたちへの支援や関わり方について，平成 28 年度大分県立臼杵支援学校医療的ケア校内研修会，臼杵市，2016.8

医療的ケア、特に呼吸、摂食介助と姿勢，平成 28 年度大分県立大分支援学校校内研修会，大分市，2016.8

急変時・緊急時の措置と対応，平成 28 年第 3 回医療的ケア看護師研修会，大分市，2016.12

専門領域別看護論演習，平成 28 年度大分県専任教員養成講習会，大分市，2016.9-10

小児看護学，平成 28 年度大分県看護協会主催実習指導者講習会，大分市，2016.9

### 田中 佳子

フィジカルアセスメントⅠ 確実に身につくフィジカルアセスメント（呼吸・循環編），平成 28 年度大分県看護協会研修会，大分市，2016.6

各種器材による観察，消防職員専科教育救急科(第 19 期)，大分市，2017.3

### 藤内 美保

臨床に役立つフィジカルアセスメント，大分県看護協会研修会，大分市，2016.4

フィジカルアセスメント，広島大学講義，広島市，2016.5

出前授業 大分県立看護科学大学の特長と看護の魅力，杵築高校 出前授業，杵築，2016.7

看護論，大分県看護協会専任教員講習会，大分市，2016.7

看護研究とは，竹田西部地区研究学会特別講義，竹田市，2016.8

包括的ヘルスアセスメント，名桜大学講義，沖縄県，2016.9

高めようフィジカルアセスメント能力 -事例を中心に-，大分県看護協会研修会，大分市，2016.8

臨地実習指導短期教育プログラム 実習指導の意義，大分県立病院実習指導者研修会，大分市，2016.8

フィジカルアセスメント，大分赤十字病院 新人看護師研修会，大分市，2016.8

実習指導案・指導計画，大分県看護協会 実習指導者講習会，大分市，2016.8

フィジカルアセスメント（呼吸・循環），別府医師会看護師研修会，別府，2016.9

チーム医療，認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程，広島県，2016.10

特定行為研修，病院看護管理者研修会 大分県医療政策課，大分市，2016.10

看護研究の楽しさ，西部地区看護研究学会，日田市，2017.3

臨床実践に役立つフィジカルアセスメント，福岡県医師会卒後看護職研修会，福岡県，2017.3

### 徳丸 由布子

助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）導入・活用について事例提供，大分県職能別交流集会 助産師職能交流集会，2016.9

## 平野 互

福祉における権利擁護 ―権利としての自立とその支援, 大分県社会福祉介護研修センター 県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市, 2016.5

ASD 児の未来のために ～専門職に寄せる親の願い～, 大分県平成 28 年度発達障がい者支援専門員養成研修 (初級), 大分市, 2016.6

「障がいのある人もない人も心豊かに暮らせる大分県づくり条例」～「条例をつくる会」の取り組みと込められた思い, 杵築市 障害者差別解消法施行に伴う職員研修会, 杵築市, 2016.4

かけがえのない存在として向き合う, 大分県 社会福祉施設管理者等人権擁護研修, 大分市, 2016.8

発達障がいの特性理解と支援, 大分県社会福祉介護研修センター 第 1 回相談業務担当者職員研修, 大分市, 2016.8

障がい者差別の解消と自分らしく生きられる社会のあり方, 別府市身体障害者福祉団体協議会福祉公開講座, 別府市, 2016.9

障がいがあっても安心して生きられる社会へ ～発達障がいの特性理解と「社会モデル」～, 日田市 地域療育セミナー, 日田市, 2016.11

## 村嶋 幸代

保健師活動の見える化を目指そう ―保健師活動のコアを通して―, 千葉県市町村保健活動連絡協議会 通常総会における特別講演, 千葉県, 2016.5 公衆衛生看護活動の専門性と展望, 公益財団法人東京都医学総合研究所 都医学研夏のセミナー, 東京都, 2016.6

在宅医療に求められる看護師の役割 ～NP 教育と特定行為研修～, 第 5 回東北在宅医療連携フォーラム, 宮城県, 2016.7

これからの世代の保健師を育て育ちあう ―保健師活動のコアを通して―, 熊本県職員保健師会研修会, 熊本県, 2017.1

保健師の人材育成体制構築の推進に向けて ～保健師に係る研修のあり方等に関する検討会報告より～, 全国保健師長会大分県支部 第 1 回研修会, 大分市, 2016.6

大学の教育課程, 大分県看護協会 保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2016.6

保健師のキャリアラダーと研修 ―保健師に係る研修の在り方に関する検討報告会より―, 大分県看護協会 教育研修 「保健師のキャリアラダーと研修」, 大分市, 2016.7

女性管理職への期待: 女性の活躍が未来の日本を創る, 大分市公立学校等女性管理職研究協議会秋季研修会, 大分市, 2016.11

医療介護連携: 今こそ看護が手をつなごう 看護が手をつなぐ必要性・利点・方法論, 大分県南部保健所 看護連携強化フォーラム, 佐伯市, 2016.12

「保健師の基礎教育・アドバンス教育―地方創成に不可欠な人材としての力を発揮するために―」, 大分県立看護科学大学 卒業生保健師研修会, 大分市, 2017.3

## 森 加苗愛

糖尿病ケア概論, 福岡県立大学認定看護師教育課程糖尿病看護学科講義, 福岡, 2016.8

森 加苗愛：目からウロコ！糖尿病教室の作り方，島根県糖尿病看護研修会，島根県，2017.1

## 山田 貴子

フィジカルアセスメント1 確実に身につくフィジカルアセスメント（呼吸・循環器編），大分県看護協会研修会，大分市，2016.6

消防職員専科教育救急科 観察〔各種資器材による観察〕講義，消防学校，大分市，2017.2

## 吉村 匠平

特別支援に係る人たちのネットワークづくり，平成 28 年度九重町特別支援教育コーディネーター等研修会，九重町，2017.2

コミュニケーション能力開発，平成 28 年度 大分市西部地区新人看護職研修会，大分市，2017.2  
保育コンサルテーション，社会福祉法人皆輪会つくし保育園、別府つくし保育園 研修会，福岡県，2016.4

コミュニケーション論 I，大分医師会立アルメイダ病院 初任者研修，大分市，2016.6

プリセプター研修，大分医師会立アルメイダ病院 プリセプター研修，大分市，2016.7

「ライフスタイル」を通じた多様性の理解，大分県立病院実習指導者短期教育プログラム，大分市，2016.8

コミュニケーション演習（2），大分医師会立アルメイダ病院 初任者研修，大分市，2016.11

専門チームによるコンサルテーション，大分県合理的配慮推進事業，大分市，2016.11

## 研究指導

大分赤十字病院	桑野 紀子、定金 香里
国立病院機構西別府病院	高野 政子、吉田 成一
大分県立病院	石田 佳代子、秋本 慶子
大分市医師会アルメイダ病院	巻野 雄介、吉村 匠平
中津市民病院	赤星 琴美、安部 眞佐子
大分中村病院	平野 互
独立行政法人国立長寿医療研究センター 衛藤病院	福田 広美 後藤 成人、小嶋 光明 S

## 学会その他の役員等

### 赤星 琴美

大分県介護保険審査会 委員  
大分県国民健康保険審査会 委員  
大分市建築審査会委員  
大分市風俗関連営業建築物審議会委員  
第3期大分市食育推進計画策定検討委員会 委員  
大分市社会福祉審議会 委員  
大分市からだが喜ぶ食育応援店普及推進協議会 委員  
大分県国民健康保険団体連合会情報公開および個人情報保護審査会 委員  
大分県国民健康保険団体連合会介護サービス苦情処理委員会 委員  
大分県国民健康保険団体連合会介護給付費等審査委員会 委員  
一般社団法人全国保健師教育機関協議会 震災プロジェクト委員会 委員  
日本地域看護学会 教育委員会 委員  
大分県保健師連絡会 委員  
佐賀大学大学院：非常勤講師

### 石田 佳代子

中津ファビオラ看護学校 非常勤講師

### 伊東 朋子

大分県看護協会（学会委員会副委員長）  
日本ALS協会大分県支部運営委員

## 稲垣 敦

大分県スポーツ学会 代表理事・理事長  
日本体育測定評価学会 会長  
日本体育測定評価学会 常任理事  
日本体育学会測定評価専門領域 代表  
日本体育学会 代議員  
日本体育学会 学会賞選考委員  
浅田学術奨励賞 選考委員  
日本体育測定評価学会 事務局長  
日本体育測定評価学会第16回大会 大会長  
日本体育測定評価学会第16回大会 事務局長  
Nスポーツ倶楽部 顧問  
ななせの里まつり 実行委員  
大分市森林セラピートレイルランニング in のつはる 実行委員  
大分県介護予防市町村支援委員会運動機能向上専門部会 委員

## 岩崎 香子

日本骨粗鬆症学会評議員  
ROD21 研究会幹事

## 梅野 貴恵

大分県母性衛生学会理事（副会長兼事務局長）  
大分県ナースセンター事業運営委員

## 小嶋 光明

大分大学医学部臨床研究審査委員  
日本放射線影響学会 60 回記念事業組織委員  
日本放射線影響学会災害対応委員

## 小野 美喜

日本看護倫理学会評議員  
日本看護倫理学会査読委員  
日本看護倫理学会第10回年次大会大会長  
中津フェビオラ看護専門学校 看護倫理 非常勤講師  
大分県看護協会 実習指導者講習会 講師  
大分県看護協会 看護専任教員養成課程講師  
大分県看護協会 看護倫理の基礎（8月）実践編（11月）講師  
大分県立病院「実習指導者養成短期プログラム」講師

大分県看護協会「高齢者のフィジカルアセスメント」講師

#### 甲斐 倫明

大分県防災会議委員  
公益財団法人放射線影響研究所科学諮問委員  
一般社団法人日本放射線影響学会学術評議員  
一般社団法人日本保健物理学会会長  
人事院安全専門委員会委員  
国立研究開発法人審議会委員

#### 影山 隆之

日本精神衛生学会副理事長  
日本精神衛生学会編集委員長  
日本自殺予防学会常務理事  
日本自殺予防学会編集委員長  
日本産業衛生学会編集委員  
日本学校メンタルヘルス学会評議員  
日本社会精神医学会評議員  
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定等委員会会長  
豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者  
大分県自殺対策連絡協議会副会長  
大分県環境影響評価技術審査会委員  
日本産業ストレス学会評議員  
生涯健康県おおいた21喫煙対策部会委員  
大分県医療ロボット・機器産業協議会看護関連機器開発部会会長  
大分県産業保健総合支援センター相談員

#### 草野 淳子

一般社団法人日本小児看護学会第26回学術集会事務局長  
一般社団法人日本小児看護学会第26回学術集会企画・実行委員

#### 桑野 紀子

大分県看護協会実習指導者講習会講師  
日本国際看護学会研究委員会

#### 佐伯 圭一郎

日本民族衛生学会評議員  
大分県情報公開・個人情報保護審査会委員

日本看護科学学会和文誌編集委員

**定金 香里**

日本生理学会評議員・エドゥケーター  
平松学園大分リハビリテーション専門学校非常勤講師  
大分県環境影響評価技術審査会委員  
大分県リサイクル認定製品審査会委員  
大気環境学会健康影響分科会幹事  
大分県理科・化学教育懇談会幹事

**佐藤 弥生**

平成 28 年度中津市地域ケア会議専門職助言者  
平成 28 年度アドバイザー派遣事業推進会議実務者委員  
平成 28 年度アドバイザー派遣事業アドバイザー  
大分県看護協会 看護師職能委員Ⅱ  
大分県委託事業 大分県看護協会訪問看護推進協議会委員

**品川 佳満**

別府医療センター附属大分中央看護学校 非常勤講師

**秦 さと子**

大分県脳卒中懇話会 世話人  
大分県看護協会 教育委員（副委員長）

**関根 剛**

（公益社団法人）大分被害者支援センター 副理事長  
（公益社団法人）全国被害者支援ネットワーク 理事  
消防庁緊急時メンタルサポートチーム メンバー  
大分県こころの緊急支援チーム 委員・メンバー  
大分いのちの電話 スーパーバイザー  
大分地方裁判所裁判所委員会 委員

**高野 政子**

日本小児がん看護学会査読委員  
日本小児看護学会第 26 回学術集会 会長  
日本小児看護学会第 26 回学術集会企画・実行委員会委員  
大分県看護協会学会委員会  
大分県小児保健協会 理事

九州沖縄小児看護教育研究会 理事  
日本看護研究学会九州沖縄地方会 理事  
日本小児看護学会災害対策委員会 委員  
日本小児看護学会 評議員  
大分県特別支援学校第三者評価委員会 委員  
大分県医療的ケア連絡協議会 会長

#### 藤内 美保

大分県看護協会理事  
大分県専任教員養成講習会検討委員会  
大分県医療費計画策定協議会委員  
大分県医療費適正化推進行議会副委員長  
日本 NP 学会理事  
日本 NP 教育大学院協議会社員  
私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本型地域ケア実践開発研究事業」事業評価委員  
自治医科大学特定行為研修管理委員会委員  
日本看護学会学術集会急性期看護（大分県看護協会主催）実行委員長  
大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会委員  
広島県認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師  
広島大学客員教授  
名桜大学非常勤講師  
中津ファビオラ看護学校非常勤講師  
厚生労働省 看護師の特定行為に係る指定研修機関連絡会議委員

#### 林 猪都子

大分県准看護師試験委員  
大分市おおいた都心まちづくり委員  
大学コンソーシアムおおいた 運営委員  
大分県助産師会 県中地区理事  
大分県母性衛生学会 理事

#### 樋口 幸

大分県母性衛生学会 幹事兼事務局  
大分市産学交流サロン事業検討委員会 委員

#### 平野 互

福岡大学法科大学院非常勤講師  
九州大学大学院医学系学府非常勤講師

医療事故防止・患者安全推進学会 理事  
大分県発達障がい研究会 理事  
大分県医療コンフリクトマネジメント研究会 世話人  
大分県人権尊重社会づくり推進審議会 副会長  
大分県地域・職域連携推進部会 委員  
大分県特別支援連携協議会 委員  
大分県立特別支援学校第三者評価委員会 委員  
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員  
別府市親亡き後等の問題解決策検討委員会 委員  
大学コンソーシアム佐賀 大学間連携共同教育事業外部評価委員  
大分県発達障がい者支援体制検討会議 アドバイザー  
大分県障がい者差別解消支援地域協議会 委員  
大分県立病院 研究倫理委員会 委員  
大分県立病院 臨床倫理委員会 委員  
大分県立病院 治験審査委員会 委員

#### 福田 広美

大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会委員  
大分地方労働審議会委員  
陸上競技場管理予定者選定等委員会委員  
大分県社会福祉審議会委員  
日本看護協会認定看護管理者教育運営委員  
日本NP教育大学院協議会 NP 資格認定試験委員

#### 掘 裕子

第49回 日本看護学会急性期看護学術集会  
日本看護倫理学会 第10回年次大会

#### 宮内 信治

大分市立横瀬小学校学校評議員  
大分県高等学校教育研究会英語部門 顧問  
大分県立芸術文化短期大学 非常勤講師  
日本英語音声学会常任理事

#### 村嶋 幸代

日本学術会議看護学分科会 委員:連携会員  
公益社団法人 日本看護科学学会 理事  
社員 (代議員)



## 森 加苗愛

日本糖尿病教育・看護学会理事  
日本糖尿病教育看護学会 政策委員  
日本糖尿病教育看護学会 評議員  
日本糖尿病教育・看護学会 表彰委員  
日本糖尿病教育看護学会 編集委員  
公益社団法人 日本糖尿病協会 編集委員会  
日本下肢救済・足病学会 評議員  
第 22 回日本糖尿病教育・看護学会 企画委員会

## 吉田 成一

日本薬学会 代議員  
日本アンドロロジー学会 評議員  
精子形成・精巣毒性研究会 評議員  
光化学オキシダント等大気汚染物質 文献レビュー検討会 委員

## 吉村 匠平

学校心理士会 大分支部 支部長  
平成 28 年度大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム委員  
九重町教育支援センター 教育相談員  
社会福祉法人皆輪会 つくし保育園 別府つくし保育園 相談員

## 10 地域貢献

### 講演等

#### 村嶋 幸代

保健師活動の見える化を目指そうー保健師活動のコアを通してー, 千葉縣市町村保健活動連絡協議会 通常総会における特別講演, 千葉県, 2016.5

博士学生への講義 「看護教育・研究の現状と課題」, 九州大学 講義, 福岡県, 2016.6

公衆衛生看護活動の専門性と展望, 公益財団法人東京都医学総合研究所 都医学研夏のセミナー, 東京都, 2016.6

在宅医療に求められる看護師の役割 ～NP 教育と特定行為研修～, 株式会社大塚製薬仙台支店 第5回東北在宅医療連携フォーラム, 宮城県, 2016.7

これからの世代の保健師を育て育ちあうー保健師活動のコアを通してー, 熊本県職員保健師会 研修会, 熊本県, 2017.1

保健師の人材育成体制構築の推進に向けて ～保健師に係る研修のあり方等に関する検討会報告より～, 全国保健師長会大分県支部 第1回研修会, 大分市, 2016.6

大学の教育課程, 大分県看護協会 保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2016.6

保健師のキャリアラダーと研修ー保健師に係る研修の在り方に関する検討報告会よりー, 大分県看護協会 教育研修 「保健師のキャリアラダーと研修」, 大分市, 2016.7

女性管理職への期待: 女性の活躍が未来の日本を創る, 大分市公立学校等女性管理職研究協議会 秋季研修会, 大分市, 2016.11

医療介護連携: 今こそ看護が手をつなごう 看護が手をつなぐ必要性・利点・方法論, 大分県南部保健所 看護連携強化フォーラム, 佐伯市, 2016.12

基調講演「保健師の基礎教育・アドバンス教育ー地方創成に不可欠な人材としての力を発揮するためにー」, 大分県立看護科学大学 卒業生保健師研修会, 大分市, 2017.3

## 学会その他の役員等

### 村嶋 幸代

日本学術会議看護学分科会 委員:連携会員

一般社団法人 日本看護系大学協議会 理事  
監事

一般社団法人 日本看護系学会協議会 監事

一般社団法人 全国保健師教育機関協議会 副会長

一般社団法人 日本 NP 教育大学院協議会 副会長

一般社団法人 日本 NP 学会 副会長

一般社団法人 日本地域看護学会 理事

日本公衆衛生学会 理事 (職能別)

評議員 (職能別)

一般社団法人 日本看護研究学会 査読委員

日本在宅ケア学会 監事および評議員

日本公衆衛生看護学会 理事

広報委員長

一般社団法人 日本看護管理学会 評議員

日本看護科学学会 理事 (会計担当)

社員 (代議員)

国立保健医療科学院 評価委員

宮崎県地方独立行政法人評価委員会 評価委員

学校法人産業医科大学 評議員

一般財団法人日本公衆衛生協会 評議員

公益財団法人医療科学研究所 評議員

社会福祉法人三井記念病院 評議員

大分県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会 評価委員

大分県医療審議会 委員 (学識経験者)

健康寿命日本一おおいた創造会議 委員

生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員

大分県国民保護協議会 委員

大分県公私立学校教育協議会 委員

大分市教育委員会「教育に関する事務の管理および執行の状況についての点検および評価」

評価者 (学識経験者)

いきいき健康大分市民 21 第 2 回策定検討委員会 委員長

おおいたホームタウン推進協議会 会員

ホルトホール大分指定管理予定者選定等委員会 委員

大分市国際都市交流親善会議 役員

## 11 助成研究

村嶋 幸代 (学長)

地 (知) の拠点整備事業補助金 (COC)  
文部科学省

村嶋 幸代 (学長)

地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)  
文部科学省

村嶋 幸代 (学長)

地方創生大学等連携プロジェクト支援事業  
大分大学

村嶋 幸代 (学長)

看護師の特定行為に係る研修機関導入促進支援事業  
厚生労働省

村嶋 幸代 (学長)

訪問看護における特定行為の効果検証事業委託業務  
大分県

麻生 優恵

高齢者施設用木製椅子の座り心地に関する研究  
株式会社中津家具

安部 真紀

育児期男女のパーソナルネットワークの構造特性と育児サポート体制への課題  
日本学術振興会 科学研究費 若手研究(B)

石田 佳代子

災害時における黒タグ者に対する活動モデルの実用化に向けた教育プログラムの開発  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

市瀬 孝道、吉田 成一

大陸から越境輸送される有害な空中微生物の検出と実験研究による呼吸器系への影響評価  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(B)

**市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里**

黄砂と PM2.5 による複合大気汚染の肺炎、アレルギー疾患増悪作用とメカニズム解明  
環境省 環境研究総合推進費

**市瀬 孝道**

砂漠地帯から越境輸送される黄砂バイオエアロゾルを標的とした高高度大気調査  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(B)海外学術調査 (分担)

**伊東 朋子**

看護基礎教育における放射線教育パッケージの製作および教育支援システムの開発  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(B) (分担)

**梅野 貴恵**

母乳育児経験のある更年期女性の糖・脂質代謝に対するエクオールサプリメントの効果  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**緒方 文子**

5日間連続夜勤による疲労とストレスの変動  
日本学術振興会 科学研究費 若手研究(B)

**小野 美喜**

特定行為に係る看護師が経験する倫理的解決の方略に関する研究  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**甲斐 倫明**

小児 CT 診断の検査理由分析による白血病・脳腫瘍罹患率の放射線リスクの逆因果分析  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**甲斐 倫明**

学部及び大学院教育における放射線看護教育カリキュラムの開発研究  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(B) (分担)

**甲斐 倫明**

検出器 80 列以上の多列化 CT 診断時臓器線量計算法の開発と WAZA-ARI の拡張  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C) (分担)

#### 甲斐 倫明

低線量率放射線長期連続照射によるマウス急性骨髄性白血病の起因となる PU.1 遺伝子変異の線量率依存性の解析～放射線発がんの線量率効果の仕組みを考える～  
公益財団法人原子力安全研究協会

#### 影山 隆之

交代勤務者の業務上エラーのリスク要因に関する研究：職種・労働時間・睡眠との関連  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

#### 影山 隆之

学校現場の日常的活動の中で実施できる児童生徒の自殺予防プログラムの開発と応用  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C) (分担)

#### 影山 隆之

こころの健康についての大分市民意識調査分析業務  
大分市

#### 川崎 涼子

倫理的課題・ジレンマに対応する保健医療人材育成のための基盤的研究  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

#### 川崎 涼子

地理的不利条件下の住民の防災とソーシャルキャピタルの活用：長崎市斜面市街地の調査  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C) (分担)

#### 河野 優子

在宅高齢者の肺炎に対する高度実践看護師 (NP)の活動成果と役割モデルの構築  
日本学術振興会 科学研究費 若手研究(B)

#### 草野 淳子、高野 政子、足立 綾

在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

#### 佐伯 圭一郎

看護系大学共用試験 CBT システムソフトウェアの汎用化改修と教育場面への導入  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**佐伯 圭一郎**

看護教育におけるインシビリティー (incivility) 尺度の開発  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C) (分担)

**佐藤 弥生**

市民の集い開催：「在宅医療」知っていますか？家で最期まで療養したい人に。  
勇美記念財団

**秦 さと子**

加齢による嚥下機能低下予防のための運動方法の検討  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**秦 さと子**

加齢性の嚥下機能低下に対するケール搾汁粉末溶液の改善効果の研究  
ヤクルトヘルスフーズ株式会社

**高野 政子**

タブレット端末使用により ICT 環境を整備し院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援  
日本学術振興会 科学研究費 挑戦的萌芽研究

**藤内 美保、佐藤 弥生**

フィジカルアセスメントに基づく日常生活行動・薬剤投与量調節の判断のツール開発  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**藤内 美保、福田 広美、山田 貴子、田中 佳子**

高度実践看護師の臨床推論に基づくフィジカルアセスメント継続教育支援プログラム開発  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**濱中 良志**

骨形成を制御する新規分泌調整機構の解明  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(C)

**樋口 幸**

母体環境と新生児の胎脂脂質組成との関連とその過酸化脂質が皮膚に与える影響  
日本学術振興会 科学研究費 若手研究(B)

**巻野 雄介**

日本の看護場面で実践可能な超音波ガイド下末梢静脈穿刺法の開発と有用性の検証  
日本学術振興会 科学研究費 若手研究(B)

**村嶋 幸代**

高齢者プライマリ・ケア領域の高度実践看護師 (NP)の養成効果と教育モデルの開発  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(B)

**村嶋 幸代**

公衆衛生のリーダー養成に資する修士課程保健師教育の強化：公衆衛生学との連携可能性  
日本学術振興会 科学研究費 挑戦的萌芽研究

**吉田 成一**

胎仔期の越境微小粒子曝露と出生仔の雄性生殖機能低下と気管支喘息増悪への次世代影響  
日本学術振興会 科学研究費 基盤研究(B)

**吉田 成一**

妊娠期の微小粒子曝露が母体環境に与える影響  
日本学術振興会 科学研究費 挑戦的萌芽研究

## 12 各種研究・研修派遣

江藤 由布子

派遣先 平成 28 年度 特定分野（助産）における保健師助産師看護師実習指導者講習会  
研修期間

6 月 18 日～19 日、7 月 16 日～17 日、8 月 20 日～21 日

本研修は全国助産師教育協議会によって行われ、効果的な助産学実習・演習指導のために必要な知識・技術を修得することを目的としたものである。研究支援旅費を受け、上記講習会に参加した。6 日間の課程の中で教育および助産に関する科目や実習指導に関する科目を受講し、計 8 事例の実習指導案の作成・発表にグループワークで取り組んだ。演習・実習指導に活かすことのできる実践的な知識や能力を得ることができ、全課程の修了認定を受けた。

恵谷 怜央

派遣先 国家公務員共済組合連合会 新別府病院  
研修期間

5 月 25 日、6 月 1 日、8 日、15 日、22 日、28 日、7 月 13 日、27 日、  
8 月 3 日、10 日、18 日、23 日、31 日、9 月 5 日、21 日、28 日

国内派遣研修制度を利用し、上記病院の放射線科において研修を行った。実際の臨床現場において、経験豊富な診療放射線技師の指導の下で技師としての標準的な実践能力を修得することを目的として研修を行った。全 16 日間の研修の中で、一般撮影検査部門や X 線 CT 検査部門などで撮影業務に従事した。研修を通して学内教育に必要な情報と最新の見識を得ることができた。

平成 29 年 3 月 3 日（金）のアニュアルミーティングにて研修報告を行った。

## 宮内 信治

派遣先 米国ハワイ州ホノルル市内 Waikiki Health Center, Queen' s Medical Center ほか、  
クリニック・病院・大学など 12 か所

研修期間

3月11日～3月28日

米国ナースプラクティショナー（NP）の実践活動及び養成教育について視察するためにハワイ州ホノルル市内の Waikiki Health Center、Queen' s Medical Center、University of Hawaii など 12 か所を訪問し、視察、懇談した。クリニック Care-A-Van では、実際に診療活動をしている NP の様子をシャドウの形で観察し、フィジカルアセスメント、患者への検査結果や状況説明、処方発行の様子などに触れた。Hawaii Pacific University、University of Hawaii それぞれで NP 養成教育に携わる教授 3 名と面談し、高度実践看護師養成における倫理教育、臨床推論などの実施方法やその要諦などについて検討し知見を得た。

## 杉本 圭以子

派遣先 日本精神障害者リハビリテーション学会 第 24 回長野大会

開催期間

11月30日～12月2日

研究支援旅費を受け、上記学会に参加した。本学会は、精神障害者が地域の暮らしや活動を通じて社会参加することをめざし、医療職、福祉職をはじめ当事者や家族も参加し、活発に討論、研究発表が行われた。本学奨励研究として実施している「精神科デイケアにおけるリカバリー支援 –IMR の導入、実施による利用者のリカバリーの状況及び医療職者のリカバリー志向の変化–」について、口頭発表し、意見交換をおこなった。

リカバリー、ピアサポート、就労支援、家族支援、退院促進など、精神障害者を支援する各機関の実際の取り組みを知ることで研究のみならず、精神看護学の講義、演習、実習指導に活かすことができる知識を得た。

### 13 学部研究者の受入

本学教員 稲垣 敦

受入者 保科 早苗

大分県内のマウスガード提供歯科医院マップを作成するための実態調査を行なった。

本学教員 稲垣 敦

受入者 大戸 元気

リハビリ効果を評価するための基礎的研究として、3軸加速度計を用いて歩行の個性を評価する実用的な方法を開発した。

## 14 役員及び審議会委員名簿

### 1 役員

理事長 (学長)		村嶋 幸代
理事	学部長	藤内 美保
理事	研究科長	影山 隆之
理事	事務局長	飯田 隆次
理事 (非常勤)	大分大学医学部附属病院長	津村 弘
理事 (非常勤)	社会医療法人小寺会理事長	小寺 隆
理事 (非常勤)	大分経済同友会恒久監事	高橋 靖周
監事 (非常勤)	大分県看護協会専務理事	神品 實子
監事 (非常勤)	公認会計士	福田 安孝

### 2 経営審議会

学内委員	理事長	村嶋 幸代
学内委員	理事	藤内 美保
学内委員	理事	影山 隆之
学内委員	理事	飯田 隆次
学内委員	理事 (非常勤)	津村 弘
学内委員	理事 (非常勤)	小寺 隆
学内委員	理事 (非常勤)	高橋 靖周
学外委員	弁護士	千野 博之
学外委員	立命館大学 大学評価室長	上子 秋生
学外委員	大分合同新聞社論説編集委員室長	松尾 和行
学外委員	大分県看護協会長	松原 啓子 (～H28.6.30)
		竹中 愛子 (H28.7.1～)

### 3 教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋 幸代
学内委員	学部長	藤内 美保
学内委員	研究科長	影山 隆之
学内委員	事務局長	飯田 隆次
学内委員	生体科学教授	濱中 良志
学内委員	生体反応学教授	市瀬 孝道
学内委員	健康運動学教授	稲垣 敦
学内委員	人間関係学准教授	吉村 匠平
学内委員	環境保健学教授	甲斐 倫明
学内委員	健康情報科学教授	佐伯 圭一郎
学内委員	言語学教授	G. T. Shirley
学内委員	基礎看護学准教授	伊東 朋子
学内委員	成人・老年看護学教授	小野 美喜
学内委員	小児看護学教授	高野 政子
学内委員	母性看護学教授	林 猪都子
学内委員	助産学教授	梅野 貴恵
学内委員	保健管理学教授	福田 広美
学内委員	地域看護学准教授	赤星 琴美
学内委員	国際看護学特任教授	崔 明愛
学外委員	大分大学名誉教授	葉玉 哲生

## 15 教職員名簿

### 1 専任教員

生体科学	教授	濱中 良志	
	准教授	安部 眞佐子	
生体反応学	学内講師	岩崎 香子	
	教授	市瀬 孝道	
	准教授	吉田 成一	
健康運動学	学内講師	定金 香里	
	教授	稲垣 敦	
人間関係学	准教授	吉村 匠平	
	准教授	関根 剛	
環境保健学	非常勤助手	秋本 慶子	
	教授	甲斐 倫明	
健康情報科学	准教授	小嶋 光明	H28.4.1 採用
	助手	恵谷 玲央	
	教授	佐伯 圭一郎	
言語学	准教授	品川 佳満	
	助教	野津 昭文	
基礎看護学	教授	G. T. Shirley	
	准教授	宮内 信治	
	非常勤助手	馬場 奈穂	
看護アセスメント学	准教授	伊東 朋子	
	講師	秦 さと子	
	助教	巻野 雄介	
	助教	石丸 智子	
	臨時助手	麻生 優恵	
	教授	藤内 美保	
成人・老年看護学	准教授	石田 佳代子	
	助教	山田 貴子	
	助手	田中 佳子	
	教授	小野 美喜	
	准教授	森 加苗愛	H28.4.1 採用
	助教	堀 裕子	H28.4.1 採用
	助教	中釜 英里佳	
	助教	宿利 優子	
	助手	西部 由里奈	H29.3.31 退職
	臨時助手	川村 弘樹	H28.4.1 採用 H29.3.31 退職
(NPコース担当)	助教	甲斐 博美	
	非常勤助手	後藤 朋子	H28.4.1 採用 H28.5.31 退職
小児看護学	非常勤助手	生野 直子	H28.6.1 採用
	教授	高野 政子	
	講師	草野 淳子	
母性看護学	助手	足立 綾	
	教授	林 猪都子	
	助教	江藤 由布子	
助産学	臨時助手	熊谷 幸江	H28.4.1 採用 H29.3.31 退職
	教授	梅野 貴恵	
精神看護学	助教	樋口 幸	
	助教	安部 真紀	
	臨時助手	姫野 綾	H28.9.12 採用
	教授	影山 隆之	
	講師	杉本 圭以子	
	助教	後藤 成人	

保健管理学	教授 准教授 助教 助手	福田 広美 平野 互 佐藤 弥生 吉川 加奈子	
地域看護学	准教授 准教授 助教 助手 臨時助手	赤星 琴美 川崎 涼子 緒方 文子 佐藤 愛 稗田 朋子	H28.4.1 採用  H28.4.1 採用 H29.3.31 退職 H28.9.1 採用
国際看護学 看護研究交流センター	臨時助手 講師 助教 臨時助手 臨時助手	渡辺 康人 桑野 紀子 岩崎 りほ 平井 和明 板井 里枝	H28.4.1 採用 H29.3.31 退職
2 特任教授	特任教授	崔 明愛	
3 就職相談員	就職相談員	小川 三代子	
4-1 非常勤講師 (学部)	松田 美香 劉 美貞 西 英久 石本 田鶴子 大杉 至 二宮 孝富 足立 恵理 西園 晃 麻生 良太 堀本 フカエ 横山 秀樹 宮本 修 澤田 佳孝 鈴木 篤 長谷川 祐介 関口 洋美 河野 伸子 飯田 法子 藤田 文 今井 航 松 久美 松田 貴雄 濱口 和之 井原 健二 川野 由紀枝	言語表現法 韓国語 哲学入門 大学ナビ講座 社会学入門 法学入門 (日本国憲法) 文化人類学入門 微生物免疫論 教職概論 教職概論 教職概論 音楽とところ 美術とところ 教育学概論 生徒指導 教育相談、学校教育心理学 教育相談 教育相談 学校教育心理学 教育課程論 災害看護論 看護と遺伝 看護と遺伝 看護と遺伝 看護と遺伝	
4-2 非常勤講師 (大学院)	岩波 栄逸 山口 豊 永瀬 公明  阿部 航 安東 優	老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論 老年アセスメント学演習 老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論	

工藤 欣邦	老年診察・診断学特論
	老年疾病特論
糸永 一朗	老年診察・診断学特論
	老年疾病特論
古川 雅英	老年実践演習
佐藤 博	老年実践演習
山本 真	老年実践演習
迫 秀則	老年実践演習
財前 博文	老年疾病特論
小寺 隆元	老年疾病特論
	老年薬理学演習
甲原 芳範	老年疾病特論
一万田 正彦	老年疾病特論
平井 健一	老年疾病特論
木村 成志	老年疾病特論
廣瀬 福美	NP持論
増井 玲子	疾病予防学特論
玉井 文洋	健康危機管理論
三浦 源太	疾病予防学特論
平川 英敏	薬剤マネジメント特論
藤内 修二	広域看護学概論
	健康危機管理論
	疾病予防学特論
池邊 淑子	疾病予防学特論
佐藤 貴子	地域母子保健学特論
宮崎 文子	看護教育特論
	助産マネジメント論
佐藤 昌司	周産期特論
	周産期診断技術演習
飯田 浩一	周産期特論
豊福 一輝	周産期特論
軸丸 三枝子	周産期特論
後藤 清美	周産期特論
中村 聡	リプロダクティブ・ヘルス特論
嶺 真一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
菊池 聖子	助産マネジメント演習
戸高 佐枝子	助産マネジメント論
生野 末子	分娩期診断技術特論
	助産マネジメント論
	助産マネジメント演習
宇津宮 隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
上野 桂子	母子成育支援特論
堀永 孚郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
井上 祥明	母子成育支援特論
谷口 一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論
松田 貴雄	リプロダクティブ・ヘルス特論
井上 貴史	リプロダクティブ・ヘルス特論
實崎 美奈	ウイメンズヘルス特論
佐藤 敬子	母子成育支援特論
立川 洋一	老年アセスメント学演習
久保 徳彦	老年アセスメント演習
宮川 ミカ	老年アセスメント演習
塩月 成則	老年薬理学特論
	老年疾病特論
	老年実践演習
大田 えりか	看護科学研究
塚本 容子	老年NP探究セミナー
小野 千代子	看護管理学特論
桜井 礼子	看護管理学特論

小野 剛志	老年薬理学演習
甲斐 仁美	看護管理学特論
小山 秀夫	看護政策論
小池 智子	看護政策論
立森 久照	看護政策論
中西 三春	看護政策論
前田 徹	老年実践演習
竹内 山水	老年実践演習
伊東 弘樹	老年臨床薬理学特論
佐藤 雄己	老年臨床薬理学特論
阿部 実	保健医療福祉政策論
田村 委子	NP論
草間 朋子	NP論
式田 由美子	小児看護学特論
本山 秀樹	健康危機管理論
末永 宏	健康危機管理論
大津 孝彦	地域保健特論
朝見 智子	地域保健特論
佐藤 紀子	地域保健特論
	地域母子保健学特論
吉富 豊子	地域母子保健学特論
山崎 清男	看護政策論教育特論
高波 利恵	産業保険特論

## 5 事務職員

・総務グループ	事務局長	飯田 隆次	H28.4.1 転入
	課長補佐	石倉 順	H28.4.1 転入 H29.3.31 転出
・教務学生グループ	主幹	岩崎 瑞穂	H29.3.31 転出
	主査	橋本 正和	H29.3.31 退職
	主査	高橋 めぐみ	H28.4.1 転入
	主任	中野 麻梨子	
	主事	久保 紘子	
	主事	石川 華子	H29.3.31 退職
	事務職員	片山 知美	H29.3.31 退職
	事務職員	奈須 真由美	
	事務職員	有馬 沙希	H28.4.1 採用
	主幹	浜松 弘一	
	副主幹	矢野 昌哉	H28.4.1 転入
	主査	染矢 哲朗	
	主任	神崎 正太	
事務員	安東 実咲	H28.4.1 採用 H29.3.31 退職	
・図書館管理グループ	保健師	工藤 優	
	事務職員	神崎 純子	
	事務職員	岩田 祐未	H28.5.31 退職
		生野 法子	H28.10.1 採用
	非常勤職員	白川 裕子	
	非常勤職員	挾間 由布子	
	非常勤職員	工藤 信二	H28.4.1 採用